

## 「全国地域づくり人財塾」事例報告者の地域づくり活動事例調査報告

全国地域づくり人財塾では、修了後、受講生それぞれが行う地域活動の姿をより具体的にイメージしてもらうことを目的に、修了生を講師として招聘し、地域活動の様相について報告してもらう時間を設けている。

ここでは、事例発表者の地域づくり活動を事例集として整理した。

	取組	所属	報告者
1	つながりが紡ぐストーリー～ 巡り合わせから生まれる地域づくり	千葉県千葉市	渡辺大樹
2	人も地域も発酵する町づくり～ 信州木曾町が美味しく楽しい！	長野県木曾町	都竹亜耶
3	実践あるのみ！～ 考えてるだけじゃやってないのと一緒だよー！	愛媛県宇和島市	村上将司
4	柏町限定情報紙「かしわなほっとふれす」～情報を紡いで絆づくり	埼玉県志木市	石塚匠
5	武生に来たらボルガライス～ご当地グルメで盛り上がる越前市～	福井県越前市	波多野翼
6	これからの地域経営にファンレイジングを活かす	滋賀県高島市	戸田由美
7	広域連携による人財育成～人と地域がつながる置賜へ	置賜広域行政事務組合	齋藤拓也
8	公務員として地域づくりを支える～カタクリ百万本の里山づくり～	福井県大野市	今村智子
9	伝統を紡ぐまちづくり ～「房州うちわ」の新たな展開を目指して～	千葉県館山市	秋山歌南子
10	モノモノコウカンプロジェクト～物々交換イベント開催～	鹿児島県志布志市	田中慶悟
11	人財を活かしたまちづくり～つながりから生まれる住みよさ	栃木県栃木市	鈴木晃子
12	楽しく続ける地域づくり～ 踏み出そう、はじめの一步	兵庫県朝来市	高本恵三
13	千年つづくむらさなごうち～ 小さな自治を継承していくために	徳島県佐那河内村	安富圭司
14	宮崎ベースキャンプ～「ゴミ拾い」からはじまる地域イノベーション	宮崎県宮崎市	池袋耕人
15	交流の場づくり～ 人は人で磨かれる	小平市文化振興財団	神山伸一
16	分を学ぶ「大分学」～ 自分のまちの魅力を再発見～	大分県大分市	幸重陽子
17	地域をかきまぜる ～自然と繋がる人、モノ、コト～	北海道岩見沢市	高瀬浩樹

人財塾の受講効果を見ると、講義を通じてノウハウ等の手法を学び、地域や活動の再点検に臨んだ事例発表者がいる一方で、講師の言葉等により、これまで取り組んできた活動に対する自信を得たなどの内面的な活性化につなげている事例発表者がみられた。また、受講の効果を活かし新たな活動に取り組むケースがみられた一方で、受講の効果を活動の振り返りに活かし、その後の活動の改善に役立っているケースがみられている。

		所属	氏名	これまでの取組	受講目的
1	平成27年度	千葉県 千葉市	渡辺 大樹	該当なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・漠然と捉えていた「地域づくり」とは何かを知りたい。</li> <li>・他自治体等の参加者との交流を通じて、刺激や新たな気づきを得たい。</li> </ul>
2		長野県 木曾町	都竹 亜耶	<ul style="list-style-type: none"> <li>・木曾町役場企画財政課が主管となる事業に携わりつつ自主提案事業を担当。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域づくりの分野のプロフェッショナルの手法や想いを直接的に学ぶこと。</li> <li>・全国各地の同じ志をもつ人たちとの交流を通して多様な気づきを得ること。</li> </ul>
3		愛媛県 宇和島市	村上 将司	<ul style="list-style-type: none"> <li>・御槇プロジェクト、地域インターン生受入れ、九島プロジェクト等を実施。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノウハウの習得と人脈形成。</li> <li>・全国の地域づくりに熱いメンバーとの交流。</li> </ul>
4	平成28年度	埼玉県 志木市	石塚 匠	該当なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事へのモチベーションが上がらない時期の気分転換。</li> <li>・職員が地域に飛び出すきっかけや仕組みについて先進事例を知り、情報交換したい。</li> </ul>
5		福井県 越前市	波多野 翼	<ul style="list-style-type: none"> <li>・越前市の知名度アップと気軽にできるまちづくりの証明。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・熱意をどう形にしていくかを学びたいと思い受講。</li> </ul>
6		滋賀県 高島市	戸田 由美	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受講前は自身の知見を高めることと、まずは「ファンドレイジング」という言葉を高島市内に伝えることが目標。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全国各地の地域づくり実践例を学ぶ。またその実践者との交流。</li> </ul>

このほか、受講により構築された修了生ネットワークからの発言や意見等により刺激を受け、活動のモチベーション向上につなげているケースがみられている。

人財塾で学んだこと・効果	
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域づくりのためには、フラットな立場で対話ができる環境整備が必要であることを認識し、今後の地域づくりの取組みに活かしていくこととした。</li> <li>・活動を展開していく上でキーパーソンとなるコアメンバーをいかに発掘していくかが大切であることを学んだため、今後の活動でそのような人々をつなげていくことを意識していこうと考えた。</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊重先生の講義からは地域づくりに関わる上での資質と精神、富永先生からは次世代を育てるうえでの心意気、飯盛先生からは創発に集約された具体的な手法について深い学びを得ることができた。いずれも以降の活動の指針となった。</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講師の方々の取り組みや考え方、分析について非常に学ぶところが多かった。「地域づくり」という分野はある意味カテゴライズできないものであり、講師陣やテーマ、学ぶ分野が多種多様で常に刺激を受け続けた3日間！</li> <li>・今後向かうための新たな発見というよりも、これまでの自分自身の考え方や行動の再確認ができたことが非常に大きい。</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既に地域に飛び出していた各地の職員や地域おこし協力隊の熱意に感銘を受ける。</li> <li>・自庁内で途絶えていたヨコやナナメの関係づくりの復活を決意。</li> <li>・飯盛講師のプラットフォームの考え方や富永講師の多様な協働の設計図について学ぶ。</li> <li>・地区担当職員制度の創設と地区まちづくり会議の制度設計に取り組む。</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当事者としてチャレンジする強み</li> <li>・多くの人を巻き込む重要性</li> <li>・切磋琢磨する仲間づくりの重要性</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リーダーシップは、特定の誰かでなく個々人の中に見出されるということ。</li> <li>・誰かの思いに共感する人が集まった時に、集まった力が物事を動かす推進力になること。</li> </ul>

		所属	氏名	これまでの取組	受講目的
7	平成28年度	置賜広域行政事務組合	齋藤拓也	<ul style="list-style-type: none"> <li>置賜各市町から推薦された地域づくりに取り組む住民と一緒に置賜八食祭を実施した。</li> <li>新たな広域連携の研究・推進に向けて、置賜各市町の企画担当職員と協議を進めていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域づくり人財塾の講師から学び、これまでの取組みだけでなく、様々なことに活用するため受講した。現在の状況を前に進めるための具体策について学びたかった。</li> </ul>
8		福井県大野市	今村智子	<ul style="list-style-type: none"> <li>構想を持ったリーダーとの出会いが始まり。多くのリーダーは「どこに行っても門前払いだった」と言う。一旦すべて聞き入れ、一緒に考える。制度は断る道具ではない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>出て来ない人をどうやったら参加させられるか。自分が市をどうやって変えるか。地域づくりに関する質問の模範解答を知りたいと思っていました。</li> </ul>
9		千葉県館山市	秋山歌南子	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域づくり人財塾を受講したのは、社会人2年目。市役所職員として基本的な知識を養うとともに、担当業務の全体像を把握することができた頃、「住民自治組織の支援」とは、具体的にどのような活動していけばよいのかわからず、悩んでいる状況だった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域づくりの活動を主体となって進めていくためのヒントを得ること。</li> <li>全国の市町村職員と情報交換をすること。</li> </ul>
10		鹿児島県志布志市	田中慶悟	<ul style="list-style-type: none"> <li>過疎高齢化が進む鹿児島市東部（大隅半島エリア）で若者が地域に愛着をもち、域外に情報発信できる機会が少ないとの問題認識があり、同じような志を持つ人達と地域づくり活動に取り組んできた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域活動の実践者の指導や姿勢を学ぶ</li> <li>熱い志を持った参加者との交流</li> </ul>
11		栃木県栃木市	鈴木晃子	<ul style="list-style-type: none"> <li>職場や地域における人のつながりづくりと、そのつながりを、地域をより良くするための仕組みに活かす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全国の地域づくりの様々な事例を知り、知見を広める。</li> <li>教育と地域づくりをつなげるヒントを得たい。</li> </ul>
12		兵庫県朝来市	高本恵三	<ul style="list-style-type: none"> <li>受講前は、地域住民として自治会の青年団や消防団活動に従事。</li> <li>当たり前のこととして、深く考えずに参加していた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域で自らが主体的に活動できる手法を学ぶ。</li> <li>全国の地域活動実践者との交流。</li> </ul>
13	徳島県佐那河内村	安富圭司	<ul style="list-style-type: none"> <li>思いを持って地域に入り、行政と地域・住民等が地域状況を共有し、内発的動機付けによって課題を楽しむ行動に移せる環境づくりを目指す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>行政に頼らない地域づくりの実践の現状を知る。</li> <li>内発的動機付けによる活動に必要な環境と要素を学ぶ。</li> </ul>	

人財塾で学んだこと・効果	
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊重講師の「目くばり、気くばり、心くばり」、飯盛講師の「プラットフォームと創発」、森講師の「ブランドハブスタンスセオリー」、前神講師の「県職員として地域に飛び出すこと」といった講師の話から様々なことを学ぶことができた。</li> <li>・人財塾の置賜支部を作るという行動宣言を行い、置賜地域で人財塾の学びを共有したい方に声かけを行い、楽しく活動し学ぶことができる仲間づくりから始めた。</li> <li>・平成28年8月には、地域づくり人財塾東北自主研修@仙台を開催した。</li> </ul>
8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動の結果でなく過程が大切。</li> <li>・地域づくりは地域によって違っている。正解はない。</li> <li>・外とのつながりは大切。</li> </ul>
9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な地域の状況や活動の取組方法を学び、地域課題に対して、自ら一歩踏み出すための勇気を得ることができ、日々の業務に対する姿勢が変わった。</li> <li>・館山市について客観視する機会となり、新たな発見とともに市に愛着が沸いた。</li> <li>・活動に人を「巻き込む」のではなく、「惹き込む」ことが大切ということ。</li> </ul>
10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NPO フュージョン長池の富永先生、元 NHK アナウンサーの森先生など、様々な分野で活躍される講師陣の講義と、それに感銘を受けた参加者との語らいは今も大切な財産となっている。参加者との交流は今も続いている。</li> </ul>
11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人とのつながりが財産であること。</li> <li>・プラットフォームという概念。</li> <li>・公務員が地域に出て活動することについて（翻訳機としての役割）。</li> </ul>
12	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どんなことでも、小さなことでもいいから、「まずはやってみる・チャレンジしてみる」ことが大切。</li> <li>・自らが主体的な地域活動を行う一歩を踏み出した。</li> <li>・一人でやるな、みんなでやれ（1能力×100人&gt;100能力×1人）。</li> <li>・住民みんなの「居場所と出番」をつくる。</li> </ul>
13	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊重さんの想いが人を動かす原動力と吸引力になっていることが分かった。</li> <li>・個人の小さな想いを言語化し行動に移し夢中で頑張ると、そのときは想像もしていない結果と成果になっている。</li> </ul>

		所属	氏名	これまでの取組	受講目的
14		宮崎県 宮崎市	池袋 耕人	<ul style="list-style-type: none"> <li>まちづくりに多様な人が関われる仕組み、何か行動したい人を支援する仕組みをつくることを目的に、まちなか清掃、夢プレゼンテーション大会、各種ワークショップの取組を実施している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>他地域で実践されている地域活動の取組を参考として学ぶ。</li> <li>他講師の講義を受講することで地域づくりの考え方について学び直しの機会とする。</li> </ul>
15	平成30年度	(公財) 小平市 文化振興財団	神山 伸一	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動の成果を発信すべく情報発信に取り組む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人づくりの効果的な実践方法を学ぶこと。</li> <li>全国で活躍している実践者と交流すること。</li> </ul>
16		大分県 大分市	幸重 陽子	<ul style="list-style-type: none"> <li>発足当初より「大分学研究会」運営委員として活動している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地方が活性化するまちづくりの先進事例を学ぶ。</li> <li>各地で活躍する実践者（講師・受講生）との交流。</li> </ul>
17	平成31年度	北海道 岩見沢市	高瀬 浩樹	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域のことを知っているのは地域の人。ゆるい雰囲気雑談できる場づくりを企画。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>事例の学習、多様な実践者との交流</li> </ul>

人財塾で学んだこと・効果	
14	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在、中心市街地活性化を業務として担当していることから、効果的なプラットフォーム設計の考え方(飯盛講師)を意識しながら、事業設計を行っている。</li> </ul>
15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受講生の熱い思いと意識の高さ。</li> <li>・熱い講師陣から贈られる言葉の数々。</li> <li>・これまでの活動が理論的に整理され、自分の中で深化。</li> <li>・地域を作っていくのは「人」。人を育てることが地域づくりになるということを再認識。</li> </ul>
16	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私が事例発表した「大分県研究会」は、郷土愛の醸成に寄与する活動として全国的にかなり先進的な事例である事がわかった。検定試験では県内全市町村の首長賞の提供や県内の企業からの支援を受けていること、例会に首長や県内で活躍する人を講師として招へいする等の手法について、受講生からたくさんの問い合わせがあった。この活動の効果について振り返り、再認識することができた。</li> <li>・人材塾の講師の方々の活動は、地域の人材育成に直結する点がとても多かった。また、その時々々の事象からブラッシュアップしていく柔軟な体制作りも学ぶことができた。</li> </ul>
17	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仲間との盛り上がり、仲間だけでの盛り上がりになっていなかったか。誰もが入ってきやすい場づくりが必要だと感じ、これまでの取組を見直すきっかけに。</li> <li>・できる範囲、手の届く範囲でまず実践し、自然と継続していることが重要と再認識。</li> </ul>

# 1. 千葉県千葉市 つながりが紡ぐストーリー～巡り合わせから生まれる地域づくり 千葉市保健福祉局地域包括ケア推進課 渡辺 大樹 (H24 JAMP 受講)

市町村 (地域) 概況	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口 980,264人 (令和元年12月1日現在)、面積 271.77K m<sup>2</sup></li> <li>昼夜間人口比率が97.9% (平成27年)と首都圏政令指定都市で最も高く、千葉県内における通勤先として、高い拠点性を有している。</li> <li>総人口は、令和2年をピークに減少局面となる見込みである。</li> </ul>														
活動主体と 活動地区	報告者の活動経歴	地域づくり人育成講座受講後、花見川区地域振興課地域づくり支援室へ異動 (2年間従事) また、業務外の地域づくり活動への参加も開始													
活動地区	<ul style="list-style-type: none"> <li>千葉県千葉市及び千葉県内</li> </ul>														
地域づくり の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>小学校区から中学校区の広さの地域ごとに、地域で活動する様々な団体が参加して、持続可能な地域運営の体制づくりを進めるための組織である「地域運営委員会」の設立を推進している。</li> </ul>														
地域課題 または 問題意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の魅力が発掘できていない。</li> <li>地域づくりの一翼を担う行政職員の動機付けが不十分。</li> </ul>														
これまでの 取組 (受講前の 取組)	<table border="1" data-bbox="341 913 1449 1032"> <thead> <tr> <th data-bbox="341 913 496 958">開始年月</th> <th data-bbox="496 913 730 958">事柄</th> <th data-bbox="730 913 948 958">概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="341 958 496 1032"></td> <td data-bbox="496 958 730 1032"></td> <td data-bbox="730 958 948 1032">該当なし</td> </tr> </tbody> </table>			開始年月	事柄	概要			該当なし						
開始年月	事柄	概要													
		該当なし													
人財塾の 受講目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>漠然と捉えていた「地域づくり」とは何かを知りたい。</li> <li>他自治体等の参加者との交流を通じて、刺激や新たな気づきを得たい。</li> </ul>														
人財塾で 学んだこと 効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域づくりのためには、フラットな立場で対話ができる環境整備が必要であることを認識し、今後の地域づくりの取組みに活かしていくこととした。</li> <li>活動を展開していく上でキーパーソンとなるコアメンバーをいかに発掘していくかが大切であることを学んだため、今後の活動でそのような人々をつなげていくことを意識していこうと考えた。</li> </ul>														
受講後の 取組	<p>講座で学んだ対等な対話ができる場づくりとキーパーソンの発掘を目指し、業務内外で以下の取組みを開始した。</p> <table border="1" data-bbox="341 1458 1458 1906"> <thead> <tr> <th data-bbox="341 1458 496 1503">年月</th> <th data-bbox="496 1458 820 1503">事柄</th> <th data-bbox="820 1458 1458 1503">概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="341 1503 496 1626">H25. 10月</td> <td data-bbox="496 1503 820 1626">花見川どっと com !</td> <td data-bbox="820 1503 1458 1626">大学や高校と連携し、若者視点で行政区内の資源 (自然、文化、商業、施設等) を発掘する事業を新たに開始した。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="341 1626 496 1738">H26. 6月</td> <td data-bbox="496 1626 820 1738">ちば活</td> <td data-bbox="820 1626 1458 1738">「10年後の千葉市に“活”を入れること」を目的として、千葉市職員有志による自主研修グループを結成した。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="341 1738 496 1906">H28. 4月</td> <td data-bbox="496 1738 820 1906">SIMULATION ちば2030</td> <td data-bbox="820 1738 1458 1906">公務員や民間企業の有志により、架空都市「C市」を舞台に未来の自治体経営を体験する対話型ワークショップを開発し、住民、行政職員や大学生等に対して実施した。</td> </tr> </tbody> </table>			年月	事柄	概要	H25. 10月	花見川どっと com !	大学や高校と連携し、若者視点で行政区内の資源 (自然、文化、商業、施設等) を発掘する事業を新たに開始した。	H26. 6月	ちば活	「10年後の千葉市に“活”を入れること」を目的として、千葉市職員有志による自主研修グループを結成した。	H28. 4月	SIMULATION ちば2030	公務員や民間企業の有志により、架空都市「C市」を舞台に未来の自治体経営を体験する対話型ワークショップを開発し、住民、行政職員や大学生等に対して実施した。
年月	事柄	概要													
H25. 10月	花見川どっと com !	大学や高校と連携し、若者視点で行政区内の資源 (自然、文化、商業、施設等) を発掘する事業を新たに開始した。													
H26. 6月	ちば活	「10年後の千葉市に“活”を入れること」を目的として、千葉市職員有志による自主研修グループを結成した。													
H28. 4月	SIMULATION ちば2030	公務員や民間企業の有志により、架空都市「C市」を舞台に未来の自治体経営を体験する対話型ワークショップを開発し、住民、行政職員や大学生等に対して実施した。													

## ■報告者の取組紹介（展開の経緯・流れ）

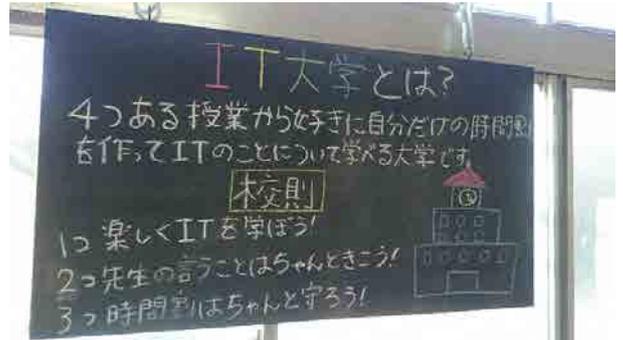
### ●STEP1 地域の魅力を発見するためには…（H24年度）

講座受講後のタイミングで、行政区の地域づくりを担当する部署に異動となった。異動した当時は、行政区にある様々な資源（自然、文化、商業、施設等）の魅力を再発見し、行政区内外に発信していく取組みを検討していた。検討の結果、行政区に訪れる交流人口を増やすために、SNSを活用した魅力発信事業（花見川どっと com!）を展開していくこととなった。



### ●STEP2 協働先探し・連携（H25.4～9月）

具体的な事業設計の過程では、魅力発見の視点を若者（高校生～大学生）に置くこととし、該当する年代の若者の協力が得られる協働先を探した。その結果、行政区内にある高校と市内他行政区にある大学の協力が得られ、3者が連携して事業を開始することとなった。



### ●STEP3 魅力発信の開始（H25.10月～）

主に大学生が中心となって、行政区内にある商店やお祭り等のイベント取材した。Facebookを情報発信のプラットフォームとして採用し、随時投稿を行った。また、ITについて学ぶことができる講座の開催等、主体的な活動を展開した。



## ■取組を進める過程で生じた課題

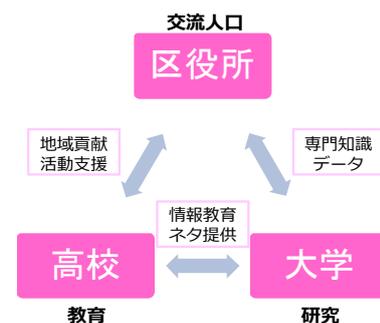
- ・効果的な実施方法の検討
- ・Facebook ページの行政における位置づけ
- ・投稿承認のフロー整理

## ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

### ●行政区内外の視点を重視した連携関係の構築

行政のみで、目指した若者視点の魅力発信を実現することは難しいと考えられたため、大学や高校に協力を求めることを検討した。行政区内には、大学はなく、高校は2校という環境であったため、大学とは市レベルで締結していた連携協定を活用し、高校とは以前から築いていた関係を発展させることにより体制を構築した。

自行政区内の関係者に拘らず、様々な立場からの



協力を得られたことで、取組みのバリエーションが生まれた。

### ●魅力発信にとどまらない相乗効果

行政の主眼は、行政区の魅力発信にあったが、それぞれの主体にメリットが生まれるような仕掛けづくりを行った。大学には、専門的な知識やスキルを活かせる場として活用していただくとともに、高校には、魅力発信と並行して、ソーシャルメディアに関するリテラシー教育の機会を設けた。



### ■成果

多様な主体が集う魅力発信のプラットフォームを創設した。取組みにあたっては、行政区内にはない資源（大学）を、既存の制度を活用しながら確保しつつ、それぞれの特徴を活かした魅力発信を行うことができた。

また、既存のモノだけに着目するのではなく、区内で開催されているイベント等のコトにも注目することで、豊富なジャンルの情報を提供した。

### ■受講前の課題・人財塾で学びたいこと

受講前は、入庁から間もない時期であり、地域づくりという言葉に対して漠然としたイメージを抱いていた。一方、入庁前から地方自治や地域活性化に興味があり、市役所業務はどのような分野でも地域との連携や協働は必要不可欠と考え、地域づくりとは何かを自分自身に落とし込むことが重要と捉えていた。

育成講座（人財塾）では、他自治体の事例に見られる特徴を学ぶとともに、参加者との交流を通じて、今後携わることになるかもしれない地域づくりの活動に活かしていきたいと考えていた。

受講の翌月に地域づくりを担当する部署への異動となり、育成講座（人財塾）での学びを実践する機会が訪れたことは、貴重な巡り合わせであった。

### ■受講後の取組、今後の方向性

#### ●想いを同じくする仲間や刺激の発見

受講後、全国各地に強い想いを抱いている自治体職員がいることを認識する一方で、活動を継続していく上では、定期的な刺激を受けることによるモチベーションの維持が重要であると感じた。

私は、イベントへの参加やSNS上での交流を通じて、市役所内外で活動されている自治体職員とのつながりをつくることを心掛けた。その中で生まれた活動が、市役所職員有志により結成された自主研修グループの「ちば活」である。この活動は、目的として、10年後の千葉市に“活”を入れることを掲げ、千葉市



を拠点として、自らが活躍する人材となり、千葉市に活力を与えることを目指している。

具体的な活動は、市役所職員がチャレンジしたいことをスケッチブックに書き、友人紹介によりバトンをつなげ、最終的には動画作品の制作と交流会の開催を実施した「撮ってもいいとも！」プロジェクトがある。本プロジェクトでは、友人紹介のバトンを渡す際には、相手が自分にとってどのような存在なのかを紹介するシーンを挿入した。このことは、講座の中で学んだお互いのつながりが生み出すネットワーク意識の醸成という面で効果的だった。

このプロジェクトを通じて、職員同士がそれぞれの想いに共感する機会を設けることができた。

### ●地域づくりを我が事へ

講座の中で紹介される地域づくりの好事例は、行政の立場だけではなく、住民や事業者等の異なる立場からアプローチされている取組みが多くあった。私自身も、行政による一方通行の提案ではなく、関係者により創り上げられた納得解が地域づくりを推進する原動力になると考えている。

そのような過程を体験できる取組みとして参画したものが「SIMULATION ちば 2030」である。この取組みは、熊本県庁の自主活動グループである「くまもと SMILE ネット」が開発した未来の自治体経営を体験するシミュレーションゲーム(対話型ワークショップ)を、千葉にある架空都市を舞台として改変したものである。

SIMULATION ちば 2030 を体験した参加者からは、地域づくりには短期的な成果だけを追い求めるのではなく長期的な視点が欠かせないことを理解した等の感想が寄せられる。

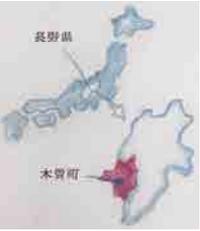
現在、全国各地でこの取組みが盛んになっていることは、将来の地域づくりを考える機会として、講座で言及されていたプラットフォームとしての役割を果たしていると言える。

このような取組みを通じて、地域に暮らす多くの人々が地域に対する興味・関心を高め、自身と地域を接近させる契機になることを願っている。



## 2. 長野県木曾町：人も地域も発酵する町づくり～ 信州木曾町が美味しくて楽しい！

木曾町役場農林振興課 都竹 亜耶 (H25 JAMP 受講)

<b>市町村 (地域) 概況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口 10,933 人 (2019 年 12 月 1 日現在)、面積 (476.03K m<sup>2</sup>)</li> <li>長野県の南西部に位置し、中山道の福島関所や霊峰御嶽山を擁する。</li> <li>高齢化率は 2015 年時点で 38.9%の少子高齢化が深刻化する中山間地</li> </ul>		
<b>活動主体と 活動地区</b>	報告者の活動経歴	<ul style="list-style-type: none"> <li>H23～H25 年木曾町地域おこし協力隊 (企画財政課)</li> <li>H25～H26 沖縄県名護市地域おこし支援員</li> <li>H27～現在 木曾町役場農林振興課 (嘱託職員)</li> <li>H22～食文化を多角的に編集発信、ケータリング、食のコンテンツ開発等併行して国内外で活動中</li> </ul>	
<b>地域づくり の状況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成 18 年木曾町まちづくり条例制定。合併前 4 町村に地域協議会を設置し特色を保持。</li> <li>平成 25 年創造農村フォーラム開催地。日本で最も美しい村連合加盟など中山間地の自然資源に基づいた地域づくりが活発。</li> </ul>		
<b>地域課題 または 問題意識</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>県下一面積の広さ故にインフラの安定に時間も経済的にも割かれやすい。</li> <li>少子高齢化に対する危機意識や事業化はされているものの具体的な策に至らない。</li> <li>資源が豊富で特色ある旧 4 町村からなる木曾町で一丸となれるテーマを絞りきれない。</li> <li>木曾町役場企画財政課が主管となる事業に携わりつつ自主提案事業を担当。</li> </ul>		
<b>これまでの 取組 (受講前の 取組)</b>	<b>開始年月</b>	<b>事柄</b>	<b>概要</b>
	H23. 4 月	<b>地域資源研究所設立</b>	の地域資源を科学的に活用して産業振興に役立てることを目的に設立・運営。
	H24. 2 月	<b>スローフード街道フェスタ</b>	木曾地域の飲食業関係者が郷土食や地酒を屋台形式でふるまう食の一大イベント。
	H25. 9 月	<b>地域おこし協力隊全国女子会シンポジウム&amp;フェスタ</b>	協力隊女子のスキルと田舎の課題を組み合わせることで繋がる可能性について多角的な分野から考え、各地の食で交流する企画運営。
<b>人財塾の 受講目的</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域づくりの分野のプロフェッショナルの手法や想いを直接的に学ぶこと。</li> <li>全国各地の同じ志をもつ人たちとの交流を通して多様な気づきを得ること。</li> </ul>		
<b>人財塾で 学んだこと 効果</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>豊重先生の講義からは地域づくりに関わる上での資質と精神、富永先生からは次世代を育てるうえでの心意気、飯盛先生からは創発に集約された具体的な手法について深い学びを得ることができた。いずれも以降の活動の指針となった。</li> </ul>		
<b>受講後の 取組</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまでの活動を総括して各事業に学生や商店街・地元企業などとも連携をはかり、参加者が地域の活動を多面的かつ横断的に関わられるように工夫した。</li> </ul>		
	<b>年月</b>	<b>事柄</b>	<b>概要</b>
H27. 1 月 ～継続	<b>アートとアカデミックが醸し出す木曾町発酵プロジェクト</b> 【はっこうのがっこう】	木曾の地域資源、発酵の町づくり条例、官学連携等の要素を融合させた多様なコンテンツとして展開し、固有の観光商品化とコミュニティ形成につなげる代表を持たない行政事業。	

■報告者の取組紹介（展開の経緯・流れ）

STEP1：H23.4月～ 担当事業の実務作業の中から、課題と可能性を汲み取る。



- a. 国内初の町立研究施設としてすんき乳酸菌や木曾の植物、野生酵母など地域資源の産業利用化するための研究機関として立ち上がりのハード整備及び研究の一部を担当。
- b. 木曾郡内の食関連業者がそれぞれの地域の名物料理や特産品を屋台形式で地域内外の人々にふるまう有料イベントの企画運営を担当。
- c. 町内の各地域の郷土食の継承のために活動する団体の地元女性グループのお手伝いや体験プログラムの企画や加工施設のメニュー開発のサポートを担当。



STEP2：H24.2月～ 各課題に関わる人々が集う機会を設ける。

- a. 研究テーマに関連した講演会と同時に地域の食資源を用いた食の交流会を開催し地域住民が研究所に求めることを聞き取る。
- b. 食で地域をもてなすことの意義を改めて考える機会となるプログラム内容に再編。aの研究所で培養した菌を用いた天然酵母パンやお酒をふるまったり、食提供方法も共に調理盛り付け作業から関わることで知識と技術を共に学び合う機会とした。
- c. 全国各地の地域おこし協力隊女子と地域の郷土食継承に関わる女性たちの交流イベントを開催に互いの悩みや田舎の魅力について話し合う場とした。

STEP3：H25.9月～ 木曾町の課題を横断的に俯瞰し考えるイベントの開催



都市部から移住し地域づくりを仕事とした中で感じた課題と可能性を、女子力×田舎力という切り口で自治総合センターのシンポジウム事業として採択を受ける。  
移住者、行政、女性としての立場を活用した全国規模のシンポジウムを行うことで、全国の協力隊女子と地域づくりに奔走する民間、学生、行政が膝を突き合わせて互いの得手不得手を共有できる機会とした。

## ■取組を進める過程で生じた課題

- 地域資源の学術的研究機関の要素が強く地域住民にとっては敷居が高すぎる。
- 来場者の満足度は高いが出店する側は疲弊気味。
- 高齢化に伴う後継者不足。

若年層と高齢者層の広報手段の違い（デジタルかアナログか）

## ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

- 行政が運営する研究所としての特色を明確にする。（地元の学校との連携、特産品振興、農業利用等）
  - イベント疲れしない仕組み（学び、同業者との情報交換の場として機能させる）
  - 地元住民にも関心を寄せてもらう為、参加地域の特産品などをふるまうマルシェも同時開催。
- いずれも共通して食の楽しみの要素を加える。

## ■成果

- 地域づくりの無知無関心層の掘り起こし。
- 地元の方々の郷土への誇りの喚起。

## ■受講前の課題・人材塾で学びたいこと（いずれも直接会うことで得られる面を重視）

- 地域課題に関わる様々な立場のひとや団体の協働の場づくり。
- 地域の未来を担う多種多様な人材育成。
- 地域活性化における先駆的な事例に関わる方々の実践的なノウハウ。

## ■受講後の取組、今後の方向性

### 「アートとアカデミックが醸し出す木曾町発酵プロジェクト」

### と題して行政の中立的な立場をフル活用して木曾町の多様なモノコトヒトを交えた仕組みの構築



グローバル規模の価値の創造

（ICT社会における発酵のまちPR）

木曾町合併 10 周年記念事業として木曾のスローフードをモチーフにしたアニメーションを制作。



ウチとソトへの価値の創造

（発酵のまちとしての観光ブランディング及び町民意識・知識の醸成）

発酵を支える見えない菌を人気アニメのオリジナルキャラクター化し、動画や町案内冊子を製作。同冊子は仏語版も製作し地元のこどもたちの渡仏交流の際に使用。H27年度より開始した五感で発酵を楽しむ知的エンターテインメント「はっこうのがっこう」は5年目14回開催した。毎回テーマを変えることで町内外、年齢層も幅広く、述べ676名の参加となり交流人口の拡大に寄与。



木曾に暮らしながら日々刻々と移ろう木曾町の旬の恵やイベントをリアルタイムで発信する facebook ページを有志メンバーでライフワークとして運営。

豊重先生の講話の中の潜在的な魅力（農業・観光等）の地域資源の掘り起こしに寄与しているかということ念頭に木曾町の文献や郷土誌を整理しました。

木曾町の発酵の歩みと取り組み

光緒年代 (西暦1900年)	感一門の連句会で「木曾の醸造(すんぎ)は春も暮れつと」と詠まれる(「すんぎ」の原形といわれる)
大正6年(1918年)	尾張藩の藩管だった岡田善九郎の木曾運行記には「木曾の酒は香物なり味上」と記されている。
昭和18年(1943年)	中津商店 創業(御蔵山麓系の伏流水仕込み)
昭和12年(1937年)	小池商店 創業(御蔵山麓系の伏流水仕込み、木曾町高原にて熟成発酵)
昭和25年(1950年)	中津商店 創業(木曾町で白山麓系の伏流水仕込み)
平成7年1号	第一号 「すんぎ」ブランド 開始
平成11年7月	醸造業者21名で「すんぎ」ブランド 創設
平成18年11月	「すんぎ」特産品 認定 (木曾とよむ(研究会))
平成19年	木曾の赤かぶとすんぎ 国際スローフード協会297種の野菜(赤かぶと認定制度)認定
平成20年11月	東京農業大学と連携協定 締結
平成21年	「すんぎ」をテーマにした祭り出される
平成21年6月	「すんぎ」の産地 認定
平成21年3月	醸造のまちづくり実行委員会 設立(秋田県産物 下自治体9団体加盟)
平成22年2月	第一号 木曾スローフード推進フェスタ
平成22年12月	全国醸造者大会2012 参加 開催
平成23年	木曾町醸造業連結実行委員会 創設(西暦2013年4月～元禄地蔵酒師会 継承会、H27年4月～ 東京農業大学教授 岡田善九郎)
平成23年12月	木曾スローフードフェスティバル 開催 東京 法政大学新館ホール
平成25年4月	すんぎ産地認証第4種 特許取得
平成26年8月	木曾町醸造のまちづくり懇話会 設立
平成26年9月	木曾町醸造業産地認証第4種 認定
平成27年2月	醸造で地産地消推進委員会 開催
平成27年9月	深州木曾町「はっこのがらこ」プロジェクト 開催(平成27年9月、14日目の開催に3名)
平成29年5月	すんぎ 無類特産品(特産品)取得

また豊重先生より地域づくりの必須条件としてご教示頂いた

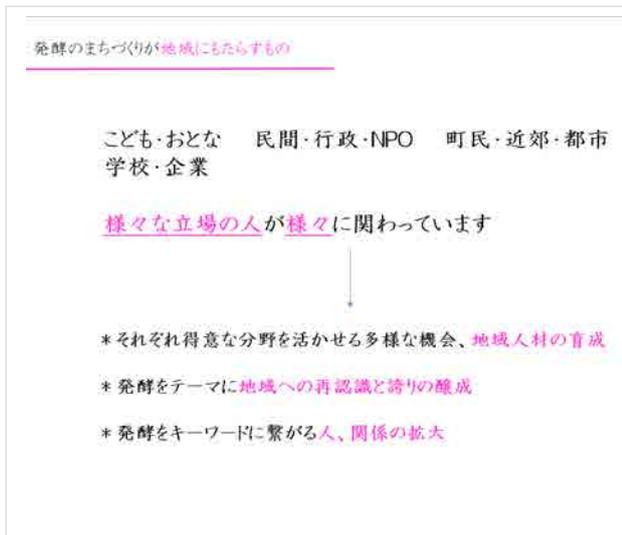
- ・分析力
- ・行動力
- ・人間力

を日々の活動の指針とするために見取り図として整理しました。



富永先生の協働のありがた、そして次世代育成の大切さを念頭にすすめてきました。

飯盛先生の創発する地域づくりの発想をベースに木曾町らしく活動に落とし込みました。



### 3. 愛媛県宇和島市 実践あるのみ！～ 考えてるだけじゃやってないのと一緒だよー！

宇和島市商工観光課 村上 将司 (H26 JAMP 受講)

<b>市町村 (地域) 概況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人口 77,465 人 (平成 27 年国勢調査)、面積 469.58 (K m<sup>2</sup>)</li> <li>・位置は四国の西南部。食べ物では鯛めし、じゃこ天！養殖真珠の生産量が日本一。みんな伊勢志摩と言うが実は宇和海が日本一。</li> </ul>		
<b>活動主体と 活動地区</b>	報告者の活動 経歴	<ul style="list-style-type: none"> <li>【仕事として】</li> <li>・H20～ 地デジ&amp;高速インターネット整備の業務でほぼ全ての集落で住民説明会を開催。住民の合意形成のノウハウ(味方の獲得、根回しなど)を習得。</li> <li>・H24～ 集落対策、地域づくり担当。4年間従事。</li> <li>・H27～ 商工観光課</li> <li>【私的活動として】</li> <li>・住んでいる「九島」で様々な活動を。</li> </ul>	
	活動地区	<ul style="list-style-type: none"> <li>【仕事】</li> <li>御槇地区 (中山間、人口約 300 人)</li> <li>蔭淵地区 (沿岸、人口約 300 人) その他市内全域</li> <li>【私的活動】</li> <li>九島地区 (離島) 人口約 800 人</li> </ul>	
<b>地域づくり の状況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画立てたものではなく、機運としてもまだまだ。</li> <li>・住民参加は一部のみであり、地域づくりの担い手育成、中間支援組織の構築が必要。</li> </ul>		
<b>地域課題 または 問題意識</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上述のとおり。地域全体として過疎高齢化の危機感はまだない。</li> </ul>		
<b>これまでの 取組 (受講前の 取組)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・御槇プロジェクト、地域インターン生受入れ、九島プロジェクト等を実施。</li> </ul>		
	<b>開始年月</b>	<b>事柄</b>	<b>概要</b>
	H25. 4	御槇プロジェクト (仕事)	保育園跡地を農家レストランと宿泊施設ヘリノバージョン。名前は「みまきガーデン」
	H27. 2～	地域インターン生受入れ (私的活動)	九島にて (一社) いなかパイプと連携し、首都圏学生インターンを約 1 ヶ月間受入れ。継続中。
H26. 4	九島プロジェクト (私的活動)	架橋完成前の九島にて、カフェや特産品開発など「食」にスポットを当てた交流人口拡大の取組。	
<b>人財塾の 受講目的</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノウハウの習得と人脈形成。</li> <li>・全国の地域づくりに熱いメンバーとの交流。</li> </ul>		
<b>人財塾で 学んだこと 効果</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講師の方々の取り組みや考え方、分析について非常に学ぶところが多かった。「地域づくり」という分野はある意味カテゴライズできないものであり、講師陣やテーマ、学ぶ分野が多様多様で常に刺激を受け続けた 3 日間！</li> <li>・今後向かうための新たな発見というよりも、これまでの自分自身の考え方や行動の再確認ができたことが非常に大きい。</li> </ul>		

<b>受講後の 取組</b>	・「巻き込むな！引き出せ！」	
	・「インプットを加工してアウトプット、それがイノベーション！」	
	<b>年月</b>	<b>事柄</b>
	<b>概要</b>	
R1～	<b>多文化共生の地域づくり</b>	技能実習生や外国人配偶者など「在住外国人」は、そこに住んでいれば「地域の一員」。日本人も外国人もできることを持ち寄りながら、互いに高めあい共存する国際交流、多文化共生の地域づくりを展開中！

■報告者の取組紹介（展開の経緯・流れ）

●STEP 1：ニーズの発掘は「声なき声」を！

いずれの取り組みもまずは「ニーズの発掘」に取り組んだ。通常、自治会役員や各団体代表者を集めて意見を聞くものだが、声の大きな男性の意見に引っ張られ、できない理由を並べられ、さらには口だけ番長で動かないというケースが常である。一方女性は自分が楽しいことから発想し、リアルに生活に直結したアイデアを出し、さらには自分がやってみたかったのよー、とりあえずやってみようよーと言ってくるのである。

役員や代表者などとりあえず集めてワークショップを行うが、会終了後に女性だけを再度集めてホントのところをヒアリングするとワイワイと良い意見が出てくるのである。そういった「声なき声」を拾い、事業化をさせていく作業を行ってきた。



幅広い年齢層の女性でWS



試作を作りながら…



時にはコタツでミーティング

●STEP 2：「巻き込むな！引き出せ！」 餅は餅屋。できないことはプロに頼もう！

プレイヤーは「やりたいこと」「できること」はそれぞれ持っていて、やねだん 豊重講師も言われていたが「巻き込むな！引き出せ！」だと本当に思う。巻き込まれた方はたまったもんじゃなくて、巻き込み事故に巻き込まれたくないからは普通の住民は避けていくもの。住民ひとりひとりの得意分野を上手く引き出してプロデュースする必要があった。

例えば、農家レストランに初めから反対してたあるおばちゃんは豆腐づくりが上手。プロジェクトに参画してとは言わないが、料理には豆腐を使ってあげる。これで立派なプレーヤー。

講釈ばかりで動かないおっちゃん事務局をやるのが好き。なのでプロジェクトの会計を依頼。料理や接客はできないけど自分が作る米に自信があるおっちゃんからは米を仕入れ、お客さんに褒めて

もらう。褒めてもらって嫌な人はいないので、もっと自信がつく。逆に人としゃべるのが好きなおばちゃんにはドンドン前に出ていってもらって「顔」になってもらう。こういった得意分野を上手く引き出し好循環を生む仕掛けにより自然と地域全体にプレイヤーが広がっていった。

しかし、デザインや写真、人財募集なんかは過疎集落ではなかなかできる人がいない。そこはやはり地域外のプロやできる人にキチンと頼むことでキチンとしたものになっていく。自前でやろうとすると陳腐なものになってしまう。

「地域」というものを良く知るデザイナーやカメラマン、メディアに助けてもらい、プロジェクトの初めから参画してもらうことで、表面だけではない根っこの部分まで理解してもらって成果物に表現してもらうことでプロジェクトの精度もグンと上がってくる。



【御槓PJ】御槓米PRのポスター



【九島PJ】人財募集

### ●STEP3：小さなトライアルの積み重ね。動いていると「瓢箪から駒」

重要なことは「とりあえずやってみる」ことだと考えている。やってみないとわからないことは多く、やってみて初めてわかる、次につながる、二の手三の手を打てる、など動いていく価値は無限大。「御槓PJ」で農家レストランをスタートさせると、地域内から弁当や仕出しの注文が多く入るようになった。地域外に出ていた消費が地域内で循環するようになったのだ。

また「九島PJ」では「食」での交流人口に取り組んでいたが、今では多世代地域共生の福祉分野として独居老人への配食サービス、ママカフェの稼働などへ進んでいる。いずれも「瓢箪から駒」である。

地域インターン生の受け入れはあまりビジョン無く受け入れをスタートしたものの、受け入れて行く度に新鮮な風が入り、地域住民の意識が変わるのを目の当たりにしている。都市部の大学生が1ヵ月九島に住み、活動することで「若者が何かやってるフワフワ感」があり、みんなが気にしてくれ、活動に協力的になっている。そしてまた次のシーズンにインターン生が来ても当たり前前に受け入れていて、地域で若者が何かをやることへの抵抗感がいつの間にか無くなっている。「とりあえずやってみる」トライアルの繰り返しと積み重ねで展開してきた。

### ■取組を進める過程で生じた課題

- ・プレイヤーの高齢化
- ・他地域への波及はまだだ

### ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

#### ●外部人材の活用

地域外から俯瞰的に見る、できないスキルを補完するという部分において、地域おこし協力隊やファ

シリテーターなど外部人材を有効的に活用した。住民にとっても刺激的であり、もちろん大変な部分もあったが相乗効果を生むことができた。

### ●地域全体への情報共有と代表者のオーソライズを得る

良くも悪くも集落では噂が回るのは早いし、代表者の声は大きい。いらぬ足の引っ張り合いは避けたいので、初めから常に情報はオープンにし、代表者への説明も丁寧に行った。これを疎かにすると非常に厄介！

### ■成果

【御槇P J】農家レストランと宿泊施設「みまきガーデン」が継続していることが一番の成果。

【地域インターン生受入れ】受け入れインターン生はこれまで20名超。多くがまた帰ってきてくれたり、東京でのイベントで手伝ってくれたり参加してくれたりしている。「関係人口」が流行る前から関係人口づくりができています。

【九島P J】地域共生社会の取り組みとして福祉分野へスムーズに展開できている。



インターン生の主催イベント

### ■受講前の課題・人財塾で学びたいこと

- ・専門知識、ビジョン形成の経験不足。
- ・地域づくりの「哲学」

### ■受講後の取組、今後の方向性

#### ●多文化共生の地域づくり

地方にも多くの外国人が生活しており、国の制度改正により今後もより多くの外国人労働者が地域で生活していくことが予想されている。地域に外国人が住むことは「地域の一員」となることであり、外国人も日本人も住みやすい多文化共生のまちを創っていく必要がある。今はまさにそれに取り組んでいる。

豊重講師の「巻き込むな！引き出せ！」はまさに実践すべきことであると考えている。日本語教室の設置に取り組んでいるが、今は市民の参画と機運醸成を図っている。「英語が話せない」「外国人の文化はわからない」という方が多いが、やさしい日本語で会話したり、折り紙を教えてあげたり、教室の受付をしたりなど、できることを引き出していこうとしている。

また、森講師の「インプットを加工してアウトプット、それがイノベーション！」も実践しているところである。先進地域はあるので、既にできあがっているところの情報をインプットし、それを宇和島にフィットさせるよう加工しアウトプットをしている。成果を出すのはまだ先になるが、しっかりと取り組んでいきたい。



#### 4. 埼玉県志木市 柏町限定情報紙「かしわなほっとぷれす」～情報を紡いで絆づくり

志木市産業観光課 石塚 匠 (H24 JAMP 受講)

<p><b>市町村 (地域) 概況</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口 76,443 人 (令和元年 12 月 1 日現在)、面積 9.05K m<sup>2</sup></li> <li>全国で 6 番目に面積の小さな市。かつては新河岸川の舟運で栄え、現在は首都近郊 25 キロ圏内にある典型的なベッドタウン。</li> <li>現在も人口は社会増状態にあるが、昭和 54 年に完成した志木ニュータウンを抱え急速な高齢化が進行中。</li> </ul>													
<p><b>活動主体と 活動地区</b></p>	<p>報告者の活動経歴</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成 8 年入庁 生涯学習課 (6 年) ⇒ 市民活動推進課 (5 年) ⇒ 秘書広報課 (1 年) ⇒ 政策推進課 (4 年) ⇒ 地域振興課 (2 年) ⇒ 秘書広報課 (5 年) ⇒ 産業観光課 (現在)</li> <li>地域づくり人財塾受講を契機に、地域担当職員制度を設置。自らも柏町地区まちづくり会議に参画。</li> </ul>												
<p><b>地域づくり の状況</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>志木市柏町地区 人口 1 万 4,000 人、6,700 世帯 昭和 40 年代から開発が進み、戸建て住宅が多く建ち並ぶ住宅地。</li> <li>志木のカップ伝説 (宝幢寺のお地藏さんとカップ) 生誕の地</li> </ul>													
<p><b>地域課題 または 問題意識</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>川辺の清掃運動をはじめ古くから地域活動が盛ん。平成 13 年には「市政運営基本条例」を制定し、地方自立計画に基づく「行政パートナー制度」の導入で注目を集める。</li> <li>平成 26 年に地区担当職員制度を設置し、職員と市民が一緒になって地域の課題を考える「地区まちづくり会議」を設置。</li> <li>戸建て住宅を中心に高齢化が進展。空き家が増加。</li> <li>大型マンションの新住民と戸建て住宅の旧住民との交流が少ない。</li> <li>数ある地域資源や地域活動があまり知られていない</li> </ul>													
<p><b>これまでの 取組 (受講前の 取組)</b></p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 15%;">開始年月</th> <th style="width: 40%;">事柄</th> <th style="width: 45%;">概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td colspan="3" style="text-align: center; padding: 10px;">該当なし (※人財塾受講後に活動を開始したため)</td> </tr> </tbody> </table>		開始年月	事柄	概要	該当なし (※人財塾受講後に活動を開始したため)								
開始年月	事柄	概要												
該当なし (※人財塾受講後に活動を開始したため)														
<p><b>人財塾の 受講目的</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>仕事へのモチベーションが上がらない時期の気分転換</li> <li>職員が地域に飛び出すきっかけや仕組みについて先進事例を知り、情報交換したい。</li> </ul>													
<p><b>人財塾で 学んだこと 効果</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>既に地域に飛び出していた各地の職員や地域おこし協力隊の熱意に感銘を受ける。</li> <li>自庁内で途絶えていたヨコやナナメの関係づくりの復活を決意。</li> <li>飯盛講師のプラットフォームの考え方や富永講師の多様な協働の設計図について学ぶ</li> <li>地区担当職員制度の創設と地区まちづくり会議の制度設計に取り組む。</li> </ul>													
<p><b>受講後の 取組</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>職員が地域に飛び出し、市民の声を市役所に届ける仕組として「地区担当職員」制度と、「地区まちづくり会議」を構築。</li> <li>4 年 2 期の活動を通じ課題を共有し、地区ごとの解決策としてそれぞれ事業を実施。</li> </ul> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 15%;">年月</th> <th style="width: 40%;">事柄</th> <th style="width: 45%;">概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H26. 4 月</td> <td>地区担当制の設置</td> <td>市の広聴広報活動と地域のまちづくりの担い手として、職員が地域に飛び出す仕組みを構築</td> </tr> <tr> <td>H26. 7 月</td> <td>地区まちづくり会議 スタート</td> <td>職員と市民が地域の課題を共有し、市民協働で解決するための組織として市内 7 地区に設置</td> </tr> <tr> <td>H28. 3 月</td> <td>かしわなほっとぷれす 創刊</td> <td>地区まちづくり会議での検討を経て、情報を通じた地域の絆づくりを目的として柏町地区限定情報紙「かしわなほっとぷれす」を創刊。全戸へ配布。</td> </tr> </tbody> </table>		年月	事柄	概要	H26. 4 月	地区担当制の設置	市の広聴広報活動と地域のまちづくりの担い手として、職員が地域に飛び出す仕組みを構築	H26. 7 月	地区まちづくり会議 スタート	職員と市民が地域の課題を共有し、市民協働で解決するための組織として市内 7 地区に設置	H28. 3 月	かしわなほっとぷれす 創刊	地区まちづくり会議での検討を経て、情報を通じた地域の絆づくりを目的として柏町地区限定情報紙「かしわなほっとぷれす」を創刊。全戸へ配布。
年月	事柄	概要												
H26. 4 月	地区担当制の設置	市の広聴広報活動と地域のまちづくりの担い手として、職員が地域に飛び出す仕組みを構築												
H26. 7 月	地区まちづくり会議 スタート	職員と市民が地域の課題を共有し、市民協働で解決するための組織として市内 7 地区に設置												
H28. 3 月	かしわなほっとぷれす 創刊	地区まちづくり会議での検討を経て、情報を通じた地域の絆づくりを目的として柏町地区限定情報紙「かしわなほっとぷれす」を創刊。全戸へ配布。												

## ■報告者の取組紹介（展開の経緯・流れ）

受講した当時、本市では過去の先進的な施策の反動で、職員が地域に飛び出そうというマインドが減退し、市民協働による地域づくりが後退してしまっていた。とは言え、複雑多様化する地域の課題やニーズを行政だけの力で克服、解決することは限界があり、早晚新しい形の市民協働による地域づくりが必要になるものと考えていた。再び市民協働による地域づくりを取り組む際には、もっとしっかりと地域に根付き、さまざまな意見や立場の人が共存できるプラットフォームを構築したいと考えていたが、人事異動もあって行動に移すことができずにいた。ところが、受講から数か月後の平成 25 年 7 月に市の方針が大幅に変わり、「地域担当制」の導入が打ち出され、広報広聴力の強化策として制度設計への関わり、ここに人財塾で学んだ知識を生かすこととした。

### STEP1 地区担当制の設置 (H26. 4)

平成 25 年 7 月に「地域担当制」の導入の方針が示されたものの、どのように設置、展開していくかは全くの白紙であった。まずは先進市の事例を学び、千葉県習志野市が古くから導入し今も続けていることを知った。同期受講の人財塾参加者に習志野市の職員がおり、そのつながりを通じて習志野市へ伺い、制度の概要や現状についてお話を聞かせていただいた。また、その後も各地の導入例を学び、本市のにあった地域担当職員制度を研究し、以下の 3 点を考慮して要綱を制定した。

1. 職域外の関係づくりや学び（ナナメの関係づくり）の場とすること
2. 御用聞きではなく、住民といっしょに考え、思い共有する場（プラットフォーム）にすること
3. 市民も意見を述べるだけでなく、ともに手を動かし、課題解決へ取り組むこと

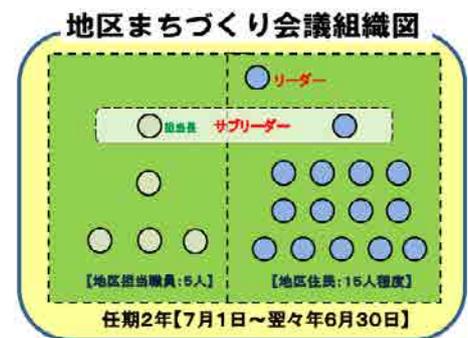
そして、庁内で説明会を実施し公募の上、職階や所属の異なる 5 人の職員チーム合計 35 人を市内 7 地区に設置し、自身も柏町地区担当職員として市長から任命された。

### STEP2 地区まちづくり会議での検討 (H26. 7～)

平成 26 年 7 月には、職員と市民が地域の課題を共有し、市民協働で解決するための組織として公募市民と地区担当職員による「地区まちづくり会議」を設置することとし、柏町地区でも駅頭での PR や町内会の皆さんへの説明など、地区担当職員が自主的に企画し職員の売り込みと広報を行い、町内会役員や NPO 役員、地域活動団体のメンバー等の市民 19 人が応募し、地区まちづくり会議委員として任命された。

会議の初期ではワールドカフェやフィールドワーク、カードによる積み上げ、課題マップづくりなど様々なワークショップを実施し、「柏町のいいところ」や「柏町がこうなったらいいな」を対話し、共有した。そして、浮かび上がった課題の解決策を模索し、どんなまちを目指し、誰が実行すべきかを分析、分類し、さらに自ら取り組みことは何かを模索した。

最終的には解決策のそれぞれを参画度、継続性、楽しさ、独自性、理解度の 5 つの尺度で点数化し、柏町地区まちづくり会議では地域内の情報発信について関する事業に取り組むこととした。



### STEP3 地域限定情報紙「かしわなほっとぷれす」の創刊 (H28. 3)

地域内の情報発信手法としては、手軽な方法としてインターネットを通じて発信する手法も検討されたが、いつでも読めること、そして誰でも読めることを重視し、紙媒体による情報発信を基本に、SNSや動画コンテンツを組み合わせた情報発信を行うこととした。また、発信する情報については、①人やモノ、商店、地域活動などの地域資源、②地域の安全に関する話題、③さまざまな属性の人が抱く思いの3つを取り上げ、情報を通じた絆づくりやプラットフォームの形成を目指すこととし、柏町地区限定情報紙「かしわなほっとぷれす」を平成28年3月に創刊することとした。

「かしわなほっとぷれす」は、柏町にちなんでネーミングしただけでなく、㊦…家族のような、㊧…



創刊号の紙面



しあわせいっぱい、㊨…わくわくする、㊩…仲間のいるまちという委員間で考えた柏町のありたい姿を示すとともに、ホットな情報とほっとする情報をお届けしたいといったこの情報紙への願いも込められている。

掲載内容は、地域のイベントを紹介する「インフォメーション」、柏町のお店を紹介する「アーケード」、地域の安全に関する話題を紹介する「セーフティ」、地域の歴史を探る「ヒストリー」、柏町の自然や保護活動を紹介する「ネイチャー」、地域の素朴な疑問を体当たりで解き明かす「チャレンジ」、名物の人をリレー形式で紹介する「ヒューマン」の7つのコーナーで構成されている。

配布にあっては、地域の協力と行政の信用力を味方にする事とし、町内会を通じて市の広報紙と同時に配布していただけるよう、地域の協力を取り付けている。



動画コーナー「かしわなチャレンジ」

#### ■取組を進める過程で生じた課題

- ・異なる意見を共存共有しながら、全員のモチベーション維持させること難しさ
- ・地域の課題は「ないもの」を探しではなかったこと
- ・続けることのできる動機付けと体制づくり

#### ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

##### ●会を進めていくためのルールづくり

過去に市民協働によるまちづくり施策に関わる中で、あるときを境に急に会議等に参加しなくなってしまふ人を見てきた。その多くは、物事を決めていく中で自らの意見が反映できないと感じた時からであったように思えた。人財塾での学びとその後の東日本の卒塾生で組織したフォローアップ研修会での学びで、地区まちづくり会議をプラットフォームとして機能させていくには意見を戦わす「議論」でなく、認識を共有して互いの話に耳を傾ける「対話」が大切との認識を得た。こうしたことから、地区まちづくり会議の発足後すぐに、①それぞれの意見を否定しない、②できることを持ち寄りみんなで参加する、③難しく考えず楽しむ、という3つの基本ルールを決めた。

## ●「ないもの」探しではなく、「あるもの」探し

地域課題の解決というと、どうしても地域に「これがないから課題だ」といった思考になりがちで、実際、地区まちづくり会議の初期では「ないもの」を探していた時期もあった。しかし会議を進めるうちに地域には既存の資源が実は沢山あり、気づかない、あるいは知られていないだけのことが多く見つかった。こうしたことから、途中から「あるもの」探しに方針を転換し、組み合わせたり別の視点を取り入れたりする解決策を模索することとした。

## ●持続させていくための動機付けと体制づくり

地区まちづくり会議の成果としては、2年間の任期中に何らかの課題解決のための取り組みを実施すれば良かったが、人財塾で学び、地域担当制の制度設計段階から関わってきた自身としては、任期満了後に事業を持続させることこそが本来の目的と考えていた。こうしたことから、事業の決定に至るまで多くの時間を割き、メンバー間で動機を共有し、①いつも楽しく、②無理をせず、③誰も仲間外れにしない組織づくりを心掛けた。また、事業の費用は、創刊号については市の補助金を活用したが、任期満了後は広告収入によって事業を継続できるよう想定し、デザインを行った。

## ■成果

年間3回、毎号6,000部を発行し、町内会を通じて全戸配布を行っている。また、令和元年12月までに13号を発行し、地域のローカルな情報発信を通じて、コミュニケーションの活性化や絆づくりを進めることができた。毎回、紙面に掲載された人が地域の人から「記事読んだよ」と声をかけられたり、紹介したお店の売り上げが伸びたりと発行ごとに多くの反響があり、柏町独自の取り組みとして市内においても一定の評価をいただいているところである。こうした取り組みが認められ、令和元年度は民間のボランティア活動助成に採択された。また地域限定の情報紙でありながらも地域外での読者がおり、発行を心待ちにしている。



## ■受講前の課題・人財塾で学びたいこと

受講前、私は特に取り組みを行っておらず、市民協働施策の停滞期にあって、市民との関係に距離を感じ、課題を感じつつもモチベーションが上がらない時期であった。そうした中、人財塾にいわば気分転換として参加したのは、他の受講生に比べて些か不真面目な動機であった。しかしながら、各地にこんなにも頑張っている職員や大きな情熱を傾けている地域おこし協力隊に出会い、行動宣言をしたことで何かをはじめようという気持ちになったことは大きな収穫であった。

## ■受講後の取組、今後の方向性

### ●地域の課題解決に向けたプラットフォームとして

前述のように「かしわなほっとふれす」は、情報を通じた地域の絆づくりと地域の課題を住民間で共有する情報のプラットフォーム機能を目指している。今後は、情報発信に加えて取材の中から感じ取った課題を地域へと提起する力も強化したいと考えている。創刊から3年が経過し、編集メンバーについても環境の変化からできること、できないことが変化しているが、変化を柔軟に受け止めつつ引き続き職員と市民による編集委員ができることを持ち寄って発行し、楽しむことをモットーに補助金に頼らない地域独自の取り組みとして続けていきたい。



最新号（第13号の紙面から）

## 5. 福井県越前市 武生に來たらボルガライス～ご当地グルメで盛り上がる越前市～

越前市役所社会福祉課 波多野 翼 (H23 JAMP 受講)

<p><b>市町村 (地域) 概況</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口 82,112 人 (令和元年 12 月 1 日現在)、面積 230.7K m<sup>2</sup></li> <li>コウノトリをシンボルした里地里山の保全再生や環境調和型農業の推進により美しい自然が広がっている。また越前和紙や越前打刃物、越前箆笥の伝統工芸品ある一方、電子部品の先端産業も集積している「モノづくりのまち」。</li> </ul>																	
<p><b>活動主体 と 活動地区</b></p>	<p>報告者の活動経歴</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成 21 年 観光振興課、平成 25 年 秘書広報課、平成 29 年 社会福祉課 (現在)</li> <li>平成 22 年 3 月に日本ボルガラー協会を設立</li> <li>平成 30 年 4 月より子育てコミュニケーションアドバイザーとして活動開始</li> </ul>																
<p><b>地域づくり の状況</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>市民と行政の「協働」を総合計画の基本理念の一つに掲げている</li> <li>通年型の職員採用や外国籍の職員採用、職員自ら企画した研修への奨励金制度</li> </ul>																	
<p><b>地域課題 または 問題意識</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口のうち外国人の割合が約 5% (H30 年 10 月 1 日時点) で多文化共生の推進が必要</li> <li>市役所内での個性を生かした人材育成</li> </ul>																	
<p><b>これまでの 取組 (受講前 の取組)</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>越前市の知名度アップと気軽にできるまちづくりの証明</li> </ul> <table border="1" data-bbox="331 994 1434 1167"> <thead> <tr> <th>開始年月</th> <th>事柄</th> <th>概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H22. 3 月</td> <td>日本ボルガラー協会設立</td> <td>越前市を知ってもらい、越前市に来てもらうために越前市のご当地グルメ「ボルガライス」の情報発信を行う。</td> </tr> </tbody> </table>			開始年月	事柄	概要	H22. 3 月	日本ボルガラー協会設立	越前市を知ってもらい、越前市に来てもらうために越前市のご当地グルメ「ボルガライス」の情報発信を行う。									
開始年月	事柄	概要																
H22. 3 月	日本ボルガラー協会設立	越前市を知ってもらい、越前市に来てもらうために越前市のご当地グルメ「ボルガライス」の情報発信を行う。																
<p><b>人財塾の 受講目的</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>熱意をどう形にしていくかを学びたいと思い受講</li> </ul>																	
<p><b>人財塾で 学んだこと と効果</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>当事者としてチャレンジする強み</li> <li>多くの人を巻き込む重要性</li> <li>切磋琢磨する仲間づくりの重要性</li> </ul>																	
<p><b>受講後の 取組</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>越前市の知名度アップと気軽にできるまちづくりの証明をするために一市民の当事者として、たくさんの人の協力を得ながら取り組みを行う。</li> </ul> <table border="1" data-bbox="331 1458 1445 2018"> <thead> <tr> <th>年月</th> <th>事柄</th> <th>概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H22 年 10 月</td> <td>ポスター完成</td> <td>越前市出身の劇画家池上遼一氏にオリジナル原画の制作依頼し、ポスターの作成費用を 70 人以上の協力金で賄う。</td> </tr> <tr> <td>H23 年 10 月 H23 年 6 月 H23 年 11 月</td> <td>市内中学校の学校給食料理教室開催 11 メートルのボルガライス</td> <td>中学校のスクールランチにボルガライスが採用 地元公民館がボルガライスの料理教室を主催 武生南小学校の設立 111 年記念事業として、11 メートルのボルガライス 3 本を作り「111」の文字を完成させる</td> </tr> <tr> <td>H24 年 2 月</td> <td>JAL 機内食に</td> <td>JAL (日本航空) の国際線の機内食にボルガライスが採用</td> </tr> <tr> <td>H25 年 1 月</td> <td>サークル K サンクスで 全国発売</td> <td>お弁当として 2 週間限定で全国発売</td> </tr> </tbody> </table>			年月	事柄	概要	H22 年 10 月	ポスター完成	越前市出身の劇画家池上遼一氏にオリジナル原画の制作依頼し、ポスターの作成費用を 70 人以上の協力金で賄う。	H23 年 10 月 H23 年 6 月 H23 年 11 月	市内中学校の学校給食料理教室開催 11 メートルのボルガライス	中学校のスクールランチにボルガライスが採用 地元公民館がボルガライスの料理教室を主催 武生南小学校の設立 111 年記念事業として、11 メートルのボルガライス 3 本を作り「111」の文字を完成させる	H24 年 2 月	JAL 機内食に	JAL (日本航空) の国際線の機内食にボルガライスが採用	H25 年 1 月	サークル K サンクスで 全国発売	お弁当として 2 週間限定で全国発売
年月	事柄	概要																
H22 年 10 月	ポスター完成	越前市出身の劇画家池上遼一氏にオリジナル原画の制作依頼し、ポスターの作成費用を 70 人以上の協力金で賄う。																
H23 年 10 月 H23 年 6 月 H23 年 11 月	市内中学校の学校給食料理教室開催 11 メートルのボルガライス	中学校のスクールランチにボルガライスが採用 地元公民館がボルガライスの料理教室を主催 武生南小学校の設立 111 年記念事業として、11 メートルのボルガライス 3 本を作り「111」の文字を完成させる																
H24 年 2 月	JAL 機内食に	JAL (日本航空) の国際線の機内食にボルガライスが採用																
H25 年 1 月	サークル K サンクスで 全国発売	お弁当として 2 週間限定で全国発売																

	H25年9月	ボルガライス味のあられ発売	地元あられ工場でボルガライス味のあられを販売。パッケージデザインを地元仁愛大学の学生が考案
	H26年4月	タイ(バンコク)にボルガライス	タイのバンコクにある飲食店でボルガライスが提供され、人気商品に!
	H27年3月	市内提供店20店舗達成	市内のボルガライス提供店が20店舗に!
	H27年5月	オタフクソースとソース開発	オタフクソースとボルガライス専用ソースを共同開発し、全国発売!
	H28年10月	ランチパックにボルガライス味登場	山崎製パンよりボルガライス味のランチパックが発売
	H30年4月	子育てコミュニケーションアドバイザー	越前市男女共同参画センターにて子育て講座の講師を務める
	H31年6月	絵本出版	絵本「いなくなれ おぼけのバッチン」を制作し、出版
	H31年7月	「極・池上遼一展」開催	池上遼一氏初の企画展「極・池上遼一展」が開催、観光協会と協働でボルガライスを食べようキャンペーンを実施。

## ■報告者の取組紹介(展開の経緯・流れ)

### ●STEP 1 日本ボルガラー協会の設立(H22年3月)

平成21年4月に越前市役所に入庁し、前例踏襲で新しいことにチャレンジさせてもらえないことへの苛立ちと、市民からの「補助金がないとまちづくりなんてできない」という声に違和感を覚え、お金もかけず楽しくまちづくり活動をやってみようと思いつく。



そして、私を含む市役所職員3人で福井県越前市に40年以上前からあったオムライスにトンカツを乗せたご当地グルメ「ボルガライス」をPRし、ボルガライスを通して越前市を知ってもらい、来てもらうことを目的とした日本ボルガラー協会を設立。

協会での活動は、仕事ではなくあくまで協会メンバーのプライベートな市民活動として行い、越前市内にあるボルガライス提供店5店舗を食べ歩き、写真やボルガライスの特徴についてまとめたホームページを作成する。

### ●STEP 2 ポスター作製で一気に注目度UP(H22年10月)



▲H22.11.27 福井新聞



▲H23.10.27 日刊県民福井

越前市出身の劇画家「池上遼一」氏にボルガライスをPRするためのオリジナルポスターの制作を依頼。池上遼一氏が描いてくれたポスターが完成するとマスコミ各社からの取材があり、一気に「ボルガライス」に注目が集まる。

その後、市内でボルガライスを提供する飲食店が増加。H23年10月には、市内中学校のスクールランチとして初めてボルガライスが提供され、今では、市内の中学校、小学校のみならず県内の学校給食でボルガライスが提供されるようになっている。

### ●STEP3 多発する市民や企業によるボルガライスの取り組み



▲H25.9.18 日刊県民福井

さらにJALの国際線の機内食や各社コンビニの弁当としてボルガライスが採用され、サークルKサンクスでは2週間限定で全国発売、オタフクソースと共同開発したボルガライス専用ソースも販売されるなど大手企業でも様々な取り組みが行われた。

公民館でのボルガライスの料理教室や武生南小学校の設立11周年記念事業で11メートルをボルガライス制作など市民によるボルガライスに関わる取り組みが行われるようになった。また、地元の企業からボルガライス味のあられ「ボル菓」(ボルガ)やボルガライスの押し寿司「どこでもボルガライス」、ボルガライスにそっくりな見た目の「ボルガアイス」などのボルガライスの派生商品が開発発売される。



▲H27.5.14 日刊県民福井

### ■取組を進める過程で生じた課題

- ・ポスターの原画制作費や印刷費など費用をどうするか
- ・活動に関係のない人からのネガティブな言葉

### ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

#### ●多くの人に活動に参加してもらう「アナログファンディング」



▲ボルガライスポスター

ボルガライスポスターを制作する際に、池上遼一氏の原画作成費用と印刷費で多額の費用が必要となった。しかし、ここであえて補助金に頼らず、市民70人以上から1口1,000円の協力金を集め、費用を賄った。そして、協力してくれた人に完成したポスターをプレゼントしたところ、民家や美容室、酒屋、電気屋、お寺などにポスターが貼られ、多くのマスコミがそうした様子取材してくれ、一気に「ボルガライス」に注目が集まった。

#### ●自分の楽しいと思えることに取り組む

今までにない活動を始めると市役所内をはじめ市民からも「そんなことやって何になるんだ」、「今さらPRしたところで何も変わらない」、「そんなことをするなら仕事をしろ」などと少なからずネガティブな発言をされることがある。しかし、あくまでこの活動はプライベートな市民活動ということで「自分たちが楽しい」と思えることに取り組んできた。

間違いなくそうした楽しさが伝わり、市民だけではなく地元企業などもボルガライスに関わる取り組みを自主的に行ってくれたと思う。補助金をもらうため、計画にすでに書かれているためではなく、自分たちのまちを良くするために活動していればワクワクするし、そのワクワクが多くの人を引き付けるのだと実感した。



▲H26.3.17 福井新聞

## ■成果



▲H23.10.9 福井新聞

協会メンバーだけではなく、地域のお店や企業の協力があり、市内のボルガライス提供店は協会設立当初の5店舗から最大20店舗まで増加、学校給食や多数の観光情報誌に掲載されたため市内のボルガライス認知度も20%から98%に増加しました。もちろんお店でもボルガライスが1日5食ほどだったのが1日40食に増えたお店や市外からの観光客で行列ができるお店ができるなどボルガライス提供による経済効果も十分にあった。

また、これらのボルガライスの活動が評価され、平成25年8月に「ふくい人の力大賞2013」、令和元年11月に「地方公務員が本当にすごい！と思う地方公務員アワード2019」を受賞することができた。

何より一番の成果は、越前市役所内の若手中堅職員が私と同じように自分の楽しいと思えること。そして、市役所の中では、そうした職員のまちづくりの取り組みを「庁内起業」と呼び、市役所内のある杭を応援する風土ができあがった。



▲H26.4.6 朝日新聞

## ■受講前の課題・人財塾で学びたいこと

- ・熱意をどう形にしていけるか
- ・新たなまちづくりへの一歩をどう踏み出させるか

## ■受講後の取組、今後の方向性

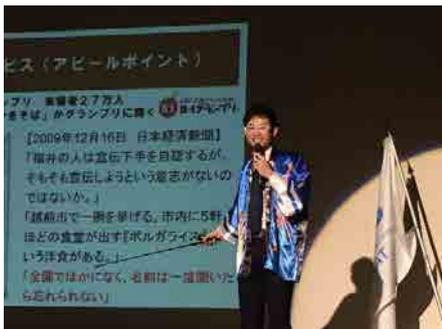
### ●当事者としての強みでチャレンジ



人財塾で当事者としての問題意識が強みとなり、多くの人を巻き込む原動力になることを学んだ。私は、3人の娘を持つ親として子育ての楽しみを知ると同時に大変さも実感。そこで、「チャイルドコーチングアドバイザー」と「チャイルドカウンセラー」の資格を取得し、ニコニコしながら子育てができる親御さんを増やそうと子育て講座の講師を務めている。また、講座の中で「子どもが友だちを叩くこと」に悩んでいる親御さんが多いことに気づき、少しでもそういった悩みを軽くできないかと考えて絵本「いなくなれ おばけのバッチン」を製作、出版した。



### ●切磋琢磨する仲間づくりにチャレンジ



人財塾では、まちづくりを行う上で、活動内容は違うが意見交換をしたり、協働したりする仲間が重要だということも学んだ。しかし、実際には、ネガティブな意見になかなかまちづくりへの一歩が踏み出せない人も多く感じている。現在、年間20件ほどの講演の依頼があるので、そうした機会を活用し、ボルガライスの活動のように小さな一歩でまちが変わったことを多くの人に知ってもらい、まちづくりへの一歩を踏み出す仲間を増やしていきたいと考えている。

## 6. 滋賀県高島市 これからの地域経営にファンドレイジングを活かす

高島市総合戦略課 戸田 由美 (H23 JIAM 受講)

<b>市町村 (地域) 概況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口：48,311人(2019.10月末)、面積：693 K㎡</li> <li>琵琶湖の水の1/3を発する森林と琵琶湖に囲まれた自然豊かな地域。一方、鉄道で京都に45分、大阪に75分と関西都市部に好アクセス。</li> <li>2008年の約56,000人をピークに人口減少が進む。高齢化率県下一。</li> </ul>		 <p>滋賀県</p>
<b>活動主体 と 活動地区</b>	報告者の活動経歴	2013年「認定ファンドレイザー」資格取得。非営利組織の組織基盤強化や資金調達を考える「ファンドレイジング研究会」を主宰。2015年「日本ファンドレイジング協会関西チャプター」設立、2019年6月まで共同代表。関西圏でファンドレイザー創出や育成、相互交流に携わる。	
<b>地域づくり の状況</b>	2005年に5町1村が合併して市制施行。市内204の区・自治会における顔の見える関係をベースとしながらも、持続可能な地域運営に向けて、より広域的なコミュニティのあり方「地域自治組織」の設立に向けた検討を重ねている。		
<b>地域課題 または 問題意識</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>前職(公益法人)で行政補助打ち切りを目の当たりにし、行政支援を得ている団体が今後同様の課題に直面すること、これを克服するため自ら資金調達力を高めるべきと実感。</li> <li>市役所入庁後は、市内の市民活動団体が他地域に比べて行政補助だのみの傾向が強いデータを目にし、同様の課題意識を感じる。</li> </ul>		
<b>これまでの 取組 (受講前 の取組)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>受講前は自身の知見を高めることと、まずは「ファンドレイジング」という言葉を高島市内に伝えることが目標。</li> </ul>		
	<b>開始年月</b>	<b>事柄</b>	<b>概要</b>
	<b>2010</b>	<b>ファンドレイジング日本への参加</b>	日本ファンドレイジング協会主催「ファンドレイジング日本」に参加し、全国の成功事例に触れる。
<b>2011</b>	<b>市内でのファンドレイジング普及啓発</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>職員組合活動で、日本ファンドレイジング協会事務局長を招聘し、職員と市民活動団体向けに講演会を開催。</li> <li>市内の中間支援センター主催がする市民活動の講座で全国の「ファンドレイジング」事例等を紹介。</li> </ul>	
<b>人財塾の 受講目的</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全国各地の地域づくり実践例を学ぶ。またその実践者との交流。</li> </ul>		
<b>人財塾で 学んだこと</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>リーダーシップは、特定の誰かでなく個々人の中に見出されるということ。</li> <li>誰かの思いに共感する人が集まった時に、集まった力が物事を動かす推進力になること。</li> </ul>		
<b>受講後の 取組</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地方の機会差克服のため、関西圏でファンドレイジングを学ぶプラットフォームを創出。</li> <li>ファンドレイジングの知見を市役所業務にも導入。</li> </ul>		
	<b>年月</b>	<b>事柄</b>	<b>概要</b>
	<b>2013.9</b>	<b>「ファンドレイジング研究会」主宰</b>	関西圏で仲間を集め、年4回程度ファンドレイジング事例等を共有する勉強会を始める。同時にfacebookグループを立ち上げSNSコミュニティをつくる。
	<b>2015.1</b>	<b>関西チャプター設立、共同代表に</b>	チャプター設立。協会(本部)からの支援に加え、会員制度を創設し、自主財源も得て定期的に勉強会実施。またファンドレイザー創出のための研修等にも携わる。
<b>2016.10</b>	<b>高島市への寄付金つき商品の開発</b>	フルタ製菓との連携により、本市限定販売の「セコイヤチョコレート」を企画。売上の一部をフルタ製菓から本市に寄付いただく「寄付金つき商品」としてリリース。	

## ■報告者の取組紹介（展開の経緯・流れ）

### ● STEP1 ファンドレイジングとの出会い

前職で、大阪府が設立した「大阪（現：日本）センチュリー交響楽団」に勤務。在職時に海外オーケストラでインターン実習されていた方の講演を聞く機会があり、地域住民に愛されるオーケストラ運営の背景にある「ファンドレイジング」に関心を持つ。在職時は楽団經理のほか、文化庁や民間助成団体への助成金申請業務、法人賛助会員等の営業に携わる。

2008年に大阪府からの運営補助金削減が示され、業務では楽団への寄付金つき商品の開発のほか、楽団員ほか有志の開催による「頑張れ！センチュリーコンサート」の運営に携わった。



↑ 楽団への寄付金つき  
エコバッグの企画・販売



←コンサート開催の  
チラシ、プログラム原稿の作成  
↓協賛広告原稿の作成や  
先方確認、入稿作業を行った



### ● STEP2 ファンドレイジングを学ぶ・広める

2009年に設立された日本ファンドレイジング協会に関心を持ち、翌年に開催された「ファンドレイジング日本2010（以降、2019まで皆勤!）」に参加、全国のファンドレイジング成功事例に触れる。

この時、ファンドレイジング協会事務局長 鶴尾雅隆さんのお話を聞き、「絶対、この人と知り合いになる!」と決意。その後、2011年2月に職員組合の活動で高島市に鶴尾氏を招へいし、職員や市民活動団体向けに、「ファンドレイジング」の概念を知らせる講演会を開催。折しも半月後に東日本大震災が起り、寄付による市民の社会参画に注目が集まった。

その後、協会がファンドレイザーの資格制度を創設することを聞き、「絶対、1回目の試験でファンドレイザーになる」とまたまた決意。



高島市に日本ファンドレイジング協会 鶴尾氏を招へい。

## ■取組を進める過程で生じた課題

- ・自身の個人的経験、また当時所属していた市民活動支援課の業務の上でも、市民活動団体のような非営利組織が、善意や思いだけでなく、自らの活動のビジョンをしっかりと持ち、共感者を増やすことで「市民の課題解決力」を向上させるとともに、課題に取り組む間の組織運営や資金調達も含めた経営をしっかりと考えなければいけない時代であると感じていた。
- ・一方で、こうしたファンドレイジングに関する学習機会は東京が主であり、地方圏には機会が少ないことに加え、クラウドファンディング等の隆盛でその「手法」だけが注目され、ファンドレイジングの基盤となる組織経営への理解が薄いと感じていた。

## ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

### ○いきなり人を巻き込もうと気負わずに、まず自分が楽しくやる

初めから多くの人にファンディングを広めようと気負わずに、市内の人からちょっと見える距離で、私自身が楽しくファンディングを学び、ファンダーと交流する。その楽しい姿が人からチラチラ見えるところで泳ぐ(笑)。その上で「ファンディングについて教えてほしい」と声がかかれば、喜んで行くということを意識していた。市内や市役所に理解者が少ない時点では、関西圏のファンダーと交流できる別のコミュニティを持ち、そのコミュニティと普段のコミュニティをほんの少し重ねておくというのがポイント。

## ■成果

### ○高島市内にファンダー仲間誕生！

私自身が1回目(!)の試験で「准認定ファンダー」資格を取得した(2012年6月)半年後に、市内の中間支援センター事務局長が2回目の「准認定ファンダー」試験を受験し、資格取得。その時点で私自身は、一つ上位の「認定ファンダー」1回目(!)試験を受験し認定ファンダー資格を取得(2013年2月)。同じタイミングで、高島市に准認定ファンダーと、認定ファンダーが誕生することになった。

市内、県内の中間支援団体や他自治体でファンディングの話をした後、その団体からファンダーが誕生したことを知るのが、自身の貢献を感じられる機会。目の前のたった1人の人の心に届き、何か行動変容を起こすことができる、そうありたいと思っている。

## ■受講前の課題・人財塾で学びたいこと

- ・誰かが始めた地域活動が、どう波及していくかということに興味があった。

## ■受講後の取組、今後の方向性

### ○ファンディング研究会の開始(2013年9月)

関東圏で活躍していたファンダー仲間2人が関西に来る機会があり、私と3人でそれぞれのファンディングについて共有する勉強会を京都・滋賀のくくりでやろう!と発起。20人程度の参加者を得て(うち高島市関係者6人)、「これから京都や滋賀でこういう気運が盛り上がるだろう!」という熱気に包まれて終了。

折角なのでと大阪や兵庫のファンダー仲間にも声を掛けたところ、12月以降は対象者を関西2府4県に広げて定期的に勉強会をすることになり、後の「日本ファンディング協会関西チャプター」の萌芽となる。人の力を集めて活動を広げる推進力にするというところは人財塾で学んだこと。



ファンディング勉強会 京都×滋賀  
(2013年9月)の様子。

行政、NPO、中間支援、社協、大学、コンサル関係者など多様なメンバーが参加。現在の関西チャプター運営委員も数人。

## ○日本ファンドレイジング協会関西チャプターの設立（2015年1月）

日本ファンドレイジング協会（本部）でも、地域にファンドレイザーネットワーク（チャプター）を創設していく必要性を認識し、北海道、東海、関西、九州のチャプター設立をサポート。

2015年1月に関西チャプターを創設、同時に共同代表に就任。東京に行かなくても、関西で継続的にファンドレイジングを学び、「准認定ファンドレイザー」資格が取得できる環境整備を目標に、年6回程度の研究会やセミナーの開催、年2回の准認定ファンドレイザー必修研修と資格試験の運営をベースに活動を行っている。公務員でありつつ、「市民」であることの誇りを忘れずに多様な人と交わることは、結果的に自分の仕事を豊かにするというのも受講後に実感したこと。NPO、公益法人、社会福祉法人、大学、行政、中間支援、行政書士等様々な主体がゆるくつながり、いざとなれば実際に会うことができるという、これからの社会を支え合うプラットフォームを築くことが目標。



左) 関西圏で活躍するNPOの組織基盤強化研修を、ファンドレイザーとしてサポート。

右) 2016年12月、大阪大学で開催した 地方版「ファンドレイジング日本」。高島市社協からもファンドレイジング事例を紹介したほか、高島市役所からも2人の仲間が参加してくれた。立命館大生もボランティアで関わる。

## ○市役所業務にファンドレイジングを活かす（2016年10月）

高島市内にある全国的な観光名所「メタセコイア並木」と、定番商品「セコイヤチョコレート」の名前の縁で、高島市とフルタ製菓株式会社で提携を検討。高島市内限定販売のセコイヤチョコレート土産品の開発にあたり、両者で包括連携協定を締結し、商品売上の一部をフルタ製菓から高島市に寄付する寄付金つき商品とすること、市内独自の商流を構築することを両者で企画。

2019年9月末現在、商品売上は60,000千円超、フルタ製菓から高島市への寄付金は1,800千円超（予定額含む）となった。活動と業務をつなげたことは、一つのマイルストーン。



高島市内限定販売 寄付金つき  
「メタセコイヤチョコレート」

## ○滋賀大学大学院で経営学を学び、そしてこれから（2017年4月～）

ファンドレイジングの概念には経営の概念も含まれることから、非営利組織を中心とするファンドレイジング、企業等営利組織を中心とする経営学の両方を学んでこそやっと「スタート地点」と感じていたため、県内の大学院で経営学を学ぶこととした。

先のフルタ製菓との連携から、今後の地域経営における企業の役割の再確認、また「資源の共有」という考え方が必須と感じ、修士論文テーマを「自治体と企業の戦略的協働に関する考察～CSV事業の事例から」とし、2019年3月に無事修了。

またこれからの地域経営を考える上で、地域経済循環を考えたいという思いが芽生え、新たに「絶対、●●●●になる！」という決意を持っている（笑）。願掛け時点では公言しない主義。日本ファンドレイジング協会関西チャプターの共同代表を後任の方に譲り、新しい隙間時間で現在勉強中。

地域づくりは、日々変容していく。学び続けることも重要だと感じている。

## 7. 山形県置賜広域行政事務組合 広域連携による人財育成～人と地域がつながる置賜へ

置賜広域行政事務組合 齋藤 拓也 (H26 JAMP 受講)

<p><b>市町村 (地域) 概況</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口 215,097 人 (H27 国勢調査速報値)、面積 2,495.52 km<sup>2</sup></li> <li>米沢市を中核とした 3 市 5 町で構成され、温泉や四季折々の自然風景や米沢牛や果樹などの美味しい食があり、歴史的・文化的なつながりのある圏域</li> <li>今後 30 年で圏域人口は 4 割近く減少し、特に年少人口と生産年齢人口が約半分になる見込みであるが、平成 30 年から定住自立圏をスタートし、圏域で新たな価値創造による課題解決を目指している。</li> </ul>											
<p><b>活動主体と活動地区</b></p>	<p>報告者の活動経歴</p>	<p>平成 24 年度から、圏域住民と共に『置賜の食』を通じて置賜の魅力を発信する「置賜八食祭」と、平成 25 年度から第 5 次ふるさと市町村圏計画に掲げた「新たな広域連携の研究・推進」業務を担当していた。</p>										
	<p>活動地区</p>	<p>置賜 3 市 5 町 (米沢市・長井市・南陽市・高畠町・川西町・白鷹町・飯豊町・小国町)</p>										
<p><b>地域づくりの状況</b></p>	<p>本組合では、平成 2 年から 20 年以上に渡り、広域計画に置賜圏域全体として「置賜に住みいきいきとした置賜をつくって行く人材」の育成を掲げ、ふるさと市町村圏基金の運用益を活用した住民参加型の様々な人材育成事業を実施してきた。</p>											
<p><b>地域課題または問題意識</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>置賜八食祭という住民参加型でイベントを企画運営し実施する中で、毎年度成功するものの、イベントの実施が目的となり、「置賜に住みいきいきとした置賜をつくって行く人材」の育成という目的とずれてきてしまっているのではないかと感じていた。</li> <li>新たな広域連携の研究・推進ということで、置賜 3 市 5 町の企画担当職員と協議を進めていたが、総論賛成、各論反対の状況から、上手く進めることができずにいた。</li> </ul>											
<p><b>これまでの取組 (受講前の取組)</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>置賜各市町から推薦された地域づくりに取り組む住民と一緒に置賜八食祭を実施した。</li> <li>新たな広域連携の研究・推進に向けて、置賜各市町の企画担当職員と協議を進めていた。</li> </ul> <table border="1" data-bbox="343 1234 1455 1518"> <thead> <tr> <th>開始年月</th> <th>事柄</th> <th>概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H24. 10 月</td> <td>置賜八食祭</td> <td>置賜 3 市 5 町から推薦された住民 16 名で実行委員会を設置し、10 月の実施に向け、4 月から月 2 回以上の会議を行い、置賜地域の人的ネットワークを作り、人材育成を図りながら、事業を進めてきた。</td> </tr> <tr> <td>H25. 4 月</td> <td>新たな広域連携の研究・推進</td> <td>置賜 3 市 5 町の企画担当職員と、広域連携で解決できそうな課題を洗い出し、施策の検討を行った。</td> </tr> </tbody> </table>			開始年月	事柄	概要	H24. 10 月	置賜八食祭	置賜 3 市 5 町から推薦された住民 16 名で実行委員会を設置し、10 月の実施に向け、4 月から月 2 回以上の会議を行い、置賜地域の人的ネットワークを作り、人材育成を図りながら、事業を進めてきた。	H25. 4 月	新たな広域連携の研究・推進	置賜 3 市 5 町の企画担当職員と、広域連携で解決できそうな課題を洗い出し、施策の検討を行った。
開始年月	事柄	概要										
H24. 10 月	置賜八食祭	置賜 3 市 5 町から推薦された住民 16 名で実行委員会を設置し、10 月の実施に向け、4 月から月 2 回以上の会議を行い、置賜地域の人的ネットワークを作り、人材育成を図りながら、事業を進めてきた。										
H25. 4 月	新たな広域連携の研究・推進	置賜 3 市 5 町の企画担当職員と、広域連携で解決できそうな課題を洗い出し、施策の検討を行った。										
<p><b>人財塾の受講目的</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域づくり人財塾の講師から学び、これまでの取組みだけでなく、様々なことに活用するため受講し、現在の状況を前に進めるための具体策について学びたかった。</li> </ul>											
<p><b>人財塾で学んだこと効果</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>豊重講師の「目くばり、気くばり、心くばり」、飯盛講師の「プラットフォームと創発」、森講師の「ブランドハプンスタンスセオリー」、前神講師の「県職員として地域に飛び出すこと」といった講師の話から様々なことを学ぶことができた。</li> <li>人財塾の置賜支部を作るという行動宣言を行い、置賜地域で人財塾の学びを共有したい方に声かけを行い、楽しく活動し学ぶことができる仲間づくりから始めた。</li> <li>人財塾受講の半年後には、前神講師のサポートを受け、置賜圏域の広域連携による人材育成事業がスタートし、個人として、(構成市町の職員とともに) 豊重講師のやねだん故郷創世塾に参加することができた。</li> <li>平成 28 年 8 月には、地域づくり人財塾東北自主研修@仙台を開催した。</li> <li>仕事以外でも、地元の取り組みを前向きに捉え、新たな取り組みも始めることができた。</li> </ul>											

<b>受講後の 取組</b>	・前神講師とのつながりから、(一財) 地域活性化センターの支援を受け、置賜圏域の広域連携を進めるため、人財育成事業を始めることができた。	
	年月	事柄
	H27. 4 月	<b>置賜圏域の広域連携 による人財育成事業</b>
		<b>概要</b>
		置賜圏域の広域連携を進めるため、置賜3市5町の首長、職員を対象に視察や研修を主体とした「広域連携事業」を実施し、3市5町と連携し置賜圏域で移住交流フェアへ共同出展した。 また、住民参加型でイベントを実施する広域人材の育成ではなく、講座(座学)と視察を主体とした住民向けの人財育成事業「人と地域をつなぐ事業」を実施した。

### ■報告者の取組紹介(展開の経緯・流れ)

#### ●STEP1 置賜八食祭(H24年10月)

ふるさと市町村圏計画の一部として「広域活動計画」を策定し、ふるさと再発見として『置賜の食』を通じて置賜の魅力を発掘するとともに、行政や住民が互いに協力し合い、「広域的交流活動の推進」及び「広域的人材の育成活用」を図り、もって3市5町のさらなる連携につなげることを目的に、「置賜8市町が『食』でひとつになろう!置賜の魅力や特色(うまいもの)を再発見しよう!」をテーマとした「置賜八食祭」を実施した。

置賜3市5町から推薦された住民16名で実行委員会を設置し、10月のイベントに向け、4月から月2回以上の会議を行い、「置賜に住みいきいきとした置賜をつくって行く人材」の育成を図りながら、置賜の人的ネットワークを作り、事業を進めてきた。



#### ●STEP2 新たな広域連携の研究・推進(H25.4月)

平成24年に「第5次ふるさと市町村圏計画」を策定し、豊かなふるさとを創造するおきたま共存圏が基本構想。基本目標に掲げた「新たな広域連携の研究・推進」に取り組み、置賜3市5町の企画担当係長と広域連携に関する課題抽出を行った。

### ■取組を進める過程で生じた課題

- ・置賜八食祭というイベントを住民参加型で企画運営し実施する中で、多くの来場者があり、毎年度成功するものの、イベントの実施が目的となり、「置賜に住みいきいきとした置賜をつくって行く人材」の育成という目的とずれてきてしまっているのではないかと感じていた。
- ・新たな広域連携の研究・推進ということで、置賜3市5町の企画担当職員と協議を進めていたが、総論賛成、各論反対の状況から、上手く進めることができずにいた。

### ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

- ・置賜八食祭では、地域住民による実行委員会を組織し、住民主体となるような運営を心がけてきた。

- ・新たな広域連携の研究・推進では、各市町の職員から理解していただけるよう丁寧に進めてきた。

## ■成果

- ・置賜八食祭では、実行委員会に参加していただいた方のつながりができ、イベント自体にも多くの集客があった。
- ・新たな広域連携の研究・推進では、広域連携で解決できる可能性がある課題を抽出することができた。

## ■受講前の課題・人財塾で学びたいこと

- ・「取組を進める過程で生じた課題」で記載した課題を解決するためのきっかけがなく、難しく感じていたため、地域づくり人財塾の講師から学び、これまでの取組だけでなく、様々なことに活用するため受講した。現在の状況を前に進めるための具体策について学びたかった。

## ■受講後の取組、今後の方向性

地域づくり人財塾に参加して、豊重講師の「目くばり、気くばり、心くばり」、飯盛講師の「プラットフォームと創発」、森講師の「ブランドハプンスタンスセオリー」、前神講師の「県職員として地域に飛び出すこと」といった講師の話から様々なことを学び、実際の取り組みに反映することができた。

個人としては、人財塾の置賜支部を作るという行動宣言を行い、人財塾に置賜地域から参加している同期や先輩、置賜地域で人財塾の学びを共有したい方に声かけを行い、楽しく活動し学ぶことができる仲間づくりから始めた。人財塾受講の半年後に豊重講師のやねだん故郷創世塾に参加したことで、地元の取り組みを前向きに捉え、新たな取り組みも始めることができた。

業務としては、前神講師のつながりから、人財塾受講の半年後に置賜圏域の広域連携による人財育成事業がスタートして、現在も続いている。

そういった動きから、平成 28 年 8 月には、卒塾生のネットワークで地域づくり人財塾東北自主研修@仙台を開催することができた。

また、自分が受講したあと、本組合の職員が全国地域づくり人財塾を毎年受講しており、これまで 5 名の職員が卒塾生となっている。

これからも、全国地域づくり人財塾での学びを活かして、個人としてできること、業務としてできること、両方に取り組んでいきたい。

## ●全国地域づくり人財塾 置賜支部 (H26 年 12 月) 個人

全国地域づくり人財塾の学びを共有するために置賜支部として、人財塾に置賜地域から参加している同期や先輩、置賜地域で学びを共有したい方に声かけを行い、楽しく活動し学ぶことができる仲間づくりをするために活動を始め、自主研修や合宿などを実施した。



## ●第 17 回 やねだん故郷創世塾参加 (H27 年 5 月) 個人

地域づくり人財塾の豊重講師の講話を聴き、実際にやねだん故郷創世塾に参加したいと思うようにな

り、半年後、第17回を受講した。人財塾で聴いた話を実際にやねだん故郷創世塾で体験することで、理解を深めることができた。平成28年3月には、人財塾の同期や先輩と協力して、地元の山形県南陽市主催で豊重講師の講演会とやねだん故郷創世南陽塾を開催し、地域の方に豊重講師の話を聴いていただく機会を作ることができた。



### ●子供消防隊結成（H28年5月）個人

南陽市消防団第7分団1部1班の団員の子供達で結成し、毎月第1週の夕方に親子で「火の用心」と拍子木を鳴らして、まちをまわる活動を始めた。おそろいの法被とTシャツを揃えて、みんながちよっとだけ嬉しいをインセンティブに、長く続く活動にしたいと思いつけ、始めてから4年目となった。地域で「30年」の輪転が続くように親から受け継いだものを子供達へつないでいきたい。



### ●広域連携事業（H27年3月～現在）業務

新たな広域連携の研究・推進として課題抽出を進めていたが、まずは広域連携する土壌を醸成するために、置賜3市5町の職員が広域連携について学ぶところから始めることになった。前神講師に相談したところ、(一財)地域活性化センターとして支援を受けることになり、地域づくり人財塾を受講した半年後にはキックオフミーティングを行い、平成27年度から広域連携事業を実施し、5年目となっている。

当初はテーマを広域連携での移住施策とし、置賜3市5町の職員と共に勉強会や実地研修を通じて学びながら、移住交流フェアに共同出展するなどの事業も実施した。また、置賜3市5町の首長向けのセミナーや視察研修もあわせて行うことで、広域連携に関する理解を深めながら進めてきた。

翌年度からは、広域でRESASを活用した地域経済循環分析や定住自立圏構想などを学び、現在は港区との遠隔自治体間連携に挑戦しながら事業を進めている。令和元年5月には、飯盛講師と前神講師を招き、首長向けの講演会を開催した。



●おきたま地域づくり～人と地域をつなぐ事業～（H28.3）業務

全国地域づくり人財塾受講後、住民参加型のイベントを企画運営し実施する中で人材育成をするのではなく、「置賜に住みいきいきとした置賜をつくっていく人材」の育成を目的とした事業を実施することとした。置賜の住民向けの広域的人財育成事業として、「おきたま地域づくり～人と地域をつなぐ事業～」という名称とし、東京都市大学都市生活学部の坂倉杏介准教授を講師に招き、講座と視察研修を主体として事業を進めている。「人と人」「人と地域」のつながりづくりと「新たな楽しみの発見・地域に関わるきっかけ」づくりとして、現在4年目となっている。受講者は4年間で52名となり、約7割が女性となっている。

『開かれていて多様性があること。違いを超えてともにあること。』、『まだ見えていない価値を模索すること。未来を志向すること。』これまでの『地域おこし』の『型』に合わせるのではなく、一人一人が持ち味を発揮して生きること。自分たちの望む未来の暮らし方を実践し、そのために、必要なまちをつくること。」この言葉を「ゆるふわ」という講座のキーワードにして、事業を進めている。地域の課題解決のために何をするかではなく、「私を生かして地域を活かす」という発想の転換に気づき、共感から新しい価値を創造する小さな社会実験に取り組んでいる。





また、この事業から、東京都市大学坂倉杏介研究室の夏合宿受入れが始まり、大学との合同事業を実施するようになった。この事業では、視察研修として毎年東京港区芝地区にある「芝の家」訪問していることがきっかけで、港区芝地区と置賜の住民同士のつながりができ、港区芝地区で置賜のことを考える「24時間トークカフェ置賜」という事業を開催することができた。

令和元年度からは、こうした港区芝地区と置賜の住民同士のつながりから、遠隔自治体間連携事業が始まったほか、「人と地域をつなぐ事業」、東京都市大学坂倉研究室、米沢市の町内会のコラボレーションで、つながりが薄れ、活気がなくなっていた町内コミュニケーションを再生するという小さな社会実験を学生と住民主体で実施するなど、暮らして楽しい地域づくりに挑戦している。令和2年2月には、シンポジウム開催を予定しており、第1期から現在の4期までの参加者と共に企画と準備を進めている。



## 8. 福井県大野市 公務員として地域づくりを支える～カタクリ百万本の里山づくり

大野市湧水再生対策室 今村 智子 (H26 JIAM 受講)

<p><b>市町村 (地域) 概況</b></p>	<p>・人口 33,013 人 (2019 年 11 月 1 日現在)、面積 (872.43K m<sup>2</sup>)          ・市の 87% を森林が占める自然豊かな農村。急激な少子高齢化・人口減少が続く中、2040 年には高齢人口と生産人口が逆転すると予測されている。</p>														
<p><b>活動主体と 活動地区</b></p>	<p>報告者の活動 経歴</p>	<p>2009 年 森林整備を担当。地域づくりに携わり始める          2012 年 福井放送かがやき基金 準大賞          2014 年 人財塾参加          2015 年 第 7 回 ゆめづくりまちづくり賞 優秀賞          2015 年 関西元気な地域づくり発表会 事例発表          2015 年 国土交通省 地域づくりメルマガに掲載される          2016 年 第 30 回 手づくり郷土賞 国土交通大臣表彰受賞          人財塾にて事例報告 (全講義を受講)          2017 年 国土交通白書 2016 「第 4 章 地域活性化の推進」に掲載される          中心市街地の景観修景事業を行い城下町の再生に携わる          2017 年 地方創生・人口減少対策事業を担当。特に世界へのアピールを担当。          2018 年 ブラジルで開催された世界水フォーラムに参加。学術会議で活動発表。          日本パビリオンを視察された令和天皇に活動を副市長からご説明。</p>													
<p>活動地区</p>	<p>福井県大野市</p>														
<p><b>地域づくり の状況</b></p>	<p>大野市総合計画の重点プロジェクトとして、市が誇る魅力ある全ての資源を磨き上げ、市全体を世界へアピールする戦略を展開。市民と行政が一体となった様々な取り組みを進めている。</p>														
<p><b>地域課題 または 問題意識</b></p>	<p>行政が行う市全体を対象とする地域づくりは、政治や職員の異動の影響を受けやすく、一貫性ある長期的な取り組みは難しい。前例のない取り組みは批判を受けやすい。</p>														
<p><b>これまでの 取組 (受講前の 取組)</b></p>	<p>構想を持ったリーダーとの出会いが始まり。多くのリーダーは「どこに行っても門前払いだった」と言う。一旦すべて聞き入れ、一緒に考える。制度は断る道具ではない。</p> <table border="1" data-bbox="351 1355 1455 1657"> <thead> <tr> <th>開始年月</th> <th>事柄</th> <th>概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2009.4月</td> <td>矢地区の里山整備の支援</td> <td>自治会を支援し地域の荒れた山林を整備。整備を通し地域資源を見つけ、故郷に自信を持たせる。</td> </tr> <tr> <td>2009.4月</td> <td>平家平の廃村後の森林整備の支援</td> <td>廃村となった故郷を整備し続けることで、故郷の魅力を再認識し、後世へ語りつなげる。</td> </tr> <tr> <td>2009.4月</td> <td>里山銀杏峰の整備の支援</td> <td>市民団体に里山の整備を任せることで、生きがいと故郷への愛を醸成する。</td> </tr> </tbody> </table>			開始年月	事柄	概要	2009.4月	矢地区の里山整備の支援	自治会を支援し地域の荒れた山林を整備。整備を通し地域資源を見つけ、故郷に自信を持たせる。	2009.4月	平家平の廃村後の森林整備の支援	廃村となった故郷を整備し続けることで、故郷の魅力を再認識し、後世へ語りつなげる。	2009.4月	里山銀杏峰の整備の支援	市民団体に里山の整備を任せることで、生きがいと故郷への愛を醸成する。
開始年月	事柄	概要													
2009.4月	矢地区の里山整備の支援	自治会を支援し地域の荒れた山林を整備。整備を通し地域資源を見つけ、故郷に自信を持たせる。													
2009.4月	平家平の廃村後の森林整備の支援	廃村となった故郷を整備し続けることで、故郷の魅力を再認識し、後世へ語りつなげる。													
2009.4月	里山銀杏峰の整備の支援	市民団体に里山の整備を任せることで、生きがいと故郷への愛を醸成する。													
<p><b>人財塾の 受講目的</b></p>	<p>出て来ない人をどうやったら参加させられるか。自分が市をどうやって変えるか。地域づくりに関する質問の模範解答を知りたいと思っていました。</p>														
<p><b>人財塾で 学んだこと 効果</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動の結果でなく過程が大切。</li> <li>・地域づくりは地域によって違っていい。正解はない。</li> <li>・外とのつながりは大切。</li> </ul>														
<p><b>受講後の 取組</b></p>	<table border="1" data-bbox="351 1915 1455 2027"> <thead> <tr> <th>年月</th> <th>事柄</th> <th>概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2015～</td> <td>矢地区の里山整備の支援</td> <td>関西地方、国の表彰を受ける活動に成長。現在も自立した活動を継続中。郷土愛増。空き家ゼロ。</td> </tr> </tbody> </table>			年月	事柄	概要	2015～	矢地区の里山整備の支援	関西地方、国の表彰を受ける活動に成長。現在も自立した活動を継続中。郷土愛増。空き家ゼロ。						
年月	事柄	概要													
2015～	矢地区の里山整備の支援	関西地方、国の表彰を受ける活動に成長。現在も自立した活動を継続中。郷土愛増。空き家ゼロ。													

## ■報告者の取組紹介（展開の経緯・流れ）

仕事以外で地域づくり活動をするのではなく、公務員として様々な地域づくりを支援し、多くの人に自分の住んでいる地区を好きになり、故郷に自信と誇りを持ってもらう取り組みを私流で実践しています。

矢地区という世帯数 30 戸、高齢化が進んだ農村が革命的に生まれ変わった事例を紹介します。

### STEP1：新しい物をつくるな。あるものを磨け！（2009 年）

ここは僻地指定された行政区で、先祖伝来の田畑を守るため、何も無いところに住んでいると村人は思っていました。活動のきっかけは、「小さい頃、遊んだお寺周辺をきれいにしよう」と壮年会が裏山を整備したことでした。整備を継続させるため、桜を植えました。桜を特産にしようと考えた村人たちは、里山や川沿いに桜の植樹を始めました。また、切り花として出荷できる桜も植えました。その作業中、山に埋もれていたカタクリの群生地を発見したのです。次の春、山肌一面に、カタクリが見事に咲きました。



矢は行政区と同じ範囲で委員会を立ち上げました。委員会と行政区の違いは、来ても来なくてもいいというゆるさ。委員会と団体の違いは、メンバー制でない仲良しグループでもないということ。活動報告は全戸配布し、いつでもだれでも参加できる状態を作りました。

### STEP2：10 年続けろ！（2010 年）

里山は整備すればするほど、どんどんカタクリが咲きました。この地に眠っていた宝が目覚めたのです。観光客が大型バスで来るようになり、「大自然が私たちの地域資源だ」と気づかされました。カタクリ畑は西日本最大級の 100 万本 3ha に広がりました。カタクリの里に足を踏み入れた人は、100%「すごーい」と感嘆します。



### STEP3：地域の人の心が変わった。（2015 年）

毎年開いてきた「かたくりまつり」で、観光客と交流することで、村人は、故郷を自慢・誇りに思うようになり、度々、集まるうちに、みんなが仲良くなり、ここに生きることが大好きになりました。

自信がついた大人の背中をみた子供達は、自然とガイドをするようになりました。切り花の桜は、地元では人気商品になりました。これは農閑期の収入源です。今では自然を活かした交流事業も自主的に行っています。

あるおばあちゃんの言葉を紹介します。

「嫁に来たときは、こんなへんぴな所に来てしまって、後悔した。いつ出て行こうかとずーっと思っていた。だけど、こんなことになるとは思わなかった。もう、私、出てかんざ。ありがとのおう。」



## ■取組を進める過程で生じた課題

- ・継続することがつらい。  
→リーダーも私も10年続けるという強い意思を持つこと。表彰制度や補助制度を活用し、1年また1年、そうして継続していけばいい。
- ・新しいものをつくろうとするな。あるものを磨け。  
→新しいものを作っても、結局残っていないのが事実。
- ・出て来ない人、悪く言う人、忙しい人を無理に参加させようとしない。  
→そんなことしても何の得にもならない。いつでも参加できるオープンな窓口づくりをする。
- ・何かいい話ないか？市がしてくれんか。行政への依存体質はだめ。  
→私は指示しない。外作業しない。あくまで黒子。主人公は地域住民。
- ・ボランティアでは続けて出てこない。ボランティアを続けて頼みづらい。  
→補助金ではない自己資金を作り、わずかでも手当を支給する。
- ・団体の多くは文章を読む、書類を作るのが苦手  
→公務員が仕事としてフォローできるところ。

## ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

### ①イベントに顔をだし、地域の人と話す

地域の性格やニーズを自分で把握する。地域の人と信頼関係を築き、お互いの情報を共有できる環境を構築する。情報を持っている市職員でいる。要綱要領の作成や改正、予算付け、計画などに活かす。

### ②ぴったりの補助メニューや表彰を探す

国・県・団体・企業のチラシに常にアンテナをたて情報収集する。人脈はつながるので、思いもかけない情報が、国県の方から提供されることもあった。

### ③文章を読む、書類を作る

団体の多くは補助金の申請や、表彰の推薦書を作成することを苦手としているので、私が、仕事として手伝う。補助や表彰の申請には、焦点をどこに合わせるか、目的によって切り口を変えることも必要。人との距離が近いと、補助金を獲得した時や表彰を受賞した時の喜びが大きく、団体の活力になる。

### ④市役所の広報力と人脈を使う

市の広報力を利用してイベントの集客を。議員や国家公務員に地区へ訪問してもらうことは、地域づくり活動に大きな力を与える。異動はチャンス。補助事業も人脈も広がるから。

### ⑤外の世界と交流する機会を与える

団体が自ら活動をPRしたり、他団体と交流することは活力を生む。田舎者を都会へ連れて行ってあげましょう。行きたい人はみんな行こう。田舎者の自己評価を上げる効果がある。

### ⑥何でも話しに来れる人になる

やりたいという構想を持ったリーダーと出会えたことがすべての始まり。何人かのリーダーから聞いた話だが、「どこの課に行っても門前払いだった」「実績がなく話し合いができなかった」など、市役所に出入りしている煙たい人として扱われていたようだ。どんな人でも一旦話を聞く。そして一緒に考える。できないという結果も、一緒に考えた結果なら、次の一手の参考になる。リーダーは活動的な人達だが、人間だからたまには弱音を吐きたくなる。困ったときの相談相手となれる存在に。互いに愚痴りあい、支えあい。地域づくりに正解はないのだから、基本聞くだけで大丈夫。

## ■成果

私は黒子に徹する。団体を動かすのは団体のリーダーの役目。団体を見守っていたから、団体には自分でやる力が育っている。独自で走り、つまずいたら、私に相談に来る。しかし、自分たちで考えて、また自力で走り出す。そうしてひとりでの充実していく。

## ■受講前の課題・人財塾で学びたいこと

団体のリーダーから毎週のように聞かされる愚痴や質問にどう答えたらいいのだろう。きっと先進事例があるに違いないと思った。しかし、人財塾で、他の市でも同じような活動をしている発表を聞いて、自分の関わっている団体の活動を肯定し、評価する考えに変わった。また、地域づくりは地域ごとに違っていい。先進事例を探さず、自分を信じて、地域がやりたい活動を支えようと考えが変わった。

## ■受講後の取組、今後の方向性

### 広い視野と人脈を常に開拓

公務員として様々な地域づくりを支援し、多くの人に住んでいる地区を好きになってもらい、故郷に自信と誇りを持ってもらうという目標が明確になり、一人ひとりをしっかり見るようになった。地域づくりも行きつくところは人。自分から、一瞬一瞬一人一人が貴重であるという思いをもって、話しを聞くようになって、急に人脈が広がったように思う。

人財塾で教わった「とにかく行動する。考えているだけでは、考えつかないのと同じ。失敗したってもともと」。この精神で、関西地方の地域づくりの表彰制度へ推薦書を書いてみた。ここで評価を受けたことがきっかけで、多くの人に出会い、助けられ、次々に表彰の推薦書を書くことに。表彰を受ける度に、村人と喜びを分かち合い、活動継続の力となった。

矢の委員会が「ゆめづくりまちづくり賞」で優秀賞を受賞した時は、村は、県内初の快挙だといって大いに盛り上がり、祭り状態になった。本来、代表者2名が市長室で国土交通省近畿地方整備局長から表彰を受けるのだが、リーダーから、「わがままいうが、一部の人間が表彰を受けるのではなく、村のみんなで喜びたい。子供から、足腰が弱ったじいさん、ばあさん、みんなで表彰を受けたいんや。だから、無理を言って悪いが、役所に行くんじゃなくて、大阪から村に来てくれんか頼んでもらえんか。そば打ち名人、家庭料理の名人、桜の名人、司会の名人、みんな精いっぱいおもてなしするから。たのむ。」そう頼まれて、こわごわ近畿地方整備局に電話した。帰ってきた返事は「よろこんで伺います。局長以下、どんな所か見てみたいと言っておりまして、お伺いします。」表彰式当日、コミュニティーセンターはお祝いモードに飾られ、そばや郷土料理がふるまわれ、平日だったが多くの村人がコミュニティーセンターに集まり、市長、議員、国家公務員ら多くの来賓と分け隔てなく交わり、老若男女が喜びを分かち合った。この勢いに乗り、ついには、国土交通大臣表彰まで頂いてしまった。



(写真上) ゆめづくりまちづくり賞受賞記念の植樹 (写真下) 手作り郷土賞公開審査の様子

今、仕事で市が誇る水環境と地下水保全の取り組みを国内外へアピールするプロジェクトを展開している。2018年3月にはブラジルで開催された国際会議「世界水フォーラム」へ出張し、PR。基調講演をされた皇太子殿下(現在の天皇陛下)から「よい取り組みですね」とお言葉をかけられた。大野市を世界の水の聖地にする、水への感謝の気持ちを世界とシェアするというあまりにも大きな目標で、迷いながらも、一歩ずつ、少しずつ世界に響いていけばと思っている。自分にできることをして、市の存在価値を少しでも高められたらうれしい。



(写真) ブラジルで開催された世界水フォーラムで、書道パフォーマンスを行い集客し、英語でプレゼンした。

## 9. 千葉県館山市 伝統を紡ぐまちづくり～「房州うちわ」の新たな展開を目指して～

館山市 秋山 歌南子 (H25 JAMP 受講)

<b>市町村 (地域) 概況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口 46,473 人 (平成 31 月 4 日 1 日現在)、面積 110.05K m<sup>2</sup></li> <li>房総半島の南端に位置し、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれ、トライアスロンやロードバイク、マリンスポーツに適した地域。</li> <li>人口減少、高齢化が急速に進んでいる。</li> </ul>		
<b>活動主体と 活動地区</b>	報告者の活動経歴	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成 24 年 4 月入庁 社会安全課に配属 町内会等、住民自治組織の支援を担当</li> <li>平成 28 年 4 月経済観光部商工観光課に配属 産業振興や起業支援等を担当</li> <li>平成 31 年 4 月総合政策部企画課に配属</li> </ul>	
	活動地区	<ul style="list-style-type: none"> <li>館山市内全域</li> <li>「房州うちわ」の産地は、館山市那古・船形地区・南房総市</li> </ul>	
<b>地域づくり の状況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>職員有志によるプロジェクトチームが結成され、地域資源の発掘に取り組んでいる。</li> <li>恋人の聖地 地域活性化大賞においては、地方創生担当大臣賞を受賞。</li> </ul>		
<b>地域課題 または 問題意識</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>高齢化等により、地域活動の担い手が固定化しつつあり、若者や女性の活躍の場が少ない。</li> </ul>		
<b>これまでの 取組 (受講前の 取組)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域づくり人財塾を受講したのは、社会人 2 年目。市役所職員として基本的な知識を養うとともに、担当業務の全体像を把握することができた頃、「住民自治組織の支援」とは、具体的にどのように活動していけばよいのかわからず、悩んでいる状況だった。</li> </ul>		
<b>人財塾の 受講目的</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域づくりの活動を主体となって進めていくためのヒントを得ること。</li> <li>全国の市町村職員と情報交換をすること。</li> </ul>		
<b>人財塾で 学んだこと 効果</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>様々な地域の状況や活動の取組方法を学び、地域課題に対して、自ら一步踏み出すための勇気を得ることができ、日々の業務に対する姿勢が変わった。</li> <li>館山市について客観視する機会となり、新たな発見とともに市に愛着が沸いた。</li> <li>活動に人を「巻き込む」のではなく、「惹き込む」ことが大切ということ。</li> </ul>		
<b>受講後の 取組</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>迷ったら「一步踏み出す」ということを意識して、全国地域づくり人財塾フォローアップ研修に参加。初めは知識や経験がないことに引け目を感じていたが、次第に学びから実践に移していきたいと思うようになった。</li> </ul>		
	<b>年月</b>	<b>事柄</b>	<b>概要</b>
	H26 年 4 月	全国地域づくり人財塾フォローアップ研修に参加	様々な市町村で行われる研修は、該当地域の課題を参加者全員で考える場であり、他市町村の課題を考えることは、同時に自分への気づきを得る貴重な機会。
	H28 年 4 月以降	伝統的工芸品産業の PR 活動に注力	房州うちわの存在を、多くの人に知ってもらうことを第一段階の目標として活動した。 ・現代における、うちわの活用方法の提案 ・新商品の開発、販路拡大 ・メディアへの露出度を高める
H30 年 4 月以降	伝統的工芸品産業の後継者の起業支援	・後継者支援のために、振興協議会を組織改編 ・地元業者との交流の場の創出 ・房州うちわ展の実施 ・他産業との連携促進、ビジネスチャンスの創出	

## ■報告者の取組紹介（展開の経緯・流れ）

地域づくり人財塾を受講した当時に在籍していた部署では、自らが主体となって事業を起こすことはできなかった。初めは、声をかけてもらうことで様々な活動に関わるようになった。言わば「惹き込まれた人」である。おこがましいようであるが、これから何か始めたいけれど、「どうしたらよいかわからない。勇気が出ない。」という若手職員に向けて、一例として参考になれば幸いである。

### STEP1 「支援する立場」ではなく、学びながらヒントを与えられる存在に

住民自治組織の支援を担当していた当時、20代前半の女性職員である私に、地域の悩みを相談してくれる町内会長は少なかった。年代のギャップと、社会経験の浅さがそうさせていたのは明確だったため、まずは、町内会長と会話をする機会がある度に各地区のことを教えてもらいながら話を聞くことを心掛けた。悩みを聞けるようになると、全国の事例を紹介したり、時にアイデアを出したりして接していくうちに、頼ってもらえるようになった。このように人間関係を築いていく感覚は、異動後の部署においても団体の事務局を務める上で活かすことができたと感じている。

### STEP2 伝統的工芸品「房州うちわ」のPR 平成28年4月～

伝統的工芸品産業の振興の担当となり、まずは、経済産業大臣指定伝統的工芸品である「房州うちわ」の存在を少しでも多くの方に知ってもらうことに注力した。

コツコツと様々なアイデアを職人に持ち掛けることで、仕事をする相手として見ていただけるようになってきたと思えるようになった。産業について学ばせていただきながら、自分自身も楽しんで取り組むことができた。「素人」の視点や感覚が、職人に気付きを与えることもあると実感した。



暑中見舞い葉書としての活用を提案



父の日や敬老の日にオリジナルうちわ



スポーツイベントの賞状として活用

### STEP3 伝統的工芸品「房州うちわ」の後継者育成・起業支援 平成30年4月～

平成25年度より単発の入門講座を開講していたが、講座終了後、職人は弟子を育てられるような状態ではなく、受講者との関係も途切れてしまう状態が続いていたので、人財として繋ぎとめ、次のステップに進めるよう支援するため、継続して製作技術を習得する機会の創出、起業支援を開始した。



後継者育成事業の様子



竹の選別・伐採の担い手も必要

## ■取組を進める過程で生じた課題

- ・生活必需品ではなくなった伝統的工芸品は現代では使用頻度が低く、産業の衰退が顕著であること。
- ・人口減少や高齢化に伴う後継者不足により、産業全体に諦めの雰囲気があった。

## ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

### ●ストーリー性を大切に

人口減少や過疎化は全国各地で懸念されており、それに伴い、寂しさや切なさを感じるような地域課題は多い。しかし、ただ単に「衰退しているから、維持しなくてはならない」ではなく、なぜ維持・発展したいのか、そうすることで何が変わるのかを意識することを忘れない。そして、取り巻く環境や歴史背景をしっかりと知り、自分が取り組む仕事新たな展開に少しでも繋がることを希望にしている。

### ●房州うちわ産業に関わる人口を増やす

職人への道は険しく、製作工程を習う入門講座を受けただけで離れていく人も多い。職人を目指したい人のみを支援するのではなく、職人を目指したい人、売り手として産業に関わりたい人、コラボ商品を作りたい人、情報発信をして応援してくれる人等、房州うちわに興味を持つ人を丁寧に繋いでいくイメージを持ち、どのような形であっても、産業に関わってもらえる人口を増やすことを目標とした。

### ●初めから全員賛成を目指さず、でも情報共有は確実に

団体で何かを始めるとき、最初から全員賛成を目指すと行き詰まるので、必ず全体に情報共有することを基本とし、個々にもアプローチするようにして、物事を進めた。

## ■成果

- ・知名度が上がり、地元の住民や市職員に関心を持ってもらうことができた。
- ・後継者を目指す人が増え、新たに商売として事業を開始する人も出てきた。
- ・後継者を目指す人を支援しながら振興協議会の活動に賛助会員として協力してもらうことで、一時会員3名にまで落ち込んだ振興協議会の活動に活気の兆しが見えてきた。
- ・上記の成果が、職人さんの向上心アップに繋がったことが何よりの成果。



3年間活動し、職人だけでなく、様々な面から協力者が増えた



館山ふるさと大使とのコラボうちわはお土産としてヒット！

## ■受講前の課題・人財塾で学びたいこと

- ・人口減少や高齢化を理由に、地区によっては住民自治組織の衰退に諦めムードが否めなかったため、地域づくりを行う上での地域へのアプローチ方法や、事業の作り方及び進め方を学びたかった。
- ・他市町村の事例を知り、情報交換を行い、地域づくりに活かしたいと思った。
- ・自分の地域づくりへの参画のモチベーションを高めるきっかけが欲しかった。

## ■受講後の取組、今後の方向性

### ●まずは、地域住民の活動の応援からスタート

高齢化が進むことで、地域のコミュニティ活動の担い手は、人材不足に陥っている。様々なことが衰退し、地域におけるネガティブな雰囲気が否めない。自分が主体となって事業を起こすことができなくても、地域住民の活動を応援させてもらうことが重要な地域づくりと考え、まずは「学びの機会」を創出。

自分が地域づくり人財塾で学び、活動に活かしているように、コミュニティ活動を行う方々にも先進事例を学んでもらう機会を提供した。それまで施設見学がメインで旅行化していた視察を、学びの場に変えることで、地域活動のリーダー同士の会話のが、アイデアを出し合う前向きな内容に変わった。



### ●様々な人を惹き込み、紡いだ「竹取物語」

「人の関心を引きつけるためには、感動や共感を与える要素が必要であり、ストーリー性を重視することが大切」と地域づくり人財塾やその後のフォローアップ研修で学んだ。もう一度地域に根差した産業にするために、多くの人に様々な側面から伝統的工芸品産業について考えてもらう機会を創出し意識づけをしたいという思いのもと、「里山と伝統的工芸品」をテーマにイベントを開催した。

里山が荒れて困っていたお寺で、後継者育成事業に使用する竹を切らせてもらったことが縁で、お寺を会場に房州うちわの展示会及び製作体験を開催。併せて獣害対策支援を行う地域おこし協力隊員が里山について学ぶ「里山教室」を実施した。観光客や地域住民に伝統的工芸品や里山について知識を深めてもらえた他、職人を目指す後継者の商いとしてのデビューの場にもなり、「これからの活動に自信がついた」という言葉が、何よりも嬉しかった。こうしたやりがい、次への活力となることを実感した。



展示会のチラシ



回廊に沿ってぐるっと展示



↑地域おこし協力隊による「里山教室」

里山の変化を学んだ後、里山の散策も行った。

### ●やりがいを感じられることが嬉しい、仲間が増えることが楽しい、「地域づくり」は成長できる場

地域づくり人財塾では、全国各地で活躍する方々と出会い、学び合い、「これから何をやろうか」と、わくわくしながら帰路についたことを今でも覚えている。しかしその感覚も、日々の業務に追われ、薄れていってしまうことも多々あるので、人財塾で出会い、そこから広がった繋がりに時々学ばせてもらうことで、刺激を得て、モチベーションを保っている。

行政職員には異動が付きものであり、数年ごとに部署が変われば、思い入れのある仕事も手放さなければならないが、地域づくりは「仕事で向き合う」だけの取組ではないし、形式など何もない。その時々で自分の置かれた立場からできること、その立場だからこそできることを見つけ、地域づくりの担い手の一人としてあり続けたい。

# 10. 鹿児島県志布志市 モノモノコウカンプロジェクト～物々交換イベント開催～

志布志市役所税務課・田中 慶悟 (H26 JAMP、H27 フィールドワーク型 受講)

<p><b>市町村 (地域) 概況</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口 31,160人 (令和元年9月30日現在)、面積 (290.28K m<sup>2</sup>)</li> <li>鹿児島県の東端に位置し、東部と東部は宮崎県に接する。志布志湾に接しており、志布志港は物流拠点港湾かつ九州唯一の国際バルク戦略港湾の志布志港があり、南九州地域の物流拠点。</li> <li>少子高齢化が進行する一方、就農移住者が増加している。</li> </ul>											
<p><b>活動主体と 活動地区</b></p>	<p>報告者の活動経歴</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>市役所で地方創生推進に関わっていた2016年より子育て支援活動として「モノモノコウカンプロジェクト」を立ち上げ、事務局長として運営に携わる。</li> <li>2012年～2016年 大隅半島の音楽フェス運営に従事。</li> </ul>										
<p>活動地区</p>	<p>鹿児島県志布志市を中心としたエリア (半径100km圏内)</p>											
<p><b>地域づくり の状況</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>志布志市では県外からの新規就農希望者を積極的に受け入れており、移住者が中心となって生産するピーマンは志布志市の特産品として都市圏に多く出荷されている。</li> <li>自治会活動が活発で、地域ぐるみの見守り活動や一斉清掃などが盛ん。</li> </ul>											
<p><b>地域課題 または 問題意識</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>県外からの移住者などから、子育てに孤独感を感じる、親同士の人間関係を築く場所がない等の意見が市に寄せられた。従来型のコミュニティに溶け込めていない方が若い世代を中心に多いとのアンケート結果も出された。</li> </ul>											
<p><b>これまでの 取組 (受講前の 取組)</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>過疎高齢化が進む鹿児島市東部 (大隅半島エリア) で若者が地域に愛着をもち、域外に情報発信できる機会が少ないとの問題認識があり、同じような志を持つ人達と地域づくり活動に取り組んできた。</li> </ul> <table border="1" data-bbox="343 1153 1444 1435"> <thead> <tr> <th>開始年月</th> <th>事柄</th> <th>概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H25.9月</td> <td>GOLD BEACH LOVERS LIVE</td> <td>鹿児島県では当時事例が少なかった野外音楽フェスを企画、過疎高齢化進行率が県内一の南大隅町の海岸で数百名の観客を集めた。H28まで毎年開催。</td> </tr> <tr> <td>H26.10月</td> <td>ストリートピアノ in 志布志</td> <td>通りにピアノを設置し、道行く人が立ち止まり、ふれあう場所を作りたいと有志で企画。プロのアーティストを招きイベントを開催。</td> </tr> </tbody> </table>			開始年月	事柄	概要	H25.9月	GOLD BEACH LOVERS LIVE	鹿児島県では当時事例が少なかった野外音楽フェスを企画、過疎高齢化進行率が県内一の南大隅町の海岸で数百名の観客を集めた。H28まで毎年開催。	H26.10月	ストリートピアノ in 志布志	通りにピアノを設置し、道行く人が立ち止まり、ふれあう場所を作りたいと有志で企画。プロのアーティストを招きイベントを開催。
開始年月	事柄	概要										
H25.9月	GOLD BEACH LOVERS LIVE	鹿児島県では当時事例が少なかった野外音楽フェスを企画、過疎高齢化進行率が県内一の南大隅町の海岸で数百名の観客を集めた。H28まで毎年開催。										
H26.10月	ストリートピアノ in 志布志	通りにピアノを設置し、道行く人が立ち止まり、ふれあう場所を作りたいと有志で企画。プロのアーティストを招きイベントを開催。										
<p><b>人財塾の 受講目的</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域活動の実践者の指導や姿勢を学ぶ</li> <li>熱い志を持った参加者との交流</li> </ul>											
<p><b>人財塾で 学んだこと 効果</b></p>	<p>NPO フェージョン長池の富永先生、元 NHK アナウンサーの森先生など、様々な分野で活躍される講師陣の講義と、それに感銘を受けた参加者との語らいは今も大切な財産となっている。参加者との交流は今も続いている。</p>											
<p><b>受講後の 取組</b></p>	<table border="1" data-bbox="343 1680 1444 2038"> <thead> <tr> <th>年月</th> <th>事柄</th> <th>概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H28.4月</td> <td>モノモノコウカンプロジェクトのスタート</td> <td>あなたの「もったいない」はだれかの「たからもの」をキャッチフレーズに、家庭で不要となった子供服、絵本、おもちゃの物々交換イベントを開催。お下がりシェアする場を通じ、子育て世代が集う場づくりを行っている。 人財塾参加者とSNS等で交流を続け、各地で活動を行う仲間には大きな刺激を受けたことで、実行への第一歩を踏み出した。</td> </tr> </tbody> </table>			年月	事柄	概要	H28.4月	モノモノコウカンプロジェクトのスタート	あなたの「もったいない」はだれかの「たからもの」をキャッチフレーズに、家庭で不要となった子供服、絵本、おもちゃの物々交換イベントを開催。お下がりシェアする場を通じ、子育て世代が集う場づくりを行っている。 人財塾参加者とSNS等で交流を続け、各地で活動を行う仲間には大きな刺激を受けたことで、実行への第一歩を踏み出した。			
年月	事柄	概要										
H28.4月	モノモノコウカンプロジェクトのスタート	あなたの「もったいない」はだれかの「たからもの」をキャッチフレーズに、家庭で不要となった子供服、絵本、おもちゃの物々交換イベントを開催。お下がりシェアする場を通じ、子育て世代が集う場づくりを行っている。 人財塾参加者とSNS等で交流を続け、各地で活動を行う仲間には大きな刺激を受けたことで、実行への第一歩を踏み出した。										

■報告者の取組紹介（展開の経緯・流れ）

●STEP1 GOLD BEACH LOVERS LIVE H25年9月（第1回目）

過疎高齢化が進む鹿児島市東部（大隅半島エリア）で若者が地域に愛着をもち、域外に情報発信できる機会が少ないとの問題認識があり、同じような志を持つ人達と地域づくり活動に取り組んできた。特に、恵まれた自然景観と音楽の融合により、域外からの観客（訪問者）を呼び込むコンセプトとして、野外音楽フェスを開催した。



沈みゆく夕陽と会場



地元焼酎蔵とのタイアップ（オリジナルラベル）

●STEP2 GOLD BEACH LOVERS LIVE H26年9月（第2回目）

野外フェス開催への理解が少しずつ深まり、地域の協力者も増えてきた。あいにくの雨予報で屋内開催となったが、テント持ち込みの宿泊型イベントとしたことで、フェス翌日に観客が近隣の観光地に向かうなどの例が見られた。



照明や装飾で幻想的な雰囲気に



地元情報誌に特集記事掲載

●STEP3 ストリートピアノ in 志布志 H26年10月

通りにピアノを置いてみると、街にメロディーが流れる。音楽と街づくりには親和性があることを実証したいとの思惑もあった。

ピアノ設置のお披露目式には、イラストレーターのエドツワキさんと音楽家のコトリングゴさんを招き、演奏しながらライブペインティングする企画を実施。



イベントのフライヤー



ライブペインティングの様子

## ■取組を進める過程で生じた課題

- ・資金調達に苦勞（イベント開催には多額の費用を要するが、寄付金集めが難航した）
- ・活動の波及効果をどのように測定するか難しい

## ■ 効果を育むため、課題解決のために留意したこと

### ● スタートアップ資金及びランニングコストの低減（身銭を切らずに持続的活動を）

0円スタートのプロジェクトスキーム→購入しない、レンタルは無償のみ、廃棄物の利活用、これらを徹底的に追求。イベント運営で陥りやすいと言われる「身銭で赤字を埋める」体質にならないよう考慮。物々交換イベントであれば収益（営利）目的でない上、交換アイテムを無償で入手しやすいことに着目した。

#### モノモノコウカンの仕組み

##### ・ルール

- 家庭にある「おもちゃ・絵本・子ども服」
- (1) 2点持参で1点持ち帰り(持参点数の制限なし)
- (2) チャリティ販売(売上全額を寄付)

##### ・会場に残ったモノについて

- (1) 福祉施設に物品寄付
- (2) 次回の「タマ」として保管

##### ・行政の間与

- 名義後援(子ども担当課&教委)
- 学校・園へのPRの協力体制

##### ・地域の間与

- (1) 衣料品店さま…洋服ハンガー提供(廃棄品)
- (2) スーパーマーケットさま…イベントスペース提供
- (3) 社会福祉協議会さま…ボランティアスタッフ仲介



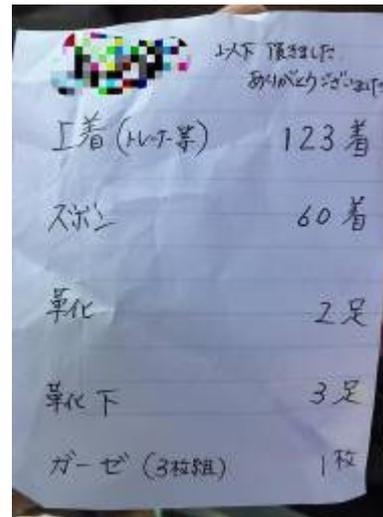
地域の「ヒト・モノ・バシ」を組み合わせ、低負荷のリレーションでつなぐことを意識  
(=仲介・交通整理) 4

### ● 活動成果「見える化」へのこだわり

イベントを開催することが最終目的にならないよう、ボランティア活動の成果を定量的アウトプットするよう意識。チャリティ販売品の収益金や交換イベントで余剰となった在庫（子供服、おもちゃ等）を鹿児島県内の児童福祉施設や子育て支援団体へ寄付を続けている。ただし、社会貢献が優先され過ぎる事で、イベント趣旨が不必要に固くならないよう、ほどよいバランスも重要と認識している。



県内児童施設への物品寄付（子供服、おもちゃ）



寄贈内容はSNS等で公開する

## ■成果

あなたの「もったいない」はだれかの「たからもの」をキャッチフレーズに、家庭で不要となった子供服、絵本、おもちゃの物々交換イベントを開催。これまで30回以上開催し、のべ5,000点以上が物々交換された。また、交換したいモノが無くてもチャリティとして購入できるようにし、売上を鹿児島県

内外の児童福祉施設や子育て支援団体、まちづくり団体に寄付し、地域社会への還元を行っている。

参加者の中には毎回来てくださる方もおり、参加者同士、スタッフと参加者の間で交流も生まれるなど、子育てに関する新たな輪（サークル）としての機能も期待している。



**■受講前の課題・人財塾で学びたいこと**

地域活動に関して少なからず興味があったが、熱意があるばかりで、何をどのようにすればよいのかわからないジレンマを抱えていた。すでに地域活動の実践者の指導や姿勢を学ぶことが、ジレンマの緩和になるのではと思い、人財塾の門を叩いた。そこに集う熱い志を持った参加者との交流は今も続いており、上記の活動について叱咤激励をいただくなど、活動の原動力となっている。

**■受講後の取組、今後の方向性**

あなたの「もったいない」はだれかの「たからもの」をキャッチフレーズに、家庭で不要となった子供服、絵本、おもちゃの物々交換イベントを開催。お下がりやをシェアする場を通じ、子育て世代が集う場づくりを行っている。活動は4年目を迎え、積み重ねたノウハウを元に安定活動ができるようになった。継続的に活動ができた理由として、講師や人財塾参加者とのSNS等での交流を通じ、常に励ましや刺激を受け続けたことが何よりも大きい。今後は、他の地域活動との連携による相乗効果創出や海外への衣料支援を定期実施するなど、新たな展開を進めることで皆さんに刺激の御返しをしたい。



お隣宮崎県串間市と志布志市の連携イベントに出展

ウズベキスタンへ子供服を贈る

# 1 1. 栃木県栃木市 人財を活かしたまちづくり～つながりから生まれる住みよさ

栃木市地域づくり推進課 鈴木 晃子 (H27 JAMP 受講)

<b>市町村 (地域) 概況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・160,108人(令和元年11月30日現在)、面積(331.5K㎡)。</li> <li>・県南部に位置し、埼玉県、群馬県と隣接している。まちなかには蔵や歴史ある建造物が残存し、周辺部は山々に囲まれ、歴史と豊かな自然が調和するまち。</li> <li>・県内他市に比較して高校が多いが、卒業後は転出する割合が高い。</li> </ul>		 <p>栃木市の位置</p>
<b>活動主体と活動地区</b>	報告者の活動経歴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・H23年栃木市役所入庁。総合政策部地域づくり推進課(H27.4～)において、市独自の地域自治制度「地域会議」及び、自治会等の業務を担当。庁内で自主研究グループに所属(H28.5～)。</li> <li>・業務外にて地域のイベント運営に携わる。</li> </ul>	
<b>地域づくりの状況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住民代表組織として市が市内8地域にそれぞれ設置する附属機関「地域会議」が、市長への提案や予算提案を実施。</li> <li>・住民が自発的に設立する組織として各地域に「まちづくり実働組織」を設立し、イベント等を開催。</li> </ul>		
<b>地域課題または問題意識</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・合併により市域が広範囲になったため、それぞれの地域の状況にあった地域自治が必要</li> <li>・世代間でまちづくりに対する意識や関わる方法が違い、それぞれ個別に活動が続けていることが勿体無い。</li> </ul>		
<b>これまでの取組 (受講前の取組)</b>	職場や地域における人のつながりづくりと、そのつながりを、地域をより良くするための仕組みに活かす。		
	<b>開始年月</b>	<b>事柄</b>	<b>概要</b>
	H23.5月	庁舎周辺の清掃活動	月に一度、庁舎周辺の清掃活動が企画され、職員は任意参加。庁内の他部署の方々とのつながりができる。
	H25.5月	映画祭でのボランティア	まちなかの施設(蔵や学校)を利用し、映画を上映するイベントにボランティアで参加。市内で活動する様々な団体、人と知り合う。
H27.4月	市独自の地域自治制度の担当	地域づくり推進課に異動し、地域会議の運営に携わる。	
<b>人財塾の受講目的</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全国の地域づくりの様々な事例を知り、知見を広める。</li> <li>・教育と地域づくりをつなげるヒントを得たい。</li> </ul>		
<b>人財塾で学んだこと 効果</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人とのつながりが財産であること。</li> <li>・プラットフォームという概念。</li> <li>・公務員が地域に出て活動することについて(翻訳機としての役割)。</li> </ul>		
<b>受講後の取組</b>	公務員である自分を活かし、人同士のつながりを広げると共に、人財塾で学んだ「場づくり」を実践する。		
	<b>年月</b>	<b>事柄</b>	<b>概要</b>
H28.10月	地域自治研修会等	地域会議委員同士、また市民同士の対話の場づくりを試みる。	

## ■報告者の取組紹介（展開の経緯・流れ）

受動的なかかわりから、能動的な取組へ。

### ○STEP1 庁内におけるつながり醸成（H23.5月）

庁内で呼びかけのあった庁舎周辺の清掃活動に参加した。月に一度、朝の15分程度の時間だったが、普段の業務では関わりの少ない他部署の方と話すきっかけとなった。清掃しながらコミュニケーションを取ることで、庁内の業務に関する理解が深まり、入庁間もない新人である自分にとって、とても良い機会となった。その後の業務を行う上でも、庁内における人とのつながりは重要であると感じている。

まちづくりというどの部署が欠けてもできない取り組みは、市役所全体できちんとつながっていることが前提となる。緩やかなつながりを作るための活動や仕組みは必要であると実感した。

### ○STEP2 人財の発掘（H25.5月）

栃木市では毎年5月に地元の有志によって『栃木・蔵の街かど映画祭』が開催されている。これは市内の歴史ある建物や店舗等において映画を上映するイベントであり、例年10箇所ほどの会場で多様なジャンルの映画を上映し、来場者を楽しませている。



映画祭には地元の商工会や専門学校、子育てサークルなど、様々な団体が関わっている。映画祭でボランティアを経験したことにより、市内に様々な団体、活動があることを知った。庁外に出て地域のイベントに関わることで、それまでになかったつながりのネットワークが構築された。まちづくりの主役は住民である。住民の方々がどんな思いをもち、どんな活動をしているのか知らなければ、主役不在のまちづくりになってしまう。地域で活躍している人財を発掘し、まちづくりの担い手となる方々とのネットワークができたのが本ボランティアの一番の成果だった。

映画祭の会場ととち介（栃木市マスコットキャラクター）

### ○STEP3 人財活用のお機会スタート（H27.4月）

栃木市独自の地域自治の仕組みとして「地域会議」と「まちづくり実働組織」がある。二つは両輪となり、より住み良い街にするために、住民主体で進んでいく。検討、実働の場を整えることが行政としての役割であり、地域づくり推進課として、まちづくりの主体である住民（人財）を活かすことが業務となった。

「地域会議」は月に一回程度、市役所内で開催され、地域課題解決のための予算提案等の検討をしている。



地域会議の様子

## ■取組を進める過程で生じた課題

- ・ 地域自治の仕組みが周知されていない
- ・ 地域課題の検討の場をどのようにつくるか

## ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

- ・ 仕組みを丁寧に説明する、またその機会を増やす

対外的に周知できることについては様々な方法（広報紙、SNS 等）を用いて周知し、地域会議委員自身にも発信をしていただくよう呼びかけた。



「地域会議だより」の発行

- ・ ファシリテーションを学び、地域会議委員同士の対話を促す

検討の場づくりをするに当たって、意見を出しやすい雰囲気や仕組みを取り入れた。



グループに分かれての検討の場面

## ■成果

制度開始から年数を経たこともあり、地域自治制度の取り組みは徐々に市内に知られつつある。地域予算で検討された成果物（例、公園遊具等）が増えていくことによって、委員自身も地域会議についての情報を発信しやすくなった。

検討の場については、少人数のグループで話す、一度付箋に書いてみる等のフラットな場づくりを意識することによって、委員の方の意見は出やすくなった。

## ■受講前の課題・人財塾で学びたいこと

- ・「地域の意見」はどのように形成されるのか
- ・公務員として、また一市民として地域とどう関わっていくか

## ■受講後の取組、今後の方向性

### ●対話による地域づくり

人財塾を受講し、改めて人と人とのつながりによって地域が形成されていることを学んだ。また、プラットフォームという押し付けではない「場づくり」の方法についても知見を得られた。テキストとして配布された『地域づくり人育成ハンドブック』には具体的に地域での活動の方法が記載されており、場づくりを実践していく上でとても役に立っている。

地域課題について検討する地域会議だが、委員同士の世代間ギャップもあり、検討の場が活性化しないという課題があった。そこで、地域会議委員の研修の場において、「対話の場づくり」を重視した研修を行うこととした。人財塾やその後の学習の機会からも、つながりから生まれる自然な対話から地域づくりは進んでいくと実感した。お互いの背景を知り、議論ではなく対話することにより、自分が住んでいる地域のことをより深く理解し、課題をなくしていくために自分たちができることをより実践的に検討できるのではないだろうか。委員ひいては市民が本当に課題だと思っていること、また課題の本質を検討できるよう「対話」の文化を委員に広げている。



地域会議委員の研修会のようす

### ●今後の方向性

今後は「対話による地域づくり」を、地域会議委員以外の市民にも広げていきたい。世代や職業など様々な背景を持つ人たちが集まって何かを生み出せる場（プラットフォーム）づくりが、住みよいまちにとって重要だと考えている。より自由な発想ができ、実現に向けて動き出せる場が創出できると良い。

また、場をつくるだけでなく、場の人をつなげることもしていきたい。自分自身も一市民として市民活動を続けていくが、その過程で、プラットフォームや行政の支援策と、それを求めている人たちの間を翻訳機としてつなげていく役割も担っていききたいと思う。

## 12. 兵庫県朝来市 楽しく続ける地域づくり～ 踏み出そう、はじめの一步

朝来市市長公室総合政策課 高本 恵三 (H24 JIAM 受講)

<b>市町村 (地域) 概況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口：30,253人 (R元.11末現在)、面積：403.06K㎡。</li> <li>兵庫県のほぼ中央部に位置し、古くから交通の要衝の地として発展。</li> <li>「天空の城 竹田城跡」「史跡 生野銀山」など、多くの歴史遺産がある。</li> </ul>											
<b>活動主体と 活動地区</b>	報告者の活動経歴	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成18年4月入庁の際、都市部から出身地である朝来市へ帰省。地区の青年団や消防団に参加し活動</li> <li>平成25年4月から地域の若者世代を中心とした「竹田とらふす会」に参加し、郷土教育などに従事。</li> </ul>										
<b>地域づくり の状況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>市内全ての地域において、概ね小学校区を単位として「地域自治協議会」を設置し、地域の創意工夫による、地域特性を活かした地域づくりに取り組んでいる。</li> <li>自分らしく生き行きと活動する「ひと」を育むため、幼児から大人まで各ライフステージに合わせた人財育成事業を展開している。</li> </ul>											
<b>地域課題 または 問題意識</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の風土や人口構造の違いなどにより、地域への関心度に温度差がある。</li> <li>特に、地域活動に参加しない無関心層へのアプローチが課題である。</li> <li>誰でも地域活動に参加しよう（してもいいのだ）という機運が高くない地域もある。</li> </ul>											
<b>これまでの 取組 (受講前の 取組)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>受講前は、地域住民として自治会の青年団や消防団活動に従事。</li> <li>当たり前のこととして、深く考えずに参加していた。</li> </ul> <table border="1" data-bbox="343 1055 1449 1458"> <thead> <tr> <th>開始年月</th> <th>事柄</th> <th>概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H18.4月</td> <td>地区の青年団 (友和会・自衛消防団)</td> <td>地区に居住する20代前半から40代半ばで組織し、地区内の防火活動・夏の盆踊りや大晦日の初詣での炊き出しなど、地区住民に暮らしに近い活動を行っている。</td> </tr> <tr> <td>H21.4月</td> <td>朝来市消防団 (和田山支団第10分団)</td> <td>居住地区を管轄する消防団員として、火災時の消火活動、災害時の水防活動、日頃からの防火・啓発活動に従事している。また、消火活動に対する技術及び意識向上、さらに団員間の交流に資する「ポンプ操法大会」に出場している。</td> </tr> </tbody> </table>			開始年月	事柄	概要	H18.4月	地区の青年団 (友和会・自衛消防団)	地区に居住する20代前半から40代半ばで組織し、地区内の防火活動・夏の盆踊りや大晦日の初詣での炊き出しなど、地区住民に暮らしに近い活動を行っている。	H21.4月	朝来市消防団 (和田山支団第10分団)	居住地区を管轄する消防団員として、火災時の消火活動、災害時の水防活動、日頃からの防火・啓発活動に従事している。また、消火活動に対する技術及び意識向上、さらに団員間の交流に資する「ポンプ操法大会」に出場している。
開始年月	事柄	概要										
H18.4月	地区の青年団 (友和会・自衛消防団)	地区に居住する20代前半から40代半ばで組織し、地区内の防火活動・夏の盆踊りや大晦日の初詣での炊き出しなど、地区住民に暮らしに近い活動を行っている。										
H21.4月	朝来市消防団 (和田山支団第10分団)	居住地区を管轄する消防団員として、火災時の消火活動、災害時の水防活動、日頃からの防火・啓発活動に従事している。また、消火活動に対する技術及び意識向上、さらに団員間の交流に資する「ポンプ操法大会」に出場している。										
<b>人財塾の 受講目的</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域で自らが主体的に活動できる手法を学ぶ。</li> <li>全国の地域活動実践者との交流。</li> </ul>											
<b>人財塾で 学んだこと 効果</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>どんなことでも、小さなことでもいいから、「まずはやってみる・チャレンジしてみる」ことが大切。</li> <li>自らが主体的な地域活動を行う一步を踏み出した。</li> <li>一人でやるな、みんなでやれ (1能力×100人 &gt; 100能力×1人)。</li> <li>住民みんなの「居場所と出番」をつくる。</li> </ul>											

<b>受講後の 取組</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受講で学んだ「まずはやってみる・チャレンジしてみる」を実践するため、地域へ飛び出す機会に立候補（H24.4月：地域協働推進プロジェクト）。</li> <li>・自らが主体的な地域活動を行うべく、また「一人でやるな、みんなでやれ」を実践するため、仲間と一緒に活動を開始（H25.4月：竹田とらふす会）。</li> </ul>		
	年月	事柄	概要
	H24.4月	<b>地域協働推進プロジェクト</b>	<p>地域自治協議会ごとに市職員を3名配置し、地域の主体的な活動をサポートするもの。まずは地域を知り、地域に自分を知ってもらうため、プロジェクトメンバーとなった。</p> <p>地域の区長会・財産区・ソフトボール大会の運営などを通じて、様々なヒト・モノ・コトと出会い、関わる事ができた。</p>
H25.4月	<b>竹田とらふす会</b>	<p>地域内外の20代から40代の若者世代を中心に、自分たちが楽しみながら、まちを盛り上げようと活動を開始した。令和元年11月末現在、会社経営・会社勤務・自営業・公務員など15名の多種多様なメンバーが、自分たちの得意なこと、好きなことの延長線上にまちと関わりながら活動を展開している。</p>	

### ■報告者の取組紹介（展開の経緯・流れ）

#### ●STEP1 地区の青年団（H18.4月）

平成18年4月市役所へ入庁する際、大学進学先である都市部から出身地である朝来市へ帰省し、同時に青年団（友和会・自衛消防団）へ参加した。

主な活動は、地区内の消火栓点検など防火活動、地区の盆踊り大会での唄と太鼓や出店、地区内の氏神社の初詣参拝者への炊き出しなどを、地区住民に暮らしに近い活動を行っている。



盆踊り大会の様子  
(遠くの山頂が竹田城跡)

#### ●STEP2 朝来市消防団（H21.4月）

平成21年4月、長年活動されてきた地区の先輩と交代する形で入団した。

火災時には消防本部、地域住民と協力して消火活動、大雨や台風など災害時には水防活動、日頃からの地域内の防火・啓発活動に従事している。

また、消火活動に対する技術及び意識向上、さらに団員間の交流に資する「ポンプ操法大会」に出場している。

（令和元年11月末現在、朝来市大会6連覇中）



ポンプ操法大会の様子

●STEP3 地域協働推進プロジェクト（H24.4月）

地域自治協議会ごとに、主にその地域出身の市職員を3名配置し、地域の主体的な活動をサポートするプロジェクト。

まずは自分が暮らす地域を知り、地域に自分を知ってもらおうと、プロジェクトメンバーとなった。

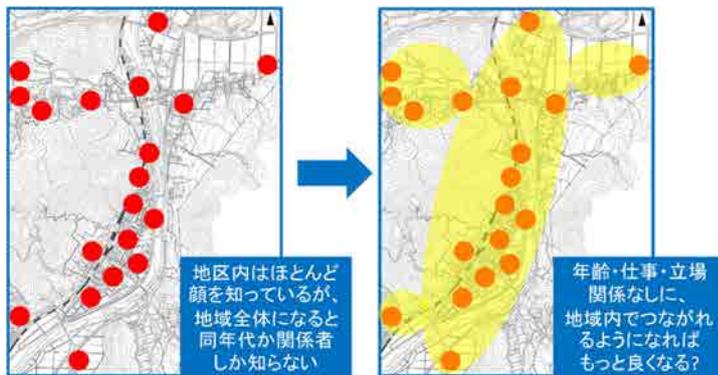
地域の区長会・財産区・ソフトボール大会の運営などを通じて、区長さん・体育委員さんなど様々なヒト、地域にある様々なモノ、地域の歴史・文化・風習など様々なコトと出会い、知り、関わりながら活動を行ってきた。



ソフトボール大会の様子

■取組を進める過程で生じた課題

- ・義務感ややらされ感で行う地域活動が多い
- ・居住する地区（自治会）内はほとんど顔を知っているが、地域（小学校区）全体になると同年代か関係者しか知らない



地区内はほとんど顔を知っているが、地域全体になると同年代か関係者しか知らない

年齢・仕事・立場関係なしに、地域内でつながれるようになればもっと良くなる？

地域全体の地図  
地域（小学校区）内に●印の19地区（自治会）ある

■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

- 誰もが win-win となる地域活動

①地域の課題を把握し、②自分たちができる事、③自分たちがしたい事を話し合い、左記①～③が重なり合う活動を行うよう留意した。

- 一人でやるな、みんなでやる地域活動

年齢・仕事・立場関係なしに多様な人がつながり活動できる場（竹田とらふす会）に参加し、それぞれが「居場所と出番」を持ちながら活動できるよう留意した。



竹田とらふす会のロゴマーク

仲間と一緒に「地域課題・できる事・したい事」  
を考えるワークショップ

## ■成果

ワークショップにて、地域の課題、自分たちができる事、したい事を考えた上で活動することにより、誰もが居場所や出番を持ちながら無理なく活動を継続することができ、また、地域にも喜んでもらえる（と思われる?!）活動を行っている。

一人ではなく仲間みんなで活動することにより、多種多様な人材の創意工夫により、幅広い活動が行えている。



地域イベントに出店



地域の子どもたちと楽しくまちと触れ合うまなび隊活動



## ■受講前の課題・人財塾で学びたいこと

- ・義務感ややらされ感ではなく、主体的に継続して活動が行える仕組みづくり
- ・自分たちが生き生きと活動し、その延長線上にまちとつながれる手法

## ■受講後の取組、今後の方向性

### ●竹田とらふす会での活動スタート

受講で学んだ「まずはやってみる・チャレンジしてみる」、「一人でやるな、みんなでやれ」を実践すべく、仲間とともに「竹田とらふす会」の活動をスタートさせた。

さらに、受講で気づきを得た「みんなの居場所や出番をつくる」の必要性を考慮し、メンバー自身ができる事・したい事の延長線上に、まちとつながる活動を展開している。

そうすることで、メンバーそれぞれの得意な事・好きな事を活かすことができ、主体的かつ継続的な活動となっている。

また、その延長線上に地域課題の解決につながる事を念頭に置いた活動を実践しているため、地域との協働・共感が生まれ、地域との信頼関係を築きながら、活動を行っている。

地域とのつながり方は自由で、「何をして」つながるかよりも「何を想って」つながるかが大切だと考える。



竹田とらふす会メンバーと  
地域の子どもたちのまなび隊活動での  
竹田城跡早朝登山



「一歩を踏み出す」と何かがはじまる

### 13. 徳島県佐那河内村 千年つづくむらさなごうち～小さな自治を継承していくために

#### 佐那河内村 安富圭司 (H24 JIAM、H26 ケーススタディ型)

<b>市町村 (地域) 概況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口 2,297 人 (R1. 11. 30 現在)、面積 (42. 28K m<sup>2</sup>)</li> <li>徳島県中東部に位置する中山間地域。徳島市に隣接している徳島県唯一の村。移住支援等は充実しているが人口は減少している。</li> </ul>		
<b>活動主体と 活動地区</b>	報告者の 活動経歴	<ul style="list-style-type: none"> <li>職員として H15 年度から 7 年間ゴミ分別活動を推進。地方創生担当では移住支援体制の確立及び地域団体設立支援、企業誘致等を行ってきた。</li> </ul>	
<b>地域づくり の状況</b>	活動 地区		村内全域 (全国的にも珍しい地域自治組織 (講中・常会・名中) が存在する。ブータン王国などがその仕組みを学びに来ている。)
<b>地域課題 または 問題意識</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>村は地方創生を推進するために (一財) さなごうちを設立。「食」による起業及び移住支援のために、食業工房さなごうちを運営している。また、ふるさと住民票の発行や定住促進のための宅地造成を進めている。</li> <li>人口流出等により、「区域の権利」と地域を担う「人財」が流出している。</li> <li>人口減少と高齢化により、地域を継承する自信や文化が失われつつある。</li> <li>地域の遊休資産 (農地、空き家を含む) の確保と活用方法が課題である。</li> </ul>		
<b>これまでの 取組 (受講前の 取組)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>想いを持って地域に入り、行政と地域・住民等が地域状況を共有し、内発的動機付けによって課題を楽しみ行動に移せる環境づくりを目指す。</li> </ul>		
	<b>開始年月</b>	<b>事柄</b>	<b>概要</b>
	H15. 4 月	<b>住民主導のゴミ分別活動の推進</b>	23 か所ある集積所で地域毎のルールを決定。住民の発案から 9 分別から 33 分別に移行。結果、排出量減や処理費の約 60% 縮減に成功し、その経費は子どもの医療費無料化に充てられている。
	H22. 4 月	<b>多様な地域活動団体の発足支援</b>	複数の地域と世代が違う地域活動団体の立ち上げを支援し、各種体験イベントの実施や移住支援及び空き家活用等を行う団体を設立。
H26. 8 月	<b>徳島県建築士会及び大阪工業大学建築学科との連携</b>	本村にある空き家を活用するために専門家らと連携し、所有者と移住希望者とのマッチングから耐震診断・改修までの仕組みづくりを行った。	
<b>人財塾の 受講目的</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>行政に頼らない地域づくりの実践の現状を知る。</li> <li>内発的動機付けによる活動に必要な環境と要素を学ぶ。</li> </ul>		
<b>人財塾で 学んだこと 効果</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>豊重さんの想いが人を動かす原動力と吸引力になっていることが分かった。</li> <li>個人の小さな想いを言語化し行動に移し夢中で頑張ると、そのときは想像もしていない結果と成果になっている。</li> </ul>		
<b>受講後の 取組</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域活動及び移住促進等を実践するには、各々が小さな決断できる環境が重要である。移住支援体制を整備し地域・所有者・移住希望者それぞれが想いを持って活動している。</li> </ul>		
	<b>年月</b>	<b>事柄</b>	<b>概要</b>
	H25. 4 月	<b>地域づくり支援及び移住支援体制の構築</b>	地域団体等と共に、地域を主語にした移住支援体制等を構築。地域活動や移住等に必要な情報や仕組みづくりを各種団体と連携して行っている。各々の活動により、受け継がれる地域自治を継承する気持ちが醸成されつつある。

## ■報告者の取組紹介（展開の経緯・流れ）

### ●STEP1：住民主導のゴミ分別活動の推進

23 か所あるゴミ集積所全てでワークショップを重ねて、住民主導で地域独自のルールを作った。

ゴミ分別は、地域や家族・個人の責任の積み重ねの結果であり、その課題解決にはリーダーをつくらず、地域住民が納得のいく合意形成を図れるように工夫し、行政は地域が決めたルールに合わせて業務体制を変更した。それにより処理経費の縮減に成功し、当時の首長はその経費を子供たちの医療費無料化の財源に充当した。

地域（常会）毎に異なる合意形成の図り方と必要な「間」、そして地域にも受け継がれる「イエ」の繋がりは、幾重もの厚みのある地域自治の奥深さを知ることになり、地域を継承するには、それを大切に人財（移住者等）の確保と課題を共有できる地域自治組織の継続が必要だと感じた。

### ●STEP2：多様な地域活動団体の発足支援

村内の60～70代の住民とともに交流広場や里山整備などを行う「根郷いきいき塾」や循環型農業を实践する「オープンファーム菜々」を発足し、村や活動に関心のある人たちと一緒に活動や体験イベントを開催している。

村に在住する30～40代の住民とともに地域づくりや地域の遊休資源（空き家等）をストックし活用できるように「ねごう再生家」や「地域活性化プロジェクト宮前笑会」の発足を支援した。



### ●STEP3：徳島県建築士会及び大阪工業大学建築学科との連携

初めて借りることができた築100年以上の古民家を活用して、構造調査や改修の実習等を行った。

その調査等をもとに、空き家を利活用できるように、徳島県建築士会と大阪工業大学建築学科と連携し、空き家活用に関する計画を策定し、耐震診断から改修までの仕組みづくりと物件所有者と移住希望者とのマッチンをする仕組みづくりと補助制度を創設した。



## ■取組を進める過程で生じた課題

- ・地域課題を自分事として捉えてもらうことの難しさ
- ・移住者や空き家を確保するための、地域の協力と連携を生む仕組みづくり
- ・この場所で住んでいることの肯定感をどのように醸成するのか。
- ・地域（常会）を繋ぐための人財を確保するために、地域の見えない価値を伝える環境づくり
- ・村に必要な民間事業者（建築士・不動産事業者等）がない。

## ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

### ●聴くことから始める、決断ができる環境づくり

地域住民が村を想う小さな取り組みに共感し、地域と行政がともに行動すると、取組から活動、活動から事業、事業から政策、政策から継続、継続から習慣、そして、文化（共有される価値観）へと変わっていくという経験を大切にしたい。

それをもとに地域に入り、行政側の情報を伝えるだけでなく、地域だけでしか知り得ない状況や情報を聴くことから始めた。

事業を進めるといことは、それぞれの主体が行う小さな決断と行動を積み重ねることであり、そのうえで大切にしていたことは、「所有者」「地域」「移住希望者」など各々が、自分事として決断ができる環境づくりを心がけた。

### ●地域に合わせた提案と世代を分けたアプローチ。

事例となる地域は、世代とテーマが違う2つの地域団体を立ち上げた。

エリア型コミュニティの中に、世代の違う2つの団体が地域に存在することで、世代間での役割が明確になり、移住希望者は地域住民と関わる機会が多くなるように心がけた。

### ●村の状況と移住希望者のニーズに合わせた移住支援体制の構築

東南海トラフ地震が懸念されているため、改修等補助制度は古民家であっても耐震を条件にしているが、その仕組みづくりには多くの建築士や大学教員等の専門家の意見を反映させた。

また、賃貸借契約等は全ての案件で双方の意見を確認しながら契約書を作成するなど、専門家が関わりトラブルに備えるように心がけた。



## ■成果

### ●みんなの成果「7年ぶりに人口社会増」

地域団体や地域（常会）と行政が密接に連携して情報共有を行い、移住希望者及び物件所有者に対して丁寧に対応していくことで、移住支援及び物件等に関する体制整備を行った結果、社会増という成果を得た。

### ●地域に必要な人財が移住。

地域団体の成果として、1級建築士や不動産会社経営者、デジタルクリエイター、映像作家、大学教員など今まで村にはいなかった多くの人財が移住し、地域自治の担い手としても活躍している。



## ■受講前の課題・人財塾で学びたいこと

- ・行政に頼らない地域づくりの実践の現状を知る。
- ・内発的動機付けによる活動に必要な環境と要素を学ぶ。

## ■受講後の取組、今後の方向性

### ●情報と信頼を蓄積するための外郭団体を設立

一般財団法人さなごうちの設立を担当し、空き店舗を10年間無償で借受け改修し、サテライトスペース、カフェの運営、ふるさと納税事業等を行っている。

また、村内の遊休資産（空き家）の譲渡を受けて、お試し居住体験施設の運営の他、転貸事業も展開している。

### ●さなごちそう便りの発刊

地域への関心と魅力を再認識してもらうために、地域の生業をテーマに村民とふるさと住民向けに情報発信を行っている。

現在までに、16刊を発行している。



### ●ふるさと住民票の発行

域外から村を応援する人たちに見える化し、村民、地域、行政との関係性を深めるためにもう一つの住民票を発行している。現在250名以上が登録している。



### ●移住アートプロジェクト「フルムーン・ダイニング」

人の気配がなくなった空き家に人の流れを創るために、現代美術家の北澤潤氏を招聘して空き家を利用したアートプロジェクトを実施している。



### ●地域に住む者として地域自治を継承するために！

「住民が自治を諦めなければ地域は継承される。」と教えられた。

公務員としての役割だけでなく、住民として地域自治に貢献できるように、地域の仲間と共に活動し、地域で受け継がれる小さな自治に目を向けて、それを継承していけるように行動していきたい。

そのうえで、地域に必要な機能を失わないために、地域活動団体「ねごう再生家」では、自分たちの出資の他に、空き家を転貸して資金を蓄え、無店舗地域にならないように活用することに決めている。

人口が減少し、地域の存続が危ぶまれるが、日本の地域自治の多様性を残すためにも頑張り続けた

い。

## 14. 宮崎県宮崎市 宮崎ベースキャンプ～「ゴミ拾い」からはじまる地域イノベーション

宮崎市商業労政課まちなか活性化室 池袋 耕人(H30 JIAM 受講)

<p>市町村 (地域) 概況</p>	<p>・人口 398,297人(2019年12月1日現在現住人口)、面積 643.67Km<sup>2</sup></p>		
<p>活動主体と 活動地区</p>	<p>報告者の 活動経歴</p>	<p>・2003年入庁後、知人等のつながりから、年間4～5回程度イベント等のボランティア活動に従事。 ・2015年から宮崎ベースキャンプの活動を開始。 ・2016年から中心市街地活性化を所管する部署に配属。</p>	
<p>地域づくり の状況</p>	<p>・宮崎市では平成10年以降中心市街地活性化基本計画を策定し、関係機関と連携しながら中心市街地活性化の取組を進めている。また、商業団体や大型店等で構成するまちづくり団体であるDoまんなかモール委員会でも活性化に向けたまちづくりの取組を進めており、民間団体等もそれぞれ中心市街地活性化に向けた取組を実施している。</p>		
<p>地域課題 または 問題意識</p>	<p>・各団体での取組を進めているところではあるが、自主的なまちづくりの取組が少ないことや、特に若者を巻き込んだ取組や新しい人が関わる仕組みづくりが求められる。</p>		
<p>これまでの 取組 (受講前の取組)</p>	<p>・まちづくりに多様な人が関われる仕組み、何か行動したい人を支援する仕組みをつくることを目的に以下の取組を実施している。</p>		
	<p>開始年月</p>	<p>事柄</p>	<p>概要</p>
	<p>2015.4月</p>	<p>まちなか清掃</p>	<p>毎月2回、自由参加のゴミ拾い活動を実施し、ゴミ拾いの後には、情報共有やアイデアを生み出す場として雑談の時間を持っている。</p>
	<p>2016.3月</p>	<p>夢プレゼンテーション大会</p>	<p>年1回、挑戦を声に出し、支援者を繋げる場としてTEDx形式のプレゼン大会を運営している。</p>
<p>2015.9月</p>	<p>各種ワークショップ等の開催・開催支援</p>	<p>働くことを考えるジョブカフェや、食・DIY・テーマに沿ったワークショップの自主開催や、開催したい個人・団体の開催を支援している。</p>	
<p>人財塾の 受講目的</p>	<p>・他地域で実践されている地域活動の取組を参考として学ぶ。 ・他講師の講義を受講することで地域づくりの考え方について学び直しの機会とする。</p>		
<p>人財塾で 学んだこと 効果</p>	<p>・現在、中心市街地活性化を業務として担当していることから、効果的なプラットフォーム設計の考え方(飯盛講師)を意識しながら、事業設計を行っている。</p>		
<p>受講後の 取組</p>	<p>・国土交通省の「グリーンスローモビリティの活用検討に向けた実証調査支援事業」の採択を受けた実証実験を実施する中で、各関係機関が主体的に関わるプラットフォームの設計を心がけて取り組んだ。</p>		
	<p>年月</p>	<p>事柄</p>	<p>概要</p>
<p>2019.11月</p>	<p>グリーンスローモビリティ実証調査を実施する中での関係機関が主体となった取組</p>	<p>11/29-12/15 まで実施した実証調査の中で、Doまんなかモール委員会を中心に、クリスマス抽選会を企画運営いただき、行政がその動きを後方支援することで、結果的にグリーンスローモビリティ実証調査の利用につながった。</p>	

## ■報告者の取組紹介(展開の経緯・流れ)

### ●STEP0 空き家利活用勉強会(庁内政策提言グループ)の発足(2014年7月)

中心市街地で増加する空き店舗について、部局横断で利活用策を検討する勉強会が発足。当初は、各部署で興味のある職員が横断的に集まり、関係機関からのヒアリングや過去の計画の検証、他自治体の先進的な取組を調査し利活用に向けた提案とロードマップを含めた計画策定を行った。この空き家利活用勉強会で提案及び計画策定に関わったメンバーの中に、「政策提言や計画だけでは課題は解決されない。」という課題感が共有され、実際に行動を起こそうという機運が盛り上がった。



〈作成した提言書〉

### ●STEP1 宮崎ベースキャンプを立ち上げ、月2回のゴミ拾いを開始(2015年4月)

「楽しく活動する」、「とりあえずやってみよう!」をコンセプトに団体を立ち上げ、誰でもできるゴミ拾いからスタートした。その理由としては、目的や計画という「理屈」より「行動」を重視し、「とりあえず一つゴミを拾えば、一つまちは綺麗になる」という考え方に基づくもの。ゴミ拾い後は、1時間程度カフェで休憩しつつ、まちなかの変化や気づいたこと、アイデア等を共有する時間(雑談)をもった。その中から面白そう、楽しそうと盛り上がったアイデアは、とにかく実行した。



〈ゴミ拾い後の記念撮影〉



〈雑談の時間〉



〈実施①〉読み聞かせ



〈実施②〉本棚づくり



〈実施③〉みんなで朝ごはん



〈ゴミ拾い参加者も増加〉

### ●STEP2 夢プレゼンテーション大会の開催(2016年3月)

ゴミ拾い後の雑談の中から、TEDxをモチーフとした夢を語る場をつくりたいというアイデアが盛り上がり、夢プレゼンテーション大会を実施している。これは、「世界一挑戦しやすいまち」にすることを目標に、「まずは挑戦を口にしてみる、そして挑戦者を応援する文化を育む」というコンセプトで実施している。併せて、公共施設の新しい活用方法の提案として、プラネタリウムホールを活用するなど、私達の団体としても運営側として挑戦を続けながら継続している。



〈夢プレゼンテーション大会〉



〈SNS等での広報資料〉

### ●STEP3 各種ワークショップ等の開催・開催支援(2015年9月)

ゴミ拾い後の雑談の中から、各種のワークショップやセミナーを運営している。さらに、高校生や大学生、社会人等からセミナーやワークショップを企画したいという相談があるようになり、それらの開催支援を行っている。



〈熊本地震をきっかけにした震災対策WS〉



〈地域活動をする団体が連携したセミナー〉

### ■取組を進める過程で生じた課題

- ・メンバー間の活動に対する温度差や本業と家庭、地域活動とのバランス
- ・マンパワー不足
- ・情報共有
- ・団体のミッションや目標を明確にしなくても良いのかという迷い
- ・資金調達

### ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

- ・メンバー間の活動に対する温度差や本業と家庭、地域活動とのバランス
- ・マンパワー不足

#### ●平等を求めない団体運営

➢様々な活動にすべてのメンバーが参画できるわけではないので、平等に参画することを求めないような考え方に整理した。業務ではないので、参画できるメンバーが可能な時間に可能な部分を分担するような進め方で団体運営を行うように配慮しており、参加が義務感とならないように、「楽しく活動する」ことを重視し、無理な役割分担等を行わないような団体運営を心がけている。また、私達の団体だけではマンパワーが不足するので、できない部分は無理をせず、適切に頼ることで、逆に関係者等との連携が生まれる結果となっている。

- ・情報共有

#### ●新しいコミュニケーションツールの積極的な活用

➢年齢や所属等も異なり、全員集まれる場も少ないことから、新しいコミュニケーションツールを色々と模索しながら活用して情報共有に努めている。併せて、広報や集客手段としても様々なツールを試しながら運用している。一例として、「フェイスブックグループ」、「LINE@」、「Slack」、「Trello」、「Peatix」、「Google」関連サービス等の新しいツールを、必要に応じて活用している。

- ・団体のミッションや目標を明確にしなくても良いのかという迷い

#### ●明文化しなくてもOK！何となく共有されていればOK！

➢地域活動を進めていると、ミッションや目標を聞かれることが多く、明確にしなくても良いのかという議論はあったが、明確にすることで縛られるのではないのかという考え方から、ミッションや目標はあえて明確にしないこととした。また、名簿等や団体構成を明らかにしないことで、何となく趣旨に賛同する人が緩やかに参加できるような団体運営を心がけるようにしている。そのことで「Weak ties」(弱いつながり)でも参画できる仕組みとしている。

・資金調達

●セミナーやワークショップ開催での会費制、投げ銭制度の導入

➤大きな資金が必要なイベントは実施していないが、団体の活動に理解するメンバーからの年会費や、セミナーやワークショップも実費分は会費として集めることで資金を確保している。また、セミナーやワークショップで、団体の活動や今後の予定を説明し、趣旨に賛同する方からは投げ銭制度で少額を集め、今後の活動資金として活用させていただく取組も試行的に実施している。

■成果

活動を通して、特に高校生が意欲を持って地域活動に関わる土台を作ることができた。また、セミナーやワークショップ開催の実績が積みあがることで、運営ノウハウを構築し、別の団体が実施したいときの広報支援等も行うことができ、県内全体で、地域活動を行う団体や個人が増加している。

さらに、2016年から代表が業務として中心市街地活性化を担当しており、地域活動と市役所業務が連携することで、地域活動にこだわることなく、中心市街地活性化に向けて適切な手法(地域活動として行うのか、市役所業務として行うのか)を選択しながら進めることができている。

■受講前の課題・人財塾で学びたいこと

- ・他地域で実践されている地域活動の取組を参考として学ぶ。
- ・他講師の講義を受講することで地域づくりの考え方について学び直しの機会とする。

■受講後の取組、今後の方向性

他団体の活動に加え、各講師の実践事例は参考となる考え方が多かった。特に飯盛義徳氏の効果的なプラットフォーム設計は参考としており、地域活動と市役所業務が上手く連携した事例が生まれた。

●「宮崎市グリーンスローモビリティ実証調査実施事業」への地域からの支援

宮崎市では、中心市街地の回遊性向上施策の一つとして、国土交通省所管の採択を受けグリーンスローモビリティ実証調査を本年度に実施した(11/29-12/15)。その中で、検討委員会等の強い関係性の団体だけでなく、これまでの地域活動の中からのつながりがある団体や個人に協力をもらい、実証調査の利用者を増やす取組や広報活動に協力いただいた。

特に、地元デザイナー後藤修氏からは、ロゴや SNS 等で使用するバナー、看板等の多方面から協力いただいた。また、まちづくり団体である Do まんなかモール委員会からは、利用者を対象にした抽選会を企画運営いただき、17日間で延べ利用者数 5,901 名という成果につながった。



〈実証調査の様子〉



〈ロゴ、乗車チケット〉



〈抽選会ポスター〉

地域活動の展開が目的でなく、地域活動と市役所業務がお互いに連携・波及し合うことが非常に重要であると考えている。現在は、これまでの地域活動の財産を市役所業務に活用している状況であり、現部署では市役所業務が中心にならざるを得ない部分もあるので、他部署に異動した場合は、地域活動もさらに拡充させていきたい。

## 15. 東京都小平市 交流の場づくり～人は人で磨かれる

公益財団法人小平市文化振興財団事業課 神山 伸一 (H24 JAMP 受講)

<b>市町村 (地域) 概況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・190,005人(平成27年国勢調査)、面積 20.51K㎡</li> <li>・東京都多摩地域の武蔵野台地上にあり、都心からは26キロメートルのところに位置するベッドタウン。</li> </ul>										
<b>活動主体と 活動地区</b>	報告者の 活動経歴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・業務では、常に現場のある職場に所属し、地域づくりの最前線で仕事をしてきた。</li> <li>・いくつかの自主研究グループを立ち上げ、市民とともに学ぶ場、実践する場、人と人をつなげる場づくりに取り組んでいる。</li> </ul>									
<b>地域づくり の状況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京都小平市及び周辺の多摩地域では、自主研究会が少しずつ立ち上がってはいる。</li> <li>・自治体を超えての交流は少ない。</li> <li>・情報、経験が自治体の中にとどまり、横への広がりが進まない。</li> <li>・地域に飛び出し、人と人のつながりから学ぶことへの意識が低い。</li> </ul>										
<b>地域課題 または 問題意識</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域に飛び出し、人と人のつながりから学ぶことへの関心の低さ。</li> <li>・地域活動している者同士の連携</li> <li>・交流の場の少なさ。</li> </ul>										
<b>これまでの 取組 (受講前の 取組)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動の成果を発信すべく情報発信に取り組む。</li> </ul> <table border="1" data-bbox="335 1064 1436 1736"> <thead> <tr> <th>開始年月</th> <th>事柄</th> <th>概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H12.4月</td> <td>フパルク</td> <td>小平市職員の自主研究グループ。まちの緑について研究。特にビオトープに注目し、まちの中にビオトープがあることによる効果・効用を研究。研究成果を小冊子3冊にまとめた。研究成果を学校で実践するべく、学校ビオトープづくりを3校で行った。</td> </tr> <tr> <td>H22.11月</td> <td>ジャーナリスト楽校 in こだいら</td> <td>住みやすい街なのに伝わっていないのは情報発信がきちんとなされていない、情報発信スキルが低いからと情報発信をテーマに学ぶ連続講座を開催。受講者は自治体職員に限定せずにオープンで実施。すると自治体職員、市民、NPO、企業人など様々な人たちが交流する場へと発展。また、学んだことを実践に移したいと、ミニコミ紙への連載、ラジオCMづくり、コミュニティラジオ番組作りなど実践の場を自治体職員、市民と連携して実践。</td> </tr> </tbody> </table>		開始年月	事柄	概要	H12.4月	フパルク	小平市職員の自主研究グループ。まちの緑について研究。特にビオトープに注目し、まちの中にビオトープがあることによる効果・効用を研究。研究成果を小冊子3冊にまとめた。研究成果を学校で実践するべく、学校ビオトープづくりを3校で行った。	H22.11月	ジャーナリスト楽校 in こだいら	住みやすい街なのに伝わっていないのは情報発信がきちんとなされていない、情報発信スキルが低いからと情報発信をテーマに学ぶ連続講座を開催。受講者は自治体職員に限定せずにオープンで実施。すると自治体職員、市民、NPO、企業人など様々な人たちが交流する場へと発展。また、学んだことを実践に移したいと、ミニコミ紙への連載、ラジオCMづくり、コミュニティラジオ番組作りなど実践の場を自治体職員、市民と連携して実践。
開始年月	事柄	概要									
H12.4月	フパルク	小平市職員の自主研究グループ。まちの緑について研究。特にビオトープに注目し、まちの中にビオトープがあることによる効果・効用を研究。研究成果を小冊子3冊にまとめた。研究成果を学校で実践するべく、学校ビオトープづくりを3校で行った。									
H22.11月	ジャーナリスト楽校 in こだいら	住みやすい街なのに伝わっていないのは情報発信がきちんとなされていない、情報発信スキルが低いからと情報発信をテーマに学ぶ連続講座を開催。受講者は自治体職員に限定せずにオープンで実施。すると自治体職員、市民、NPO、企業人など様々な人たちが交流する場へと発展。また、学んだことを実践に移したいと、ミニコミ紙への連載、ラジオCMづくり、コミュニティラジオ番組作りなど実践の場を自治体職員、市民と連携して実践。									
<b>人財塾の 受講目的</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人づくりの効果的な実践方法を学ぶこと。</li> <li>・全国で活躍している実践者と交流すること。</li> </ul>										
<b>人財塾で 学んだこと 効果</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受講生の熱い思いと意識の高さ。</li> <li>・熱い講師陣から贈られる言葉の数々。</li> <li>・これまでの活動が理論的に整理され、自分の中で深化。</li> <li>・地域を作っていくのは「人」。人を育てることが地域づくりになるということを再認識。</li> </ul>										

<b>受講後の 取組</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自治体職員が地域の方々と一緒に学ぶ場づくり。</li> <li>・自治体職員の組織を超えた交流、学ぶ場づくり。</li> </ul>		
	年月	事柄	概要
	H28. 7 月	<b>小平市職員自主研究 グループK-u p (ケ ーアップ)</b>	小平市職員の様々なスキルをアップするための講座を実施。自治体職員、自治体職員OBなどを講師に招き、多様な知見を聞く場となる。参加者は小平市職員に限定していないため、他の自治体職員、議員、民間人など参加者も多彩。受講者同士の交流から、さらにいろいろな気づきを得られる場となる。
H27. 11 月	<b>タマガワ・リーグ</b>	東京都多摩地域の自治体職員の交流の場、学ぶ場として講座を実施。多摩地域の自治体職員だけではなく、多摩エリア外の自治体職員、議員、民間人など多様な方々が集まる場となる。	

### ■報告者の取組紹介（展開の経緯・流れ）

#### STEP 1 フパルク

小平市職員の自主研究グループ。まちの緑について研究。特にビオトープに注目し、まちの中にビオトープがあることによる効果・効用を研究。研究成果を小冊子3冊にまとめた。研究成果を学校で実践するべく、学校ビオトープづくりを3校で行った。

#### STEP 2 ジャーナリスト楽校 in こだいら

住みやすい街なのに伝わっていないのは情報発信がきちんとなされていない、情報発信スキルが低いからと情報発信をテーマに学ぶ連続講座を開催。受講者は自治体職員に限定せずにオープンで実施。すると自治体職員、市民、NPO、企業人など様々な人たちが交流する場へと発展。また、学んだことを実践に移したいと、ミニコミ紙への連載、ラジオCMづくり、コミュニティラジオ番組作りなど実践の場を自治体職員、市民と連携して実践。



### ■取組を進める過程で生じた課題

- ・コアメンバーの環境の変化により、集まる機会が少なくなり活動が停滞化。
- ・当初設定したテーマを達成し、その後のテーマ設定が難しくなる。

## ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

### ●実践を伴う場にする

単に勉強するだけ、講演を聞くだけに終わらず、必ず実践の場につながるような仕掛けをしている。また、自治体職員だけということにとどまらず、多様な人たちとつながる場になるよう意識し、いろいろな方々の意見を聞く場、交流できる場となるように考えた。

## ■成果

- ・小平市職員の学びの場を創出することができた。
- ・小平市職員と他の自治体職員、地域の方々とつなぐ場を抄出することができた。
- ・多摩地域の職員同士がつながる場を創出することができた。

## ■受講前の課題・人財塾で学びたいこと

- ・人づくりの効果的な実践方法を学ぶこと。
- ・全国で活躍している実践者と交流すること。

## ■受講後の取組、今後の方向性

- ・人財塾では、特に、地域を作っていくのは「人」。人を育てることが地域づくりになるということを再認識。人財養成やネットワークづくりに力点を置き、取組を深化させる。

## 小平市職員自主研究グループK-u p（ケーアップ）

小平市職員の様々なスキルをアップするための講座を実施。自治体職員、自治体職員OBなどを講師に招き、多様な知見を聞く場となる。参加者は小平市職員に限定していないため、他の自治体職員、議員、民間人など参加者も多彩。受講者同士の交流から、さらにいろいろな気づきを得られる場となる。

回	日にち	スピーカー	タイトル
15	2019年4月25日	堤直規	公務員の働き方 1年目・異動・出世・人付き合いのコツ
16	2019年5月30日	K-up	出張 K-up SIMULATION こだいら 2030 in 東村山
17	2019年7月12日	酒井直人	中野区長酒井直人の過去・現在・未来
18	2019年11月8日	諏訪頼史	SDG s って何？
19	2019年12月25日	佐久間智之	公務員のまちへの思いが集まることができれば
20	2020年1月11日	K-up	出張 K-up SIMULATION こだいら 2030 in 岸和田



## タマガワ・リーグ

東京都多摩地域の自治体職員の交流の場、学ぶ場として講座を実施。多摩地域の自治体職員だけではな

く、多様な肩書の参加者が集まる場となる。

●対話を重視

単に講演を聞くだけで終わることなく、必ず自分の感想や意見を発散する「対話」の時間を設けている。自分の気持ちを外部化することで、新たな自分を発見したり、他者の意見を聞くことで違う視点からの考え方を得られたり、その日に聞いた話が自分の中で深化していく。また、その場限りの出会いで終わらせないためにも対話は重要で、地域づくりのキーマンである人どうしが、この場で出会い繋がっていく。

回	日にち	スピーカー
1	2016年11月7日	富永一夫 (NPO フュージョン長生)、後藤好邦 (山形市)
2	2018年2月4日	今村寛 (福岡市)
3	2019年2月2日	諏訪頼史 (三郷市)、篠田智仁 (茂原市)



## 16. 大分県大分市 大分を学ぶ「大分学」～ 自分のまちの魅力を再発見～

大分市道路維持課 幸重 陽子 (H29 JAMP 受講)

<p><b>市町村 (地域) 概況</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人口：478,574人（2019年10月末現在）、面積：502.39K㎡</li> <li>・大分県の県庁所在都市</li> <li>・国内でも有数の産業集積地であり、工業統計調査では製造品出荷額は九州1位、全国15位。世界に誇れる工場群を有する。</li> </ul>														
<p><b>活動主体と 活動地区</b></p>	<p>報告者の 活動経歴</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2001年広聴広報課、2006年から文化国際課でフィルムコミッション業務に従事し、まちの魅力発信を県、市町村と共に行ったことがきっかけとなり、県内全域を多面的に学ぶ「大分学研究会」に所属し、運営委員となる。</li> <li>・子ども向けの絵本の読み聞かせボランティア活動を、20年間以上行っている。</li> </ul>													
<p>活動 地区</p>	<p>大分県内全域</p>														
<p><b>地域づくり の状況</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市民活動センター（ライフパル）が中心となり、NPO法人（210法人）、市民活動団体（210団体）、ボランティア団体（73団体）の地域づくりに直結する幅広い活動支援をしている。</li> </ul>														
<p><b>地域課題 または 問題意識</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域づくりの中心となっている担い手は、高齢者が多数を占めている。</li> <li>・地域ごとに活動の温度差があり、キーマンとなる人材育成が必要。</li> </ul>														
<p><b>これまでの 取組 (受講前の 取組)</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発足当初より「大分学研究会」運営委員として活動している。</li> </ul> <table border="1" data-bbox="344 1115 1457 1563"> <thead> <tr> <th>開始年月</th> <th>事柄</th> <th>概要</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>H23.7月</td> <td>例会（奇数月開催）</td> <td>県内市町村持ち回りで、テーマ（歴史・文化・産業・自然等）を決めて座学を行う。市長、自治体職員も講師として参加（大分市長は2017年に「大分市のまちづくり」について講演）。</td> </tr> <tr> <td>H23.10月</td> <td>おおいた魅力体験ツアー（偶数月開催）</td> <td>例会で学んだ内容の地域や、その時に旬な話題のある地域を見学するツアー。お昼は各地域の観光協会の協力を得て、郷土料理を楽しむ。</td> </tr> <tr> <td>H25.11月</td> <td>大分学検定 (11月3日文化の日に開催)</td> <td>大分県の事をどのくらい理解しているか。様々なジャンルから出題。H27から子ども検定も開催。</td> </tr> </tbody> </table>			開始年月	事柄	概要	H23.7月	例会（奇数月開催）	県内市町村持ち回りで、テーマ（歴史・文化・産業・自然等）を決めて座学を行う。市長、自治体職員も講師として参加（大分市長は2017年に「大分市のまちづくり」について講演）。	H23.10月	おおいた魅力体験ツアー（偶数月開催）	例会で学んだ内容の地域や、その時に旬な話題のある地域を見学するツアー。お昼は各地域の観光協会の協力を得て、郷土料理を楽しむ。	H25.11月	大分学検定 (11月3日文化の日に開催)	大分県の事をどのくらい理解しているか。様々なジャンルから出題。H27から子ども検定も開催。
開始年月	事柄	概要													
H23.7月	例会（奇数月開催）	県内市町村持ち回りで、テーマ（歴史・文化・産業・自然等）を決めて座学を行う。市長、自治体職員も講師として参加（大分市長は2017年に「大分市のまちづくり」について講演）。													
H23.10月	おおいた魅力体験ツアー（偶数月開催）	例会で学んだ内容の地域や、その時に旬な話題のある地域を見学するツアー。お昼は各地域の観光協会の協力を得て、郷土料理を楽しむ。													
H25.11月	大分学検定 (11月3日文化の日に開催)	大分県の事をどのくらい理解しているか。様々なジャンルから出題。H27から子ども検定も開催。													
<p><b>人財塾の 受講目的</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地方が活性化するまちづくりの先進事例を学ぶ。</li> <li>・各地で活躍する実践者（講師・受講生）との交流。</li> </ul>														
<p><b>人財塾で 学んだこと 効果</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私が事例発表した「大分学研究会」は、郷土愛の醸成に寄与する活動として全国的にかなり先進的な事例である事がわかった。検定試験では県内全市町村の首長賞の提供や県内の企業からの支援を受けていること、例会に首長や県内で活躍する人を講師として招へいする等の手法について、受講生からたくさんの問い合わせがあった。この活動の効果について振り返り、再認識することができた。</li> <li>・人材塾の講師の方々の活動は、地域の人材育成に直結する点がとても多かった。また、その時々々の事象からブラッシュアップしていく柔軟な体制作りも学ぶことができた。</li> </ul>														

受講後の 取組	郷土について学ぶ機会を更に発展させるため、誰もが入りやすいようにテーマを「食」として『郷土料理』に注目して活動を行った。		
	年月	事柄	概要
	H31.3	創作郷土料理本作成	次世代に伝えたい郷土料理を、県内を代表するンジしてもらい、レシピ本を作成。材料も地産だった。
R1.7月	創作郷土料理講座	「創作郷土料理本」に掲載した料理を、シェフ料理講座。地産地消の地元食材の魅力も併せて	

## ■取組紹介

### ●STEP1 例会

専門の知識を持った会員が多数所属しているため、会員自らが講師となり講演を行う。

- ・「西郷どんと大分を考える」(豊後大野市三重町史談会会長)
- ・「おおいた遺産と宇佐神宮」(NPO法人大分研究所所長)
- ・「中津と医学」(川島整形外科病院理事長)
- ・「大分弁について考える」(別府大学文学部文化学科教授)
- ・「国東半島の民族文化を考える」(国東市文化財課職員)
- ・「地元の魅力を再発見～ロケ撮影とまちづくり～」(幸重)



### ●STEP2 おおいた魅力体験ツアー

例会で学んだ事柄を見学する。

- ・「時空を越えた『せごどん』大分と西南戦争」  
(豊後大野市～佐伯市～宮崎県延岡市)
- ・「宇佐に古代ロマンと戦争遺跡を訪ねて」(宇佐市)
- ・「おおいた遺産モニターツアー『修正鬼会』」  
(国東市、豊後高田市)



### ●STEP3 大分学検定試験

「あなたはどれくらい大分県の事を知っていますか？」をキャッチコピーとして、大分の魅力を多面的に知る事で、地域に対する誇りを深めてもらう事が目的。

- ・歴史、文化、食、温泉、産業、方言、スポーツ等の一般問題100問、スペシャル問題5問を出題。120満点中110点以上を取ると大分学上級者に認定。



検定試験の様子



上級者への賞品  
(左は県知事賞トロフィー)



検定パンフレット

## ■取組を進める過程で生じた課題

- ・会員は徐々に増えているが年齢層が高い。
- ・取組のマンネリ化。
- ・検定試験受験者数が横ばい。

## ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

### ●新たな視点に立っての取り組み

老若男女に共通して関心のあるものは何かを考え「食」をテーマに取り組んだ。大分県内でも様々な郷土料理があり、幼い頃から口にしていた料理が県内の一流シェフ7人によって再現、アレンジされ、新たな魅力となるよう料理本の作成を行った。この料理本はシェフのお店をはじめとして、協賛団体、県内の観光協会にて配布。シェフ考案の料理は、それぞれのお店で提供した。

協賛：大分県椎茸農業協同組合、九州電力、学校法人田北学院、株式会社山英食品、おおいた和牛

※「食料産業・6次産業化交付金」（農林水産省）、「大分県地域活力づくり地域創生事業補助金」（大分県）を活用。



料理本（大分編）



レシピ掲載内容

### ●実践の場の提供

- ・各シェフの考案した料理を直接教わる料理教室を県内で開催。
- ・九州電力の協力で各営業所（大分、日田、中津、佐伯、三重）のクッキングスタジオをお借りし、全10回開催（定員20人）。全教室ともほぼ定員となり幅広い年齢層が参加（20代～70代）。うち3分の1は男性参加者。「郷土料理の新たな魅力を感じられた」「郷土料理を見直した」「地元の野菜の美味しさを実感した」と大変好評であった。



募集チラシ



講座風景



講座風景

### ●企業への呼びかけ

自分の住んでいるまちの魅力を知る事で地元住民との交流にも役立つと、社員研修の一環として大分学の活用を企業に提案した。これまで日本銀行大分支店、西日本シティ銀行大分支店、大分銀行、TOS大分放送、OAB大分朝日放送、FM大分、JR九州大分支社の社員が大分学検定試験を受験。

## ■成果

- ・地元紙に「検定試験問題」や、「大分学ミニ知識」として歴史や文化など様々なジャンルの内容で定期的に掲載されている。
- ・地元のテレビやラジオ番組内に「大分学」のコーナーが作られた。視聴者の方々からの反響が良く、沢山の質問が寄せられている。
- ・専門学校や、大学などから、「地元の魅力を学ぶカリキュラム」の一環として依頼を受け、会員が講師として教壇に立つ機会も増えている。



地元紙に掲載された検定試験問題

## ■受講前の課題・人材塾で学びたいこと

- ・地域活性化の先駆的な事例、持続可能な体制作り等の手法を学ぶ。
- ・地域の抱える課題解決に向けた取り組みを失敗事例も含めて包括的に学ぶ。

## ■受講後の取組、今後の方向性

### ●講師、受講生の仲間の取り組みから、先進事例を学び続ける

講義の中で空家対策、公園の利活用、商店街活性化等々、地域が抱える様々な問題を、まちの人を巻き込みながら継続性を持つ流れに発展させていくというプロセスを学ぶ事ができた。

受講後は、講師の方々、受講生と Facebook で繋がっており、今はそのツールから更に進化した活動を知ることができ、とても良い刺激を受けている。

私のまち大分市は「笑顔輝き、夢と魅力溢れる未来創造都市」という都市像を掲げており「大分学研究会」の活動を通してこの都市像に近づかせたいと考えていた。人材塾を受講したことにより、まちの魅力に誇りを持つ人たちを増やすためには、ツールに対してもっと参加しやすく触れやすい仕組み作りが必要である事がわかった。それが受講後の取り組み（「食」）に繋がり、新たな人達を巻き込む成果になった。

これからも、先進事例学び、様々な工夫を凝らしてまちの人達と一緒に活動していきたい。



H29 全国地域づくり人材塾交流会



講師の直接対話（飯盛慶応義塾大学教授）のメンバーと共に

## 17. 北海道岩見沢市 「地域をかきまぜる ～自然と繋がる人、モノ、コト～」

岩見沢市経済部商工労政課商工労政係（総務部秘書課広報係兼務）高瀬 浩樹（H31 JIAM 受講）

<b>市町村 (地域) 概況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口 80,622 人（10 月 31 日現在）、面積：481.02 K m<sup>2</sup></li> <li>人口のピークは平成 7 年の 97,042 人で、以降は減少。平成 18 年に隣接する北村、栗沢町と市町村合併。旧産炭地域の多い空知地方において、小樽や苫小牧の港へ石炭を運ぶための鉄路を中心に町が発展。国鉄が認定した全国 12 か所しかない「鉄道の町」の一つ。</li> </ul>		
<b>活動主体と 活動地区</b>	報告者の活動経歴	H28 年に庁内で立ち上がったシティプロモーションプロジェクトチームに参加。チームでトークイベント「ザワトーク」を立ち上げ、定期的開催。	札幌から 32 km (約 30 分) 新千歳空港から 67 km (約 60 分)
	活動地区	岩見沢市内全域	
<b>地域づくり の状況</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>青年会議所、生活サポートセンター「りんく」（生活困窮者支援相談窓口）、みる・と一ぶプロジェクト（東部丘陵地域の人や暮らしを発信するプロジェクト）などの団体が活発に地域活動を行っている。</li> <li>市立高校である緑陵高校や北海道教育大学岩見沢校の学生など、将来を担う人材による地域課題解決のためのプロジェクトが行われている。</li> </ul>		
<b>地域課題 または 問題意識</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>市内で展開されている地域活動を知らない人が多い。団体間のつながりが弱い。</li> <li>学生の取組を、その後も地域の中で継続するという動きは弱い。進学等で地域を離れる若者が、将来的に「戻ってきたい」「関わりを持ち続けたい」という傾向は弱い。</li> </ul>		
<b>これまでの 取組 (受講前の 取組)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域のことを知っているのは地域の人。ゆるい雰囲気雑談できる場づくりを企画。</li> </ul>		
	<b>開始年月</b>	<b>事柄</b>	<b>概要</b>
	H28.6 月	シティプロモーションプロジェクトチームへの参加	まちのことや人の想いを深く知るため、インタビューやアンケートを実施。facebook ページを作成し、定期的にまちのことを発信。
	H28.9 月	ザワトークの開催	プレ開催の参加者は 21 名。テーマは「あなたの考えるいわみざわらしさとは」と「いわみざわらしさを使って楽しいことを考える」
	<b>市民活動への参加</b>	ザワトークを通しての縁をきっかけに、さまざまな活動に足を運ぶようになり、庁内以外でのつながりを持つことができた。	
<b>人財塾の 受講目的</b>	事例の学習、多様な実践者との交流		
<b>人財塾で 学んだこと 効果</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>仲間との盛り上がり、仲間だけの盛り上がりになっていなかったか。誰もが入ってきやすい場づくりが必要だと感じ、これまでの取組を見直すきっかけに。</li> <li>できる範囲、手の届く範囲でまず実践し、自然と継続していることが重要と再認識。</li> </ul>		
<b>受講後の 取組</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>場づくりの継続で次第に人と人、コトが繋がっていき、新しい動きが生まれる。</li> </ul>		
	<b>年月</b>	<b>事柄</b>	<b>概要</b>
	H30.6 月 ～現在	<b>ザワトークの継続</b>	R1.12 現在でザワトークの回数はプレ開催を含めて 16 回、これまでの参加者数は延べ 440 名。この場をきっかけに得意分野を活かして発表の場に一步踏み出す人も生まれつつある。
	<b>エコラブごみ拾い活動の開始、市民活動への本格的な参加（私的活動）</b>	仲間と月 1 回のエコラブごみ拾いを開始。また、ザワトークでコラボした市民団体「いっしょに boardgames」の活動に本格的に参加し、ボードゲームを通じた地域活動を行っている。	

## ■報告者の取組紹介（展開の経緯・流れ）

### （1）シティプロモーションプロジェクトチームへの参加

平成28年4月、シティプロモーションを推進するためのプロジェクトチームのメンバー募集があり、「何か面白いことがやれるかも」という興味本位で自主的に応募し、集まった6名のメンバーでシティプロモーション事業をゼロから考えるところからスタート。

町の声を聴くことからはじめ、街頭インタビューのほか学生へのヒアリングをして、岩見沢に暮らす人がどのような想いを町に対して持っているのかを聞き取った。

また、自分たちの活動や想い、自分たちが足を運んだ市内の店舗や団体活動の情報を発信し、市民活動や市民の想いを広く知ってもらうことを目的にFacebookによる発信を開始した。



### （2）住民参加トークイベント「ザワトーク」の開催

トークイベント「ザワトーク」を開催。毎回、参加者の中からゲストを選び、その人の活動や経験、人生観などをゲストトークとして話していただき、そのトークをきっかけにテーマに沿ってグループトークを行う。当初は、人を集めて多くの人の声を聞くことが目的であったが、自分の想いを語ることで生まれる自己分析や自己肯定感、他人の想いを聞くことで得ることのできる気づきなどトークそのものに価値が生まれてきた。



### （3）市民活動への参加

それまで市役所内にしかいなかった知り合いが、ザワトークをきっかけに広がり、市内で行われる市民活動や教育大岩見沢校の学生の活動など大小関係なく足を運ぶようになった。多くの活動に参加するうちに「活動する人たちがどういった想いで活動しているのか」「その活動を続けていくためにはどういった支援が必要か」など、市民活動の在り方や継続性という新たな視点で考えるようになった。



## ■取組を進める過程で生じた課題

シティプロモーションという言葉のイメージから、市民はもちろん市役所内部においてもメディアを使ったPR活動を期待する声が多く、シティプロモーションを手段として「まちに関わりたい」「まちに関わる人を応援したい」「まちのことを人に伝えたい」といった地域参画総量の向上を図るプロジェクトチームとの見解の相違が見えた。

また、地域づくりに強い想いを持つ参加者の中には、ザワトークからの施策展開を期待する参加者もあり、ザワトークの位置づけを明確にする必要が生じた。

## ■効果を育むため、課題解決のために留意したこと

「地域の人、そしてその人が起こすコト、生み出すモノが地域の宝。みんなが主役。みんなの想いを知ってもらおう。」という考えのもと、ザワトークのゲストの経験・活動・人生観をより深く掘り起こすためにテーマやグループトークの進め方を工夫したほか、全道に放送されるFMラジオを使ったPR活動の中に多くのザワトーク参加者を出演させ、多様な人生を歩む人が暮らすこと、この町でも面白いことができることを発信した。

## ■成果

①ゲストの活動に対する想いを参加者がより理解しやすいように、トークだけではないコラボ企画を実施。

ボードゲーム×ザワトーク  
テーマ：頭の体操



音楽×ザワトーク  
テーマ：うたをつくろう



学生×ザワトーク  
年1回学生の企画で開催



コラボ企画をきっかけにして、ボードゲーム団体の活動や音楽活動をするバンドのライブ、学生の企画する地域活動にザワトーク参加者が足を運ぶようになる。

②ザワトークをつながりの場として、数々の新しい動きが生まれる。

- ・ レンタルスペース経営者とフリーターの若者がつながり若者が起業。
- ・ 引きこもり経験者がバンドマンとの出会いをきっかけに音楽に目覚め、一人でライブ鑑賞に出かけたり、イベントで演奏を披露。
- ・ 塗装業の経験があるフリーターが地域住民の企画した駅舎再生プロジェクトに参加し、経験を活かしてペンキ塗りに活躍。
- ・ 大学生と地域おこし協力隊が意気投合し、空き家を手作りでリノベーションしてシェアハウスとして活用。
- ・ ラーメンを商品化したい飲食店経営者とデザイナーがつながり、商品のパッケージを制作。



③ザワトーク参加者が地域のコーディネーターになる。

参加者が多様なつながりを持ったことで、暮らしの困りごとの相談先やビジネスパートナーの紹介、仕事の斡旋、移住者に対する先輩移住者の紹介などをするようになり、一人一人が地域のコーディネーターになりつつある。

## ■受講前の課題・人財塾で学びたいこと

- 全国の活動実践者の手法や想いに触れ、自らの取組に取り入れることができるヒントを得る。
- 仲間とどのように繋がって、どのように繋がりを広げているか学ぶ。

## ■受講後の取組、今後の方向性

### 【受講後の意識の変化】

- ・人財塾が、取組が仲間内の盛り上がりになっていないか。置いてきぼりをつくらないことを考えるきっかけに。
- ・できる範囲、手の届く範囲で自らがまず実践することが重要と再認識。
  - 誰もが気軽に参加でき、誰もが主役になれる、そして楽しく続けられる場をつくりたい。
  - 「ザワトーク」「エコラブごみ拾い」「いっしょに boardgames」による場づくり

### ・ザワトークの継続

ザワトークはプレ開催を含めて現在 16 回開催し、参加者数は延べ 440 名。結論や答えを出すことを目的にはしておらず、毎回設定しているテーマを話のタネにして、参加者同士が気楽に語り合う場としている。自由なトークの中で自分の想いを語り、みんなの想いを聞くことにより、参加者に新たな気づきやつながりが生まれている。参加者募集は Facebook と HP・広報、ポスター掲示での周知のみで動員は行わないこととしている。毎回 25 名程度の人が集まってくれているが、行政職員の参加は少ない。市民の声を直接聴くことのできる貴重な機会であり、「人財育成」の観点からも行政職員の参加も期待したいところである。今後の課題の一つとして新しい仕掛けが必要と考えている。

### ・エコラブごみ拾い（私的活動）

シティプロモーション事業を通じて多くの市民活動に足を運んだ経験から、自らが主体となって新たな地域活動を行いたいと考えていたところ、滋賀県を訪れた際に東近江市でエコラブごみ拾いを行っている方と出会い、それをきっかけに仲間と月 1 回のごみ拾いを行っている。参加者がごみを拾うことをきっかけにトークを交わしゆるいつながりをつくること、ごみを拾うという小さな地域活動を入口にして、市民活動への参加のハードルを下げることを目的としている。



### ・いっしょに boardgames（私的活動）

ザワトークの参加者が行っている市民団体「いっしょに boardgames」のイベントへ足を運ぶうちに「ボードゲームを通じて人とつながり、岩見沢のことを知ってもらおう。」という理念に共感し、本格的に活動に参加するようになった。



### 【ゆるい場づくりだけで自然とゆるやかに繋がる「人」や「コト」】

シティプロモーションプロジェクトチームの発足当時は「仕事」として捉えていた活動も、様々な場に足を運び、次第に知り合いが増え、活動や想いに触れていくことで「仕事」という感覚はなくなった。ザワトーク、エコラブごみ拾い、いっしょに boardgames、いずれの活動も今は「ライフワーク」という感覚に近い。これからも仲間と楽しく活動しながら、ゆるい場づくりで地域をかきまぜる。そして、誰かの「やってみたい」をみんなでお支えし、できる範囲で手を差し伸べるような風土、関係性を様々な活動を通じてつくっていききたい。みなさんのザワトーク参加もお待ちしております！

